



始



特219
984



先驅者の道

國枝史郎



429
244

先驅者の道

目次

下田の港	三
良い土を	二
富士山	六
部落の人々	三
兩雄	四
明覚行者	四
部落の葛藤	七
暴動	五
明るい話	三
迫害者	六
巫女の家	一〇
沼のほとり	二八
救ひに行く人々	二四
人情	一四

行者と媼	一五
明覚と小源太	一八〇
さかり場	一八
めぐりあひ	一九
郊外異變	二三
枕屏風	三五
空家の中で	二六五
傍若無人の群	二七五
七花八裂	二八五
改装工事	二九五
心のふる里へ	三〇九
梨本村で	三三〇
富士玲瓏	三三八

先^{せん}
驅^く
者^{しゃ}
の
道^{みち}

装幀・吉田貫三郎

下田の港

伊豆の下田港では夏になると遊山船をうかべて酒をのむといふ風習があつた。

嘉永五年の夏の夜であつたが、その遊山船が澤山に出て灣山を漕ぎ廻つてゐた。

酸漿提灯を掛けつらね、赤毛氈を敷き、藝者をはべらせ、三味太鼓で景氣をつけた屋形船が、玩具のやうに可愛らしい灣の内を、岸に添つたり、碇泊してゐる親船のまはりをまはつたりしてゐる様子、風流でもあれば詩的でもあつた。

その一隻の船に數人の武士が乗つてゐた。

その中の一人——身長が六尺もありさうに思はれる立派な武士は、所用あつて港の支配の下妻能登を訪ねて來た葦山の代官江川太郎左衛門であつた。

『葦山様』

と、太郎左衛門の前に坐つてゐた能登が云つた。

『……さういふ人物でございますので、物はためし、その明覺と申す行者をおさがしになり、良士の在場所おたづねになりましたら……』

『さやうや』

と太郎左衛門は半信半疑の顔をして生返辭をしたが、

『いや好うお聞かせ下さいました。まことに尤も、物はためし、すこしでも爲になりさうな人物でしたらぶつかつて意見を聞くのが得策、ではその明覺とやらいふ行者を……』

『それがおよろしうございます。……明覺行者は、この下田の在、天城山の麓の梨本村へも度々参る

とのことでございますが、七月の富士開山後はずつと富士山に……』

『では早速人をつかはし探がし出し……いや私も土のことでは苦心をいたします』

『それも是も皇國の爲で……』

太郎左衛門は黙つて頷いた。

『それお酌を……』

婢が銚子を執つた。

『いや、最早充分……』

太郎左衛門は盃を伏せ、

『定量を過しては……』

『はつ』

かつて水戸齊昭侯に招待され馳走になつた時、齊昭侯が自身銚子を執つて酒をすゝめたのを、私の定量は一合、すでに定量だけいたゞきました故に辭退つかまつるといつて、盃を伏せたといふ逸話を耳にしてゐたので、能登は思はず『はつ』といつて恐縮した。

藝者たちは、當時伊豆一圓の人々から『泣く子も黙る』とまで畏敬されてゐる葦山様の席に侍つてゐるといふので、光榮とも感激ともいふべき感情から、いつもの傳法の港、藝者の態度など何處へやら、身をひきしめてかしまつてゐた。

船は、後年、吉田松陰が、アメリカ船へ乗りこまうと、その機をうかゞひ身をひそめてゐたといはれる辨天島の方へ、ゆる／＼と漕がれて行つた。

ところが、もう一隻の船が先刻から、この船を尾行けるかのやうに執念ぶかく従いて來た。

それは傳馬船で、燈火といへば行燈一基、人はいへば、毛氈も敷かない薄縁の上に、座布団を腹の下にかひ、腹這ひになつてゐる三十がらみの武士と二十五六の藝者とが乗つてゐた。

富士額、窪み加減の眼、高い鼻、細い頤、それは豐滿の肉と多情とで名のある下田女とはおほよそ異つた、精神的の美しさと粹とを持つた女であつた。

自分の膝の前を横切つて腹這ひ、兩肘を立て、掌へ頤をのせ、鎌首のやうに顔をもたげ、先へ進んでゆく屋形船の中の二人の武士の會話へ聞耳を立てゝゐるお客——本庄小源太の横顔を眺めながら、

その藝者——お鳥の考へてゐること、いへば、

(小源太さんともお別れだ。わたしは、こんな厭らしい藝者商賣から足を洗ひ、清淨いな山の娘になるのだから)

といふことであつた。

(それにしてもこの小源太さんといふ人、變はつてゐるわね)

一度も自分に對していやらしい眞似をしたこともなければ口説いたこともない。土地の船大工の棟梁の權右衛門爺つあんといふ二人だけで來て自分をよんでくれてひつそりと飲むかと思ふと、江戸の浪人や破落戸じみた者を大勢つれて來て、陽氣にさわぐこともあり、さうかと思ふと一人だけでやつて來て、自分だけをよんで、とりとめのない、雑談をして機嫌よく歸つてゆく。つゞけて毎日のやうによんで下さるかと思ふと半年も姿を見せないことがある。『どうなさいましたの?』『旅をしてゐた』『どちらへ?』『長崎へ』といふ有様である。

どこの藩に仕へてゐるともない浪人らしいが、それにしても金使ひの綺麗なこと……

何か大きな仕事を人に知らせずやつてゐるといふやうな様子でもあれば、何か大きな仕事はないかと、それをひそかに探してゐるといふ風でもあつた。

(わけのわからない人)

それでゐてそのわけのわからない小源太に、彼女は心が引付けられるのであつた。

(この人へだけは妾のこれからの行く道生きる道を打ちあけて左様ならを云つて、お別れを告げたり名残りをおしみたいのだが……)

——でも、それを打ちあけた結果が、この人の淡泊した氣象から、

『然うか』

と、たゞ一句で片付けられ、追つかけて訊ねてもくれず、意見も聞かしてくれなかつたら……

(却つて寂しいわ)

——それにしても、たいがい今夜が逢ひまひになるのだから矢張りこの機會に打ちあけて……

そこで、

『小源太様!』

と呼んだ時、

『殿に楯つき殿のお仕事に邪魔ばかり入れました鳥居甲斐守様も、とうとう讃州の丸龜様へお預けとなり、體のよい流罪……』

といふ下妻能登の聲が先へ行く船からきこえ、途端に小源太の顔がグツと上向き、片手が側刀の柄へかゝつたのが見えた。

お鳥はハツと息を呑んだ。

『さやう』

といふ太郎左衛門の聲がきこえた。

『林家——儒官出の人物としては機識もあり膽略もあり人傑には相違ないが……お預けとなつて幾年になりますかな……お氣毒な』

英雄であると共に學者であり君子であるこの人は、敵に對しても蔭では悪聲を放たないのであつた。

『甲斐守殿にも、他人の功を妬んだり、他人の事業を疑つたりする缺點がありました、その甲斐守殿を取巻く者共に、甲斐守殿以上の小人が多數をりましたことが、あつたらあれほどの人材を……』

と、又、能登の聲がきこえた。

『成程』

といふ聲は太郎左衛門で、然うだとも然うでないとも断定しないで、成程と云つて聞きながしたの
は、やはりこの人のおほらかな精神から來てゐるらしかつた。

『本庄茂平次などといふ悪人をまで身邊に近づけましたのが……』

『成程。……その本庄茂平次といふ男は、たしか護持院ヶ原で、井上清太郎といふ者のために、親の敵として討取られた……』

『はい、その本庄茂平次にごさいますして、元はなんでも長崎の商人だつたとのこと……』

『その茂平次ならわしとも間接に關係がある。といふのはわしにとつては師匠の高島秋帆先生へも、その男、禍の手をのびしたことがあつたので……』

『は、あ左様でございましたか。ところで噂によりまするとその茂平次には一人の弟があらまして』

『うむ』

『兄茂平次の主君鳥井甲斐守様を失脚させた人々……』

『わしもその一人にあたるが……』

『これは恐入りました。……その人々を怨み、仇をすると申し……』

『愚な！』

『は、まことに愚な男にごさります』

——この時小源太が半身を起し、膝の脇へ刀を引付けた。

『いづれにいたしても甲斐守殿は儒家出身の身でありながら、御町奉行にまで成られたお方、傑物でござる。たゞ……』

と云つて來て太郎左衛門の聲が切れた。

この時小源太の右手の指が小柄の柄にかゝつた。

『たゞ遺憾だつたのは、あのお仁が保守主義であられたことであらう』
猛然と小源太が立上がつた時、小源太たちの傳馬の横を屋形船が通り、それが傳馬の胴に當たり、その勢ひで、今度は傳馬の船首が太郎左衛門たちの船へぶつかつた。
『無禮いたすな！』

『注意いたせ！』

太郎左衛門の船から家臣たちの叱咤する聲が起り、數人の顔が此方を覗いた。
もうその時には小源太は彼等の方へ背を向け、顔を俯向け、坐つてゐたが、

『お鳥、酌しろ』

險しい鼻、張の強い顔、總髪の太い鬚、小源太の顔は男性らしかつたが、この時は、その切長の眼が据り、キラ／＼と剃刀のやうな光を放ち、むしろ凄かつた。

『は』

男性からの殺氣を身に感じ、お鳥は、顫へさうになりながら、銚子を取つた。

グツと盃をあほつた時には、この船は、太郎左衛門たちの船から數間はなれてゐた。

この出來事があつてから十日あまり経つた時、葦山の江川太郎左衛門の屋敷の裏の山では山雀や小雀が啼競ひ、夏の晴れた日のさわやかさを奏でながら、江川屋敷の方を眺めてゐた。

良い土を

江川屋敷は『健康の建物』の代表のやうであつた。

この日江川太郎左衛門は門弟の鴨下庄三郎を前へ置き、その有名な書齋であり研究室であり工場であるところの大書院で話してゐた。

『これはすこし厄介な依頼かもしれぬが我慢して引受けてくれ』

『は』

『ほかでもないが、其方も知つてゐるとほり、わしは今、大砲鑄造に一生懸命なのだ』

『存じてをります』

『大砲を鑄るには反射爐をこしらへなければいけない』

『殿様にはその反射爐をおつくりになり、もう幾個か大砲をお鑄りあそばした筈でございますが……』

『そこだ、その反射爐は、あのとほり小さいし不完全なので出來あがつた大砲も不完全で、實用にはあまり役立たないのだよ』

『……………』

『そこで私はもつと大きな完全な反射爐をつくりたいのだが、それをつくるには鋼鐵鑄造の高熱に堪

へられる煉瓦から製造してかゝらなければいけないのだよ』

『は』

『また然ういふ煉瓦をつくるには可い原料——土だね、よい土を手にいれなければいけないのだ』

『殿様には是迄もその可い土をお手に入れようと、富士や天城や江梨の山々をお跋涉きあそばした筈でございますが……』

『さうなのだよ、その結果、江梨から良土を目付けて煉瓦を焼いて小反射爐をこしらへたのだが、やはり煉瓦が、耐熱方面で思はしくなかつたのでね。……どうしても千七百度ぐらゐの熱に耐へてくれなければね』

『千七百度？』

『さやう。……尤、鐵は七八百度鋼鐵は千三百度で鎔解し、白金になつてはじめて千七百度の高熱を必要とするのだが……しかし矢張り白金をとるかすぐらゐの熱に堪へる煉瓦でなければ……』

『尤に存じます』

『ところが然ういふ煉瓦を焼くには今もいつたとほり可い原料——良土を手に入れなくては……』

『……』

『そこで其方へ依頼みたいことが出来たのだ』

『ではその良土を私が……』

『いや／＼わしにさへさがし出せない良土を其方にさがせといふやうな無理をいふ私ではない』

『……』

『良土の在場所を知つてゐるらしい人間が一人ゐるのだ』

『それは……』

『行者だ』

『……』

『富士や御嶽や大峯を渡りあるいてゐる行者ださうだ』

『あゝ行者でございますしたら……』

『良土の在場所なども知つてをるかもしれぬ。……その行者をさがして連れて來てもらひたいのだ』

『何んといふ名の？』

『明覺といふ名ださうだ。……ま、ゆつくり話さう』

あくまで高い鼻、あくまで大きい眼、あくまで廣い口——一見英雄らしい顔を微笑させて、太郎左衛門は庭の方を見た。

庭には夏の陽が暑さうにあたつてゐた。

おほよそ七百年を経てゐるこの江川の屋敷は、立木も古く、庭の石も昔も古かつたが、さういふ古い石や木にまじつて、百日紅が落花を蛾のやうに舞はせ、みづ／＼しい百合が白い風車のやうな花を咲きそらはせてゐる姿は、新鮮で潑刺としてゐて、古武士の魂を持ちながら、新思想家であり、先驅的科學者であるところの主人公太郎左衛門の面影を、髣髴させてゐるやうであつた。

『その明覺といふ行者はね……』

と太郎左衛門は庭を見てゐた眼を庄三郎へ返して云つた。

『いろ／＼變はつた噂のある男なのだよ。……役ノ行者がいろ／＼奇蹟的の噂のある男のやうにね……』と云つて、前鬼後鬼を使つて、谷に岩橋をかけたたり、山神の一言主を木の叉に呪縛したり、鐵鉢にお母さんを盛つて、空を馳せて唐へ行つたりしたといふやうな、荒唐無稽のおこなひをしたといふのではない……いや、わたしとしては、たとへそんな噂を聞いたところで、信じもしないが。……しかし、その明覺といふ行者だが、山川を跋渉して、荒行をする傍、金山を發見したり、銅山や銀山を發見して、人に教へて、諸人の利益を計つたり、藥草や毒石を採集して、諸人の病氣を治したりするといふことだ。……そこだ、私が眼をつけたのは。……さういふ行者のことだから、耐熱煉瓦の原料になる可い土の在場所も、知つてゐるかもしれないとな。……そこでその行者を其方に連れて來てもらひたいのだ』

かう云つて來て太郎左衛門は部屋の左右を何氣なく見廻した。

幾百冊とない和漢洋の書物が積んである、小反射爐で鑄造つたゲウエル筒やドンドル砲が置いてある、品川砲臺の模型がかざつてある、ガラナイト破裂彈の殻が箱に入れられて据ゑてある、葦山笠が柱にかけてある、西洋型軍艦の製圖が壁に張つてある、部屋は雜然紛然としてゐる、物品の紛失や散逸をおそれて朝夕の掃除をゆるさないところから、物品の上や疊には塵埃が溜つてゐる、その疊は數年來敷替へないところから赤茶けてゐる、ところ／＼擦切れてゐる、障子はといへば古紙ばかりだつたので日光をさへろ／＼透さうはしないのであつた。

すべて是等は儉約から來てゐるのであつた。

支配地こそ伊豆、駿河、相模、武藏、甲斐の五ヶ國に渡り、十七八萬石に達してゐたが、代官として太郎左衛門のいたゞく祿高はわづかに八百俵、しかるに有能の士と見ると祿を裂いて召抱へる、研究、發明、製造には費用を惜まない、友人知己の貧しい者への救助にも金を惜まない、天下の副將軍水戸齊昭や勘定奉行の川路聖謨や、佐久間象山、高島秋帆、橋本左内、若年寄本多越中守、藤田東湖、渡邊華山等當時一流の人士との交際にも出費を意としない。

出錢がおびたゞしかつた。

そこで自分と自分の家庭の經濟を詰め、衣類は木綿、食事は一汁一菜と定め、書院などもそのやう

にみすぼらしいほどにも質素なのであつた。

『ところが困つたことには明覚行者の居所が曖昧なのだ』

と、眼を又庄三郎へ返すと太郎左衛門はいつた。

『たゞし毎年の例によれば今頃は富士の御殿場登山道の九合目の岩室あたりに籠り、行をしてゐるといふことだ』

と太郎左衛門はいつた。

『庄三郎、氣の毒だが出かけていつて、明覺をつれて来てはくれまいか』

『かしまりましてございます』

と庄三郎はお受けをした。

『どこ迄も探し、必ずお連れいたしますでございます』

二十五歳の庄三郎は稀に見るやうな美貌の持主であつた。心の窓ともいふべき眼の美しさは無類で、偶然顔を見合はせた人でも、その眼を見ると、氣持が和み、この人へなら何んでも打開けられるといふやうな心持ちになるほどであつた。庄三郎が笑ふと眼が四つになるといふはれた。それは、彼が笑つた拍子に、口の左右へ、小指で押したやうな靨が出来るからで、それが出来た途端、彼の顔は、あゝ前髪が欲しいなと思はれるほど初々しくなつた。

庄三郎はその眼で、敬愛心酔してゐる師匠の顔を見詰めた。

五十二歳といふ年よりも老け、卯の花のやうに純白の頭髮が、いまさらに神々しく思はれた。

（大砲鑄造、大反射爐建設——いや新興日本の兵制を完備して、先進歐米諸國にヒケを取るまいとなさる目的のためには、そのやうに行者山伏の類へまで注意を注ぎ良士をお手に入れようとなさる……何んといふ烈しい愛國のお志であらう！……わしは身を粉に砕いても屹度その明覺とかいふ行者をさがしだし、お連れしなければならぬ）

そこで庄三郎は疊へ手をつき、誓ふやうに、

『必ずわたくしその明覺と申す行者をさがしだし、お連れいたしますでございます』

と繰返して云つた。

旅装をととのへた庄三郎が、葦山を發足つたのはその翌日のことであつた。

數日を費した後庄三郎は御殿場口まで来た。それから登山道を辿つて富士山へ向かつた。

お山開きがあつて間もない頃だつたので白衣の信者たちが先達案内され、金剛杖を突きながら登山してゐた。

（明覺といふ行者は、九合目の岩室に住居して行をしてゐるといふことだから、まづその九合目の岩室へ……）

かう思つて、道を辿つてゐる庄三郎であつた。すゐぶん登つた。

道端には石楠の花が咲いてゐたり熊谷草だの辨慶草だのが咲いてゐ、まだ這松は生えてゐなかつたが、氣まぐれにこの邊へまで下りて來た雷鳥が、空を翔けるには覺束ない翼で、高根茨やしらの根元を潜つてゐた。

登りに登つた。

(おや)

と、あまり人の姿が身の周囲に見えなくなつたので、變に思つてあたりを見廻した時には、夕暮になつてゐて、四邊は墨繪のサツパリとした相をなしてゐた。

(道に迷つたらしい)

そこで何うしたものだらうかと思つた。

富士山

(三合目までは覺えてゐたが、それから後は、餘り先を急いだので夢中だつた。……こゝは何合目かしら?)

庄三郎は尙あたりを見廻して見た。

土といへばがらゝの焼石まじりの土であり、植物といへば、地を這つてゐる松類が多く、もう五合目近い地域であることを思はせた。

(要するに四合目と五合目との中間地帯なのだ)

と、庄三郎は思つた。

(それにしても何時何處で道に迷つたのだらう?)

——いや夫れより、是から何うしたものだらうかと思つた。

正當の參道を辿つてゐるならお助小屋にも逢ふことが出来るし人にも逢ふことが出来る。横道へ反れた現在では、それらの助けは望まれない。

と云つて茫然としてゐれば、氣候の變化の甚だしいお山では、霧が巻き、雲が閉ざし、雷が落ち、崖崩れが起りして、何時不測の災を受けるかもしれない。

(困つたぞ)

と庄三郎は當惑しながらも、心をおちつけようと、地へ坐つた。

夕陽が少し残つてゐて、先刻通つて來た太郎坊邊の空の雲を猩々緋の色に染めてゐた。

——さりとして、何時までもこんなところに坐つてゐることも出来なかつた。

(後へ引返すかな)

と思つた時、

『おや貴郎様も毛間の部落へいらつしやいますの』

といふ女の聲がきこえた。

驚いて見ると自分の横に若い女が立つてゐた。

『うや』

と、漠然とした聲で庄三郎はいつた。

毛間の部落といふ言葉の意味がわからなかつたからである。

『でも、毛間の部落へいらつしやらないのなら、こんな道へいらつしやる筈ありませんわ』

と云ひ、女は庄三郎と並んで坐つた。

白の行衣に同じ色の手甲脚絆をつけ、菅笠を背にし金剛杖を持つてゐるのでお山のぼりの信者に相違なかつたが、髪を水髪にし、肩の邊につくねても、争はれない艶めいた口、仇つぼい眼に、素人女でない所をあらはしてゐた。

『では何處へいらつしやいますの？』

藉りにも相手は漂々しい武士なのに、そんなこと心にも止めないといふやうに、女の言葉つきは素直で大膽であつた。

『道に迷つたのだ』

庄三郎としては、これは可い女を見つけた、本道へ戻る道を訊かうと、

『やはり信心で登山する者だが、参道へ出るには何う行けばよいかな？』

『さあ此處まで迷つておいでになれば、本参道へ戻ることに、ちよつと困難しく、いゝえ、口でお教へしても、おわかりになるまいと存じますの』

『變だな、然うひどく迷つたのかな』

『さいの河原の辻でお迷ひになつたのでございませうよ。……四筋の道のうちいちばん廣い道をお執りになつたのでございませうよ』

『さうだ』

『だから不可なかつたのですわ。でも、この道は、五六町あるくと直ぐ細くなり、それにだん／＼下りになるので、これは道が違つたとお感づきになる筈ですわ。……もう十町もあるいてこらんなさいませ、道が消えて無くなりませうに』

『それは困つたな』

『お山へは初のお登り？』

『御殿場口からは初だ』

『だからですわね』

『お女中、そなたも信心の登山であらうな？』

『は』

『では頂上を究めるのであらう』

『頂上をきはめ、奥の院へお参りし、歸るところでございますの』

『それは残念、もし登るのなら本参道まで案内してもらはうと思つたのだが……』

『さうですねえ。……日さへこんなでなかつたら……すぐに暮れるし……家へはまだ遠し……』

『これはいよく困つたことになつたぞ』

當惑した庄三郎は所在なさうに冠つてゐた編笠をぬいだ。

夕陽が此處までも届いてゐて、それに照らされた庄三郎の顔は、瑪瑙の珠を白絹で包んだかのやう

に玲瓏として見えた。

『まあ……』

それは引息と一緒に思はず洩らした女の聲で、

『何んて美しい……』

と、つゞけて叫ぶやうにいつた時、地に突いてゐた女の指が、手甲の先で草の花を引捲つた。

『えゝゝそれでは妾がご案内を……』

『それには及ばぬ、却つて氣の……』

庄三郎は立ちあがり、

『ナーニ一人で元來た道へ……』

谷から湧きあがつた濃い霧が二人をつゝんで峰の方へ延し、後からと襲つて來るので、今まで

見えてゐた眼の下谷も樹海も山骨も姿をかくした。

と、高い法螺貝の音が背後の方から聞えて來た。

『まあ』

と女の聲が霧の中からいつた。

『あれは明覺様が霧をお拂ひなさらうとお吹になる法螺の音だよ』

『なに明覺？』

と、これも霧の中から庄三郎の聲が叫び、叫んだ時には、法螺の音のきこえる方へ走つて行くその

姿が、薄墨で描いたやうに見えた。

『あぶない！……この霧に！……無茶な！……谷へでも落ちたら！……』

行者の貝の音に吹きはらはれたのか、それとも山特有の氣候の激變の結果か、一尺先さへ見透せな

かつた濃い霧が、それから暫く経つた時には綺麗に暗れて、女ばかりが道に立つてゐた。

(美しいお武家様!……それもあの美しさは、見る人の心を清浄にする美しさだ)

女は尙庄三郎の走つて行つた方を眺めてゐた。

『お鳥ではないか』

と聲をかけたのは、女が二三步あるきだした時であつた。

女は振り返つたが、

『まあ本庄さん』

『やはりお鳥だつたか』

と、野袴にぶつさき羽織、脚絆草鞋、旅姿の本庄小源太は、かう云ひく悠々と寄つて来た。

『似たやうな女とは思つたが、まさかこんな所にと……しかしお鳥だつたか……登山か』

『歸りですの』

『歸り? 何處へかへるのか?』

『家へ』

『家は下田の筈だが……』

『あれはつとめ先ですわ』

『成程。……それで實家はこんな方面なのか』

『毛間の部落ですの』

『ふ——ん』

『あなたこそ何處へ?』

『登山ではない』

『え、くあなたのご性質なら……ですから何處へ?』

『この方面へ』

『でも此方には毛間の部落と、刑部の部落と、落合の部落、三つの部落しかありませんのに……』

『その一つへ参るのだ』

話しく二人は歩くのであつた。

道は下りになつてゐた。

さつきの霧で白山女郎花や藤旗棹の花が濡れて、寶石へ露でもかゝつたやうに見え、見上げられる左手の斜面の山猫柳やたけ樺の緑の葉も霧に濡れたため色を増し、そこへ夕陽がからまつて、幹が明るんで見えるかと思へば、群葉が蔭をなして、濃い緑となつたりして、木綿の飛白か飛模様のやうに見えてゐたが、その反対側は、ガツプリと開けたパノラマ景で、そこにはまだ霧が残つてゐて、それ

が土佐繪の空間かのやうにのびやかに横に曳かれてゐるかと思ふと、狩野派の雲かのやうに、重々しくモク／＼と盛上がつてゐる、それらを抜出て、三角のやうな山の峰や原始林のそつくりや『鬼の押出』のやうな岩やが、あらはれて見え、それらの遙の彼方には、信濃の國の山川が低く、平伏してゐるのであつたが、もう夫等の物象は夕暮の色にぼかされて、朦朧としてゐた。

しばらく無言で歩いてゐる二人であつた。

それにしても二人は富士の何の邊を歩いてゐるのであらう？

兎にも角にも二人は、富士の或る地域を、上へ登らうとはしないで、横の方へ歩いてゐることは確であつた。

道ともいへない細道であつたがその道さへ絶えて、行手に屏風のやうな絶壁のそば立つてゐる所まで来た。

そこで二人は自然と立止まつた。

『さて』

と小源太は云つた。

『どうしたものだ……』

『縁だわねえ』

これがお鳥の返辭であつた。

『下田の遊山船でお逢ひしたのが最後かと思つたのに、また、こんな處で……』

『さて、何うする……』

その時、法螺貝の音が聞えて来た。

『貝の音だな。……さつきも聞えたが……』

と云ひ／＼小源太は、深い谷の方から聞えて来るその音に耳をかたむけ、

『さて何うする、この邊で別れるか』

『然うねえ』

と云ひながらお鳥はお鳥で、その貝の音に耳を澄まし、

(あの先刻の綺麗なお侍さん、あの貝の音に誘はれて……いゝえ、追つて、走つて行つたが、お怪我がなかつたかしら?)

『どうせ、何んでもなかつた二人——いゝえさ妾にはお話したいこともあつたんですけれど……でも何んでもなかつたわしたち……さうねえ、お別れとしませうか』

『お鳥、藝者はやめたのか?』

『え、』

『さうか』

果してサツパリとした口調で、

『それは可いことだ。……そこで實家へ歸る。……こいつも可い。……實家で何をする？』

『巫女を』

『巫女？』

これは些少意外といふやうに、

『どういふ發心だ？』

『家の商賣ですの』

『……………』

『先祖代々の……………』

『うむ』

『現に、お母さんが巫女ですわ』

『うむ』

『富士講の巫女の静子といへば、お山一帯では通つてゐる名ですの』

『その後を繼がうといふのか』

『えゝ。……妾、さういふことの方が仁に合うんですの』

『結構。……巫女の家筋なら訊くが、明覺といふ行者を知つてをるか？』

『えゝゝそのお方なら……………』

この時又も貝の音が——太い棒が、もろくの物象を貫いて、通すべきものは通す！ 意志の偉大

を見よ！ といふかのやうに鳴つた。

『あれが、明覺行者様のお吹きになる貝の音ですの』

『本當か！』

——小源太の顔が、遊山船で、小柄を握つた時のやうに凄くなつた。

『……………』

走りかゝつたが、この男特有の強い意志で抑へ、

『さうか、あれが明覺の吹く貝の音か！……………其明覺どこに居る？』

『ふだんはお山の九合目あたりの岩室に。……でも、あのお方、今日はあつち昨日はあそこ。……

まあ夫れにしても、たつた今しがた、若い綺麗なお侍さんが、明覺様の貝の音と聞くと夢中になつ

て……………今度はあなた様までが……………』

『ふーん、然うか、若侍が、明覺と聞いて夢中になり……………俺はな、その若侍の後を、葦山から從

けて来たのだが……見失つて……いやそれは可い……お鳥！』
と、眞剣の表情となり、

『また逢ふときもあるであらう……助けを乞ふこともあるであらう……貝の音！ 明覺……おさらば！』

——貝の音の聞える方へ、小源太は走つた。

ところでこの頃庄三郎も富士山の中腹を夢中のやうに走つてゐた。

行手に出水があつて土が崩れ、それが峻しい谷となつたといふやうな、さういふ箇所があり、欄干のやうに白茶けてみえる大小無数の岩が起伏してゐ、まだ引ききらない水がすさまじい勢で駈つてゐたが、そこを一人の行者が戒刀を横たへ、法螺貝をひつさげて歩いてゐた。

(あれこそ明覺行者であらう)

かう思つた庄三郎は、

『オーイ、行者殿オーツ』

と呼び／＼走つた。

いや、今呼んだばかりではなかつた。

さつきから呼びつけてゐたのであつた。

然う彼は、法螺貝の音がきこえ、それが明覺の吹く貝の音だと旅の女から聞かされ、夢中でその貝の音のきこえる方へ走り、折柄霧が晴れて、行者の姿が、山の中腹から姫婦の腹のやうに突出してゐる岩山の頂きに見えたときから呼び、その行者が、その岩山を降り、小狸蘭や蛇の舌や岩人參やつがさくら等の生えてゐる澤を歩いてゆくのを追つても呼び、さうして、その行者が、ふりかへりもしないで歩いてゆき、やがてその姿を、またも、その邊だけへ盛りあがつて来た霧の中へ没した時にも呼び、さうして、自分もその霧の中へ走りこみ、霧の海を脱れ……見ると土崩れの後の谷を行者が歩いてゐる。……そこで又も呼んだのであつた。

いそいで歩いてゐるやうでもないのに、行者の足の速いことゝいつたら！ 息せき追つかける庄三郎を抜いて、その距離をグン／＼擴めて、その形をだん／＼に小さくしてゆくのであつた。

——お山へ来たその日に九合目まで行かない先に、求める相手の明覺行者と逢ふことが出来たとは何んといふ幸運のことであらうかと、喜び感謝した庄三郎の心は、今では甚だ心細いものに代りつゝあつた。

(この鹽梅では行者をとり逃がして了ふかもしれない。……一旦とり逃がしたら、探さだすことは容易ではあるまい。……九合目の岩室へ歸るか歸らないかわからないし、何處へ行くかもわからないのであるから)

— それにしても、かうも大聲で呼びつけてゐるのに、聲の届かない筈はなく、返辭もせず立止まつてもくれないのは何うしたことなのであらう？

庄三郎は氣が氣でなかつた。

やつと谷まで下りることが出来た。

しかしもうその時には行者の豆のやうな姿は、米樽、七釜戸、などの灌木で形成されてゐる矮林の中へ入りこまうとしてゐた。

庄三郎は狂人のやうになつて追つた。

でも、矮林の縁まで辿りついた時には、行者の姿が見えないで、夕陽がすっかり消え、灰蒼い空の薄い光の下に、矮林が、幾町、いや幾里つゞくともわからない様相をなして、黒く、ベツタリと眼の先を遮つてゐた。

(とう／＼見失つて終つた) 絶望と疲勞とで庄三郎はクタ／＼となり、佇んだ。

その彼をからかふやうに、鼻先の木群から飛立つ物があつた。梟らしい。その時、貝の音が林の奥からきこえて來た。庄三郎は憑かれた人かのやうに林の中へ駈込んだ。

『あッ』——足をすくはれ、地へ倒れた庄三郎は谷の斜面らしい所を、どこまでも轉がつていつた。

部落の人々

谷から落ちて、氣を失つた庄三郎が、正氣に返つた時、まづ見たものは綺麗な月であつた。

廣い盆地が楕圓形に左右に展開け、その周圍を樹々が取巻き、その樹々の外側を更に樹々がモクモクと泡のやうに、化物が髪を亂したやうに立並び、その間に、鉾のやうな岩山がそばだつたり、形容しやうもないやうな奇形の丘や洞窟や岩組がニヨキ／＼と突出したり、水銀のやうな川や銀箔のやうな池や沼や、水晶の簾のやうな瀧などが點在してゐる。……さういふ地域の上に、小さい月が澄んで懸つてゐるのであつた。

その月の光に照らされて、庄三郎の直ぐの眼の下に見えてゐる風景は平凡な部落の夫れであつた。

三十軒ばかりのみすばらしい家が飛々に立つてゐ、それらの家々を支配するかのやうに、一構の大きな屋敷が、左手の山腹に添つて立つてゐるのであつた。

盆地と部落との三方は高い山——もちろん夫れは富士山なのであるが、その山腹によつて圍まれてゐるが、右の一方だけが開けてゐてゆるい傾斜をなし、ある所は丘となりある所は窪地となり、波のやうに起伏し、それらも灌木にこと／＼く蔽はれ、何處までも延びてゐた。

(こゝは樹海の一所に、あまり世間に知られずに出てゐる部落なのだらう)

と庄三郎は思つた。

その庄三郎は谷底、即ち盆地へまで降り切らない地點——山腹の一所に坐つてゐるのであつた。

(命の助かつたのが不思議なくらゐるだ)

しかも怪我さへしてゐなかつた。

それは、幾十年、いや幾百年となく散つては積り、積つては乾きした木葉によつて、地肌が厚く柔かく蔽はれてゐたからであつた。

(さて是から何うしたものだ?)

部落へ下りていつて、どこかの家へ行つて、頼んで泊めてもらうよりしかたなかつた。

そこで彼は用心しいく山腹を下り、道へ出た。

(あの大きな屋敷へ行つて事情をはなして泊めてもらはう)

その方へ向かつて足をすゝめた。

道に添つて立つてゐる家々は寝しづまつてゐて、雨戸も窓もとざされてゐ、一筋の燈光さへ射さなかつた。

かつた。

數匹かの犬が走りだして来て、彼をとりまいて吠えかゝつたが、彼が相手にしなかつたので、影をかくした。

やうやく目指す屋敷の前まで来た。

石垣が築いてあり、石段が出来てゐたので夫れをあがつて門の前へ立つた。

門は古びてゐたが、でも頑丈な長屋門で、その長屋から人聲が聞えて来たので、格子窓から覗いてみた。

この家の召使らしい數人の男女が、たくさんの岩茸を膝の前へ積み、木葉や土や雑草から撰りわけてゐた。

『明覚行者様の貝の音は一里ぐらゐ響くかしら』

と云つたのは十七八の娘であつた。

(明覚行者!)

と庄三郎は急に心の緊張するのを感じ、聞耳を立てた。

明覚行者をさがしに来た庄三郎であり、それを見失つた彼なのであるから、その明覚の噂が出れば緊張するのは當然であつた。

『明覚行者さまの貝の音ときたら、一里どころか二里もひゞくだらう』

かう云つたのは三十二三の男で、左の頬に瘤があり、それが煤けた行燈の光に照らされ、氣味の悪い影を顔へつけてゐた。

『明覺さまが今日おいでになつたのは何んなご用があつてかしら』

これは、岩茸を箆へ移しながら一々鼻へあて、嗅いでみる癖を持つた二十四五の男で、

『毎年いまごろは九合目の岩室においでになる筈だのに』

『母屋で家の旦那様とおはなしをしてをられる筈だから、知りたかつたら立聞でもするさ』
と云つたのは四十ぐらゐの女で岩茸を前垂で拭いては土や苔を落してゐた。

『どつちみち、あのお方がおいでになる時には悪いことはないのだから安心だよ』

これは例の十七八の娘で、岩茸撰りに飽きたか、爐の方へ行つて栗を焼きはじめた。

『お嬢様のご婚禮の行違ひから、毛間の部落と喧嘩沙汰になつたのかもしれない』

これは顔にあばたのある三十八九の男で、最初から岩茸よりはしないで、部屋の間で鳥銃の手入れをしてゐた。

『ほんらい俺等の部落と、毛間の部落とは仲がわるいものだから、婚禮しようなどと目論だのが間違ひなのさ』

瘤のある男であつた。

『毛間の部落のお頭の悴がうちのお嬢さまを見染めたのが原因だといふことだね』

『それをお嬢さまが嫌つたんだね』

『毛間の部落のお頭の悴の松太郎といふ若造を見たことがあるかい？』

『おいらはまだ見ない』

『妾も見たことはない』

『わしもだ』

『好男子だといふことだが』

『いや、兎唇の醜男だといふことだ』

『どつちみち家のお雪お嬢さまのやうなたいしたお方の婚様になれるやうな奴ではあるまい』

『さうともよ』

『お雪お嬢さまときては、アツハツハツ』

『アツハツハツ……笑ひたくなるほどだ！……お雪お嬢さまと云つただけで、快い氣持に笑ひたくなるのだからなあ』

『あの元氣のいゝことは何うだ』

『馬には乗るしよ』

『泳ぎはするしよ』

『お十八だといふのに、木昇りをなさるので、妾はあんまりだと思つたよ』

『あれがほんとうのお轉婆といふのだらうよ』

『でも、そのお轉婆ぶりが何んともはや明るくて……』

『無邪氣で……』

『アツハツハツ』

『夜が更けたよ。もう寝ようぜ』

行燈が消えて爐の火ばかりが闇の中に、珊瑚のやうな色におこつてゐた。

(明覺行者がこの屋敷にゐるのか、有難い)——庄三郎は屋敷の裏手の方へまはつて行つた。

立聞きをしてゐるうちに寝られてしまひ、案内を乞ふことが出来なくなつたので、庄三郎は裏手へまはつたのであつた。

裏門の近くまで來た。

すると潜戸の戸が鳴つた。

(ありがたい、誰か出てくるらしい)

家人が出て來たら、その人へ事情をはなし、一泊を乞ひ、明覺行者とも逢はう……

そこで庄三郎は潜戸のところまで小走つて行つた。

しばらく待つてゐたが誰も出て來なかつた。

(變だな?)

潜戸へ障つてみた。

戸が開いた。

(これは!)

しかし考へてみれば何んでもないことであつた。内から出て來るのではなく、外から誰か内へ入り

そのまゝ戸締りをしなかつた迄らしい。

(物騒な)

——とはいへ、このやうな山懐中の部落などでは盜難の憂などはなく、戸じまりなども緩漫でよいのだらう。

(ところでわしは何うしたものだ?)

(入らう!)

決心した。

それは、愚圖々々してゐて、またも明覺行者を取逃したら大變だ!……といふ心持が働いたからであつた。

(無斷で他人の家の屋敷内に立入るのは悪いが、さうしてその結果、泥棒と見誤られるかもしれない)

が、しかし夫れとて、明覺行者を探出して連返る使命の前には何んでもないことだ！
かう思つた結果であつた。

彼は潜戸から入つた。

入つてみて、この屋敷が意外に廣いのに驚いた。

正面に大きな建物が立つてゐた。母屋らしい。

その左右に一つづゝ二つの建物が立つてゐた。對屋ともいふべき建物であつた。

そのうへ、母屋の背後、對屋に挟まれて、もう一軒の建物があつたが、これは下屋ともいふべきものであらう。

いや建物はそれだけではなく、それらの一廓からすつと離れ、土塀の右の隅の邊に、もう一軒の建物があつた、それと向いあつた左の隅にも、同じやうな建物が立つてゐた。

もちろん夫等の建物は古くもあつたし破損してもゐるやうであつたが、しかしその建築が如何にも堅固で古風で素朴で好感が持てた。

(これは現在の様式の建物ではない。日本のすつと古い昔の様式に則つた建物らしい)

その建物が、夏の深山の蒼々とした月光の中にしつとりと沈んで立つてゐる姿は、神々しくさへ見受けられた。

庄三郎はソロ／＼と歩いて、一番身近い下屋の方へ近寄つて行つた。

下屋の横まで來た。

すると背後で咳をする聲がした。

驚いて庄三郎は振り返つた。

野袴をはいた武士が、肩のあたりを月光に照らして立つてゐた。

『明覺といふ行者はたしかに母屋に居ります。ですから安心なさい』

とその武士は云つた。

兩 雄

庄三郎は膽をつぶした。

(何者だらう?)

それから、

(どうして俺が明覺行者に關心を持つてゐるといふことを知つてゐるのだらう?)
と思つた。

(どつちにしても、その風俗から見ても、この部落の人間ではないらしい)

そこで、

『どなたですか？』

と訊いた。

『本庄小源太といふものです。……あなたの後を葦山からつけて来たものです。……さうして、あなたより一足先にこの屋敷へ入つたものです。……』

『何んの必要から私の後などつけられたのです？』

『葦山殿の命で、あなたが、明覺といふ行者をさがしだし、葦山へ連れもどらうとなさるからです』

『では、あなたも明覺といふ行者を……』

『いや、わたしは明覺といふ行者を必要とする者ではありません。……しかし、葦山殿へ明覺を引渡すことを拒む者であることは確かです』

『どういふ理由で？』

『葦山殿に對する怨からです』

『怨？』

『それで、葦山殿の事業の成功を喜ばないのです』

『不届な！』

『葦山殿は大砲鑄造のため大反射爐をおつくりにならうとしてをられる。それには耐火煉瓦を製造する必要がある。それには好い原料——良土を手に入れなければならない。ところが、明覺といふ行者がその良土の在場所を知つてをるかもしれない。……そこで葦山殿が、この地へ、貴殿を……わたしは、これらのことを下田で知りました』

『ナニ、下田で？』

『下田の船の中で知りました』

『……』

『明覺のことを葦山殿に話したのは、下田の港の支配をしてをる下妻能登といふ者です』

『……』

(これは驚いた。俺の知らないことまでこの男は知つてゐる)

『それで貴郎は今後何を私になさらうといふのです』

『あなたには怨はありません。但、明覺を葦山へお連れなさるやうなら、打捨てゝは置けません』

『わしは飽迄も明覺を葦山へつれて歸る』

『これがものをいひます』

と小源太は刀の柄をたゝいた。

『拙者も刀は持つてをる』

と、庄三郎は怒りながら云つた。

しかし庄三郎には小源太といふ武士が容易ならぬ人物に見受けられたので、

(困つたことになつた)

と思つた。

(この男と斬合つて怪我でもしたら、明覺を葦山へつれかへるといふ私の使命が果たされないことになるかもしれない)

——出来るだけ穩便に済みたいものだ……

ちつと相手の様子をうかがつた。

小源太は深い武道のたしなみのある武士らしく、迫らない、隙のない姿勢で立つてゐた。

——それにしてもこの男は、何んで江川先生を怨むのだらう？　これが庄三郎には合點がなかなかつた。

そこで怒りをおさへ、

『本庄殿とやら、あなたは何んで江川先生をお怨みになるのです？』
と訊いた。

『わたしには怨はありません』

と、小源太は意外な返辭をした。

『これは可笑しい。……たつた今しがた葦山殿に怨があると……』

『怨のあるのは私兄弟の者をご最眞にして下された或るお方です』

『誰です？』

『云ふ必要は無ささうです。……そのお方の怨を私は晴したいのです。……そのお方はいつも、葦山殿と反對の立場にゐた人です。そのお方のことを、葦山殿は保守主義者だと批評しました。……フ、フ、フ、ではそのお方の反對に立たれた葦山殿は進歩主義者と見える。……フ、フ、フ。その癖いつも一國の根柢をなすもの、縁の下の方持に甘んじ、周囲の非難蔑視に堪へて、國家を安定にみちびく者は保守主義者だ。……いや併し議論はやめませう。……さて、私兄弟の者をご最眞にして下されたそのお方は、葦山殿のおかげで失脚し、今は流罪同様のお氣の毒のお身上です。……そのお方が配所ともいふべき讃州丸龜へ參る際「江川はじめ高野長英、渡邊華山、その他尙齒社一黨、いはゞ日本の國粹を忘れた西洋カブレの徒、國運をあやまるであらう。……殊に江川太郎左衛門の洋式調練、大砲小銃の鑄造など、紅毛夷狄の猿真似に過ぎぬ！　阻止いたさねば！」と仰せられた。……明覺といふ行者を葦山殿へ渡すまいとする私の所業は、その阻止の一つです！』

(は、あ)

と庄三郎は心に思ひあたることがあつた。

この男を最眞にしたといふ男は鳥井甲斐守だ。鳥井甲斐と江川先生とは徹頭徹尾反對の立場にあつた。江川先生は蘭學を學び洋風のことを好まれ、努めて泰西の文物を攝取して日本を裨益し、日本を世界の先進強國と比肩せしめようとされた。すなはち進歩主義者であつた。しかるに甲斐は、その出身が幕府の儒官、林述齋の次子であつたため、儒學の凝りかたまりであり、自然蘭學や蘭學者を憎みその排斥に懸命であつて、保守主義者であつた。江川先生を盟主として創立された蘭學者の團體、尙齒社の弾劾などにはあらゆる惡辣の腕を揮つた。浦賀海岸の測量圖を幕府の命で、甲斐守と江川先生とが作つた時、甲斐は小笠原貢藏などといふ屬吏を用ひて、實用の出來ない舊式の不確實の圖を作つたが、江川先生は、高野長英先生の優秀の門下内田彌太郎等を用ひ、西洋流の新智識の下に、正確的の圖を製し、賞讃を博し勝利を得た。ことごとく二人は反對の立場にあつた。その結果、甲斐守はしばしば江川先生を讒したり、陥穽しようとしたが、最後に甲斐自身、排斥されて、讃州丸龜に謫された。

『本庄氏とやら』

と庄三郎は嘲笑ふやうに云つた。

『貴殿を最眞にされたといふ仁は元の御奉行、姦物の鳥井甲斐守でありませうな』

『ナニ、姦物！ 黙れ！』

小源太は刀の柄へ手をかけた。

しかし小源太は、その沈着な、ネバリの強い性質から、自分が怒つたことを恥かしく思つたらしく刀の柄から手をはなすと、前よりも一層おだやかな口調で、

『あなたにしてからが、自分の尊敬してをられる葦山殿のことを、姦物と惡口されましたらお怒りになりませう。……それと同じやうに、私も、私を最眞にして下された鳥井甲斐守様のことを——さうです、わたしを最眞にして下されたお人は、あなたが察せられたとほり鳥井甲斐守様です。——それではあり深夜のことです、お互ひつゝしんで高聲をあげないことにいたしませう。……次に少しく私の身上を申し上げます。私の生れは長崎です。今でもとき／＼長崎へ歸ります。そこで絶えず和蘭の船を見たり、諸外國の事情を耳にしたりしてをります。その結果、日本が兵備や經濟やその他に於て、とうてい諸外國と太刀打出來ない、従つて葦山殿や高島秋帆先生のやうに、西洋諸外國の文物を攝取しなければいけないといふことなどは、よく解つてをります。……いや、それどころではない、わたしはそれ以上のことを考へても居り、また計畫してもをるものでして、そのため下田港に往來し

てゐるのです。……とかう云ひましたら、あなたは、何を計畫してをるのか云へと仰せられるかしれませぬ……。残念ながら今は云へませぬ。……しかし志の一端だけはお知らせしませう』

——小源太は、更に落着きはらつて、

『わが志は南洋にあり！——と。……さてこのやうに申上げたならば、私が葦山殿のお仕事の邪魔をするのは、あなたが西洋嫌ひの、保守主義の、鎖國主義の爲めではないといふことがおわかりでありませうな。……それはたゞ、私を眞員にして下された、甲斐守様の鬱忿をお晴ししたいからです。……日本武士の節義の結果です！……ところで、明覚行者は只今この家の母屋で、この家の人々と話をしてをります。それは、あなたより一足早くこの屋敷へ入つた、わたくしが確めたことですから間違ひありません。……しかしその明覚行者をあなたには逢はせません。……無理に逢はうとなさるやうなら、その時こそ本當にあなたを斬ります』
と云つた。

× × ×
はたしてこの頃この屋敷の母屋の一室で、屋敷の主人の左五衛門とその娘のお雪と明覚行者とが、酒を飲み／＼話してゐた。

『小父さん行つて何んなことをするの？』

かう訊いたのはお雪であつた。

びつくりしたやうな澄んだ大きな眼、可笑しかつたら何時でも笑つてやるわと云つてゐるやうな暢氣な口、ふくらみのある高い鼻、——お雪は綺麗な娘であつた。

『行とはのう、理窟を云はないで黙つて實行することぢや』

と答へたのは、瘦せて身長が高くて、椗の棒のやうな感じのする山伏姿の明覚で、

『それものう、人の厭がることをだよ』

『では行つても馬鹿々々しいものね。わたしには出来ないわ。わたしは自分の好きなことばかりを他人におかまひなくやりたいのよ』

明 覺 行 者

『ワツハツハツ、うちの娘ときては我儘者でしかたがありません』

と云つたのは左五衛門であつた。

岩茸とりを商業としてゐる落合の部落の長で、わづか三十軒ばかりの戸數の盆地を支配してゐる人間に過ぎないのであつたが、長は長で、貫祿があつた。

肉太の赭顔で頬など落ちさうに垂れてゐた。寛大の心の持主らしく、眼など象のやうに優しかつた。

『わがまゝの出来る間は、わがまゝをした方がよろしい。それが自然といふものぢやからの。……ところがだんくわがまゝが出来なくなる。周囲のものがさせないのぢや。これが又自然といふことになる』

ノンビリとした言葉つきで明覚は云ひ、注がれてある盃を干した。

『わたし我儘ぢやアないわ、たゞ誰にも世話をやかれたくないの。さうして……』

『いや、あんまり自由のことばかりをしてゐると、今度は逆に不自由のことが戀しくなるものでな』

『不自由な目にばかり會つてゐると、自由を欲しがると同じやうにぢや』

『さうかしら』

『然うとも』

『わたし夫れに、何かに、心から吃驚したいのよ』

『それは何時もチョコクくしたことにチョコクく吃驚りするからぢや』

『さうよ、妾くぢやないことにすぐ吃驚するわ。でも吃驚した時には最う直つてゐるわ』

『子供だからぢや。子供はさうやつてチョコクくしたことにびつくりして、だんく智慧づくのぢや。さうして大人になつた時、あんまり物事にびつくりしなくなるのぢや。……尤、金のことと女のこと

で失敗した時にはびつくりするが』

『まあ厭な……小父さんのやうな偉い行者さんでも吃驚するやうなことがあつて？』

『びつくりしてゐるやうな暇はないのう』

『まあ夫れでは吃驚は暇から來るの？』

『然うとも』

『わたし遊んでばかりゐて暇だらけだわ。……あゝ夫れだからチョコクく吃驚するのね。……さうして大人は稼ぎに追はれてゐるからあんまり吃驚しないのね』

『その通り』

『ちつとも吃驚しないらしい小父さんは、では逆も稼いでゐるのね』

『誰も稼いでゐる』

『誰のために稼いでゐらつしやるの？……奥さんも子供もないくせに』

『自分の爲めに稼いでゐるのぢや』

『慾深爺さんね』

『人のために稼いでゐるのぢや』

『わからないわ』

『わしの中に他人が、さうして、他人の中に俺がゐるからぢや』

云ひく明覚は手酌で酒を飲み、

『それ俺の中の他人が酒をのんだ』

部屋には燭臺がともつてゐて、長押にかけてある檜や脇床に置いてある弓矢や、客と主人との前に据ゑてある箱膳などを照らしてゐた。

『だから』

と明覚はいひつゞけた。

『自分のために稼いでゐる時には他人のために稼いでゐることになるし、他人のために稼いでゐる時には自分の爲めに稼いでゐることになるのぢや』

『何んだか法螺吹いてゐるやうだわね』

とお雪は云つて、もう小驚きしたやうに眼を見張つた。

『これくお雪そんな失禮なことを云つてはいけない』

と先刻から可愛くてならない娘と尊敬してゐる行者様との會話を黙つて聞いてゐた左五衛門は、さすがにたしなめるやうに云ひ、

『それよりお酌でもおしなさい』

『は』

と穩しく云つてお雪は徳利を取り、

『小父さんでも心から吃驚したやうなことは是迄に一度ぐらゐはあつたでせうね』
と云つて酒をついだ。

『一度あつたのう』

『話して頂戴よ』

『話してあげよう』

それから明覚は考へをまとめるやうに部屋の中を見廻した。

柱などは手斧で荒く削つたばかりであり床には簀子が敷いてあるばかりであり、杉戸などは古びて木目さへ見えないほどであつたが、それが却つて清々しい感じを起させ、この廣い部屋は平安朝時代の寢殿造りの母屋を連想させた。

膳の上の皿には、山獨得の酸味噌あえだの川魚の煮付だのしたし豆だのといふ、いかにも山の部落の人々の常食にする肴ばかりが盛られてあつたが、馳走する人の誠心がこもつてゐるらしく、美味に見受けられた。

『わしがあるお山を開いた時のことだつたよ』

と明覺は、隼のやうに光の強い眼でお雪を見ながら話した。

『大變なものを見たのだよ。……いやその前にお山を開くといふことについて話さうかな。……お山をひらくといふのは、誰もまだ登山したことの無い峻しい山へ登つて行つて、道をつけてやることなのさ。……わしの開かうとした山は信州の中部にある山でな、狼や熊や大蛇などが出て人に害をするといふので誰もが登つたことのないお山だつた。……わしは、その山へ一人で登つて行き、幾日かの後頂上へ着き、そこで七日間お經を讀んで願を立て、それから麓の方へ下つたが、たゞ下るのではなく道をつくりながら下つたのさ。木を仆したり石を割つたり茨や灌木を刈つたり谷川へ丸木橋をかかけたりしながら。……その間には暴風暴雨に逢ふ、悪い獸に襲はれる、石が崩れて来て打ちひしがれようとする。……食物といへば用意してきた僅かな米や味噌と木實や草の根、飲むものといへば谷の水ぢや。……いよく食物が無くなれば、里へ下つて行つて人の門に立つて布施を乞ひ、貰ひ溜めたものを持つて又山へ登つて行き道をつける。……一度つけた道が雨や山崩れで駄目になれば二度でも三度でもやり直す。……かうしてわしはそのお山へ半年籠つて道をつけたものさ。……それでもとうとう六ヶ月目に麓から頂上までズツと一筋の道を通はせてしまつた。その時のわしの嬉しさといふものは！ もう誰でもこのお山へ登ることが出来る。それをしたのはわしだ！……わしがこのお山を征服したのだ！……これはわしばかりでない、古くは役ノ小角様や弘法大師様、その他たくさん

お山をひらいた偉いお方のお感じになる喜びで、この喜びがあればこそ、艱難辛苦してお山をひらくのぢや。……さて、そこでわしは又頂上で一七日間お經をよんで神様や佛様にお禮を申上げ下山しようとしたが、裏山の方はどうなつてゐるかと思つて、その裏山の方へ行つてみたところ、表よりもすつと峻しい山の斜面に、わしの作つた道よりもつと立派な道がついてゐるではないか！ この時のわしの吃驚したこと、いふものは！

『まあ』

と、息を詰めて聞いてゐたお雪が、びつくりした聲をあげた。

『誰だつて大吃驚するわよ』

『ところがもつと吃驚することがあつたのぢや』

『それ以上？』

『さうだ。……その道の上に、金剛杖を突いた行者が一人立つてゐるではないか！』

『きつとその行者様がその道をこしらへたのね』

『さうだ。そこでわしはそのお行者へ近寄つて行つて挨拶をしようとしたところ……』

『……』

『そのお行者殿は死んでをられた！』

『立つたまゝで？』

——お雪の聲は叫んでゐるやうであつた。

『さうだ。……立つたまゝで……わしはその體にさはると仆れ、仆れた所で粉になつた』

『怖いわ！』

『わしは頭が下つた。……その行者様は十年もつと前にその道をおつくりになり、作り終つた時にお死になされたのだ。……わしの自慢の鼻が折れ、わしの間人がその時以來一變した』

『よいお話をうけたまはりまして有難いことで』

と、その時まで熱心に耳を澄ましてゐた左五衛門は云ひ、頭を下げた。

『上には上があるものでございますよ』

と明覺は左五衛門の方へ話しかけた。

『さやうでございますとも』

『人がとうにやつた事、人がとうに説いたことを、自分がはじめてやつたり説いたりしてゐるのだと思ふことは愚かなことです』

『は』

『この話はこれだけとして、さて左五衛門さん』

『は』

『部落が騒がしいとのこと……』

『……』

『噂に聞きましたので、おせつかいとは思ひながら、心にかゝり、やつて來ました』

『いつもご親切に……』

『毛間の部落とまた新たに怨を結んだとかで？』

『はい、それが……』

と心苦しさうに娘の方を左五衛門は見た。

部落の葛藤

娘を見た左五衛門の眼には、なかば相手を非難し、なかば自分を憐れんでゐるやうな、複雑な色があつた。

『それがこの娘に關係あることではな。……それは少し以前のことでございますが、家の召使や近所の人達といつしよに、娘が、毛間の付近の榎木谷へ岩井を採りに参りましたさうで。さうしますと毛間の人達が、これも七八人で、轆轤細工にする木材をさがしに來てをりましたさうで。……ところ

がご承知のとほり、毛間と私たちの部落とは、先祖からして不和、一里か一里半たらずのお隣同志ですのに、逢つても話をしないどころか、すぐに喧嘩をやらかすといふ仲だものですから、その時も喧嘩になりかゝつたさうで。……それを、此方ではこの娘が、娘つ子のくせに、まあくとなだめ、先方では——えゝ其時、先方の人数の中に、お頭茂十郎さんの息子の松太郎さんが居りましたさうで、その松太郎さんがなだめ、何事もなく治まりましたさうで。……ところが、その後聞きましたところによると、その時松太郎さんがこの娘を見染、アツハツハツ、町方のお芝居のやうで、是非嫁にほしいとのこと。……最初は、仲人のやうな鹽梅で、行者様もご存知の、富士講の巫女の静子嬢がやつて参り「どうですなえ左五衛門さん、仲の悪い部落のお頭同志が、こゝでいつそ親戚になつたら……部落も治まらうといふもの……そこで一つお雪さんを松太郎の所へ」といつて來ました。私はそのときは、たゞ然うですねえ、考へて置きませうと生返辭をしておきました。するとその後静子嬢が幾度となく足をはこんで來ては進めるのです……」

左五衛門は一息ついて、

『ところが何うでせう或る日不意にあの利かぬ氣の茂十郎さんが一人でやつて参りまして、「わたしは恥も外聞も部落の掟も何もうちやつてお願ひに参りました、どうぞお雪さんを家の馬鹿息子の嫁にいたゞかせて下さいまし、この通り頭を下げます。……家の松太郎は、雪さんのことを思ひつめて、

毎日、こちらの部落の見える丘までやつて來ては、こちらの部落を眺め、お雪さんの姿が見えるか何うかと待ちくらし、夜になるとシヨンポリと歸つて來て……一日々々と瘦せてゆきます。……親の身になつて見ますと……」とおつしやつて、涙をボタリくと膝の上へ……わたしもつい貫ひ泣きをしまして「そんなにまで不束者の娘を想つて下さるとは……はいく、お雪をさしあげないでどうしませう」と云つて了つたことでございます。……それから此事を娘に申しましたところ……」

『厭だわ』

と、この時まで、行者様が盃を干したら、お父さんに注意されない前に急いで注いであげようと、齋徳利を膝の上で握りしめてゐたお雪が云つた。

『わたし、何も松太郎さんが嫌ひといふんぢやアないわ。松太郎さんは可い人だし、男ぶりだつて悪くはないし……ですけれど、わたしお嫁にゆくなんてこと考へても見なかつたんですものね。……それをだしぬけにお嫁にゆけなんて……厭だわ』

『これはむづかしい問題だわい』

と明覺は云つた。

いつも樂天的の明覺の顔が、すこし曇んだ。

『かういふ問題はですな、親子の問題、娘の自由意志の問題、部落といふ團體の問題などがからまつ

て、むづかしいことになります。……いや、わしは、山ばかりを歩いてゐるので、かういふ人事に
いてはうといのだが……いや、うといからうといといふことにして置いて。……心配になるのは部落
のことで……』

と、明覺はやがて云つた。

『それなのです』

と、左五衛門も憂鬱の顔をし、

『茂十郎さんは、男同志約束をしたのに、それを實行しないといつて怒るし、静子媼は、仲人の妾の
顔をつぶしたといつて怒るし、毛間の部落の人達は、部落全體を馬鹿にしたといつて怒るし……さう
かと思ふと、この部落の奴等は、元々仲の悪い毛間の部落の頭の悴へ、こつちのお頭の娘を嫁入らせ
ようなどとしたのが間違ひで、それが、それでもお嬢さんの反對で不調になつたのは結構、先方から
何か仇でもするやうなら、何時でも手向ふといつて、弓や鐵砲まで持出し……』

『毛間では毛間で、矢張り弓鐵砲など用意し、是が非でもお雪坊を奪取のぞと立騒いでゐると聞
たが……』

『さやうでございます。……それでこの娘へは當分外へ出ないやうにと……』

『困つたものぢや』

と明覺はいよく浮かない表情をして黙つて了つた。

お雪は、自分を中心としての部落の争ひ——さういふことも心にかゝらないかして、今では行者殿
へ酒の酌をするより、燭臺の灯を盗らうとして、焼かれることをも知らないで、焰のまはりを飛んで
ゐる大きい蛾に興味を持つて、水晶へ黒漆でも點じたやうな綺麗な眼で見守つてゐる。

『率直のところ是は誰が悪いともいへません』

と明覺は云ひだした。

『お雪坊のやうな綺麗で無邪氣な娘を見れば、誰であらうとお嫁さんに貰ひたいであらうから、松太
郎さんが戀したのも尤。……その松太郎さんの戀がれてゐる様子を見て、茂十郎さんが貰ひにわ
ざわざ出て來たのも親の身としては尤。……その茂十郎さんの親心を推量して、お雪坊の心持も訊
かないで一存でお雪坊を嫁にやらうとおつしやつた貴郎も——こりやア貴郎も善良な、同情ぶかい心
から來てゐるので是も尤。……お雪坊が、婚禮のことなど思つてもゐなかつたところへ、突然嫁に
行けなどと云はれたので断はつたといふのも、お雪坊の色氣の無い晩成の性として尤。……静子媼
が二度も三度も足を運んだのに、それが不調に終つたといつて怒るのも尤。……つまり四方八方み
んな、尤なのぢや。……いや、いさかひなどといふものはみんなかうしたもので、どつちにも尤の
云ひ分があるから起るので、……ところで、その婚禮問題が種となつて、落合と毛間との二つの部落

が喧嘩沙汰になつたといふこの事が、實は一番尤なのぢや。……左五衛門さん、どうしてこの二つの部落が六百年もの昔から敵同士として怨みあひ憎みあつてゐるかご存知かな？」

『はい、あらましのところは存じてをりますすが……』

『源頼朝公の富士の巻狩が原因なのぢや』

『あゝ、やつぱり左様でございましたか……』

『ご存知でしたかな？』

『はい、あらましのところは。……しかし、話があまのお伽噺のやうでございましたので……實は半信半疑で……』

『いや傳説などといふものは大概お伽噺のやうなものでな。……たゞ夫れを人間の悪い知恵や貪慾の心が、飛んでもない結果にでつちあげるの。……頼朝公が富士の巻狩をされた時、大勢の勢子が徴發され、その一部が落合へ、他の一部が毛間へ土着するやうになり二つの部落が出来た。……ところで、何故その人達が土着したかといふに、頼朝公が、何時又天下が亂れるかもしれない、その時の軍用金に使ふのだといつて、莫大な黄金を富士の或るところへ埋めた。……それを掘り出さうとして勢子たちは土着し、二つの部落の衆は、その後長い間競争して黄金探しをしたが發見出来ない。その中に、毛間の人達の方では、これは落合の人達が隠したからだといひ……』

『落合の方では毛間の衆がと……』

『そんなことから怨み合ひ憎み合ひ今日にまで傳はつて来た……』

『さやうでございます。馬鹿々々しい話で。……しかし行者様、事實は何うなのでございませう？』

『そんな黄金、お山の何處かに？』

『さあそいつは何んとも……』

と明覺は意外に眞面目な顔をして、

『わしは富士山はいふまでもなく天城であらうと榛名であらうと、日本中の山といふ山はたいがい歩いてゐるので、経験から、山のことなら何んでもわかるやうな氣がする。……たとへば、この山からは金が出さうだとか銀が出さうだとか、又は、この山の土は陶器をつくるによいとか瓦を焼くによいとか、煉瓦を焼くによいとか。……しかし地の下に埋めてある黄金のことは解りませぬよ』

『ご尤にございます』

『ところで左五衛門さん』

と明覺は當惑したやうな表情をし、

『富士に黄金が埋められてあるといふ傳説も、いつの間にか人達の記憶から遠退いて、最近までそんなこと、どつちの部落の人も云ひ出しさへしなかつたのに、この頃になつて……』

『行者様、それなのでございますよ、誰云ふとなくそんなことを云ひ出す者があつて……』
『それがさ、どうやら刑部の部落の連中らしいので……』

『あの連中ときましては……』

『さうとも／＼あの連中ときては手に負へぬ。……その手に負へぬあの連中が云ひだしたらしいのだよ……いや、もう一人ある』

『誰でございますかな？』

『毛間の静子嬢さ』

『へえ』

『刑部の連中は慾から云ひだしたらしいが静子嬢は迷信から云ひだしたらしい』

『巫女でございますからな』

『そこで部落の人たちは氣が立つて了つた。そこへもつて来て今度のお雪坊の婚禮問題が起つたのだから、いつそ殺伐なことになつたのさ』

『小父さん』

とこの時お雪が言葉を挟んだ。

『どうして刑部の人達は天幕なんかに住んでゐるの？』

暴動

『あれは不頼漢だからだよ』

と、明覺は答へたが、この明朝娘に對すると、明覺自身楽しくなり氣安くなるらしく、聲も言葉つきもノンビリとしてゐた。

『あの連中は、古くからあそこにあるのではなくて、比較的此頃にあそこへ集まつて来て、あそこを根城にして、里へ出て泥棒をしたり人攫ひをしたり、この頃のやうにお山に登山者があるやうになると、その人たちを襲つて追縛をする悪性者なのさ。……あの連中あそこへ巢をつくる前は天幕を持つて所々方々を歩きまはり、川つぶちへそいつを張つて、そこを假の家としてくらして來たのさ。……だからあそこへ住みつくやうになつてからも、昔の習慣が忘れられずに天幕を張つて住んでゐるさ。……でも感心に、あいづらの中の半数は天幕をやめて、掘立小屋のやうな家をこしらへて住んでゐる……だがどつちみち仕方のない不頼漢だから、お雪坊など忘れてもあんな部落人へ近寄つてはいけない』

『でも小父さんはあそこへも行くんでせう？』

『あゝ私は行くよ』

『何しにいらつしやるの？』

『叱りに行くのさ』

『何んていつて叱るの？』

『お山を穢すなといつてな』

『あの人たち小父さんの云ふこときいて？』

『感心に私のいふことだけはきくよ』

『小父さんは毛間の部落へもいらつしやるわね』

『あゝ行くよ』

『この落合へは勿論いらつしやるし……』

『さうとも』

『小父さんは何處へでもいらつしやるのね』

『さうだ』

『誰も彼も小父さんのいふことならきくわね』

『有難いことにみんなきいてくれる』

『なぜでせう？』

『お雪坊も私の云ふことならきいてくれるだらう？』

『きくわ』

『なぜだらう？』

『やられた！……何故でせう？……わからないわ。……でも一つだけわかるわ』

『云つてごらん』

『小父さんの云ふこときいておけば損しないからよ』

『こいつめが！ 慾深娘めが！……とはいへそいつが正直のところだらうな。すべて浮世は損得が標準だからのう』

『小父さんは人に損させまいと思つていろ／＼の所へ行つて、頼まれもしないのに喋りするの？』

『さうではない、わしは只の一度も人に得をさせようと思つたり損をさせまいと思つたりしてお説教をしたことはないよ。……わしは只自分が善いと思つたことをそのまま云ふだけなのさ』

この時遠くの方から大勢の人聲らしいものがきこえて來た。三人は顔を見合はせた。物音はだんだ

ん近寄つて來た。やはり大勢の人ののしり騒いでゐる聲であつた。

突然鐵砲の音がひびいた。

思はず三人は立上がりかけた。

その時けたましく杉戸をあけて召使ひの男が飛込んで来て、

『旦那 大變でございます！ 毛間の奴等が……』

三人が母屋を出て裏庭の方へ走つて行つてみると、もう裏庭には手間の部落の者と、落合部落の者とが揉合つたり、取組み合つたり撲つたり罵られたり罵りあつてゐた。

鐵砲を持つてゐるものもあれば脇差や山刀や松明を持つてゐる者やがあつた。

誰が誰を撲つてゐるのやら誰に誰が撲られてゐるのやらわからなかつた。

馬と馬との蹴合ひのやうでもあれば犬同士の噛みあひのやうでもあつた。

一人が撲りたふされてひつくりかへり、見たくでもないやうな毛脛へ、一週間ぐらゐの治療を要する負傷をしたかと思ふと、その毛脛へつまづいて、三四人がひつくりかへつたりした。

腕を折られてブツ／＼になつて悲鳴をあげて逃げてゆくものがあるかと思ふと、前齒を微塵にされて口から血を出し、それが、赤い金魚でも銜へてゐるやうに見える男もあつた。

一群の者が一群の者を押して行つて、土塀の際で、踏んだり蹴つたりしてゐるかと思ふと、他の一群が、他の一群を對屋の方へ追つて行き、更にもう一群が、もう一群を、下屋の方へ追詰めたりしてゐた。

松明が投出され、その火が、何かに燃えうつり焰を上げた。

ヤツ、敵も味方も驚くまいことか！

蹴つたり蹴られたりを止めて、そつちへ走つて、火を消した。

それから又喧嘩を續けた。

『お雪坊を攫つて行かなけりやア毛間部落の名折れになるんだ！』

『お前たちにお雪お嬢さんを攫はれるやうな、落合の者ア間抜けぢやアねえ』

こんな聲があちこちから聞えた。

これで見ると、毛間の衆が、掠奪結婚の習慣を實行して、自分たちの親分の、

のために、花嫁たるべきお雪を盗もうと、やつて來たのを、落合の衆が知つて、

あひ突きあひをしてゐるものらしい。盗ませまいと、撲り

變な風景が一つ見えた。

それは、二つの部落の衆の揉みあひ押しあひを、海の潮と例へたなら、その潮に漂はされてゐる二隻の船かのやうに、二人の武士が向ふへフラ／＼此方へユラ／＼といふやうに、漂はされてゐることであつた。

その一人は鴨下庄三郎であり、もう一人は本庄小源太であつた。
二人は先刻までこゝで睨みあつてゐた。

そこへ突然この同勢が裏門を破つて押寄せて来た。ウンもスンも無いうちに、人間の波の中へ捲込まれ、つちもさつちもならないやうにされて了つたのである。

ところが、この狂瀾怒濤を、おまじないのやうに静めて了つた奇蹟が起つた。高い法螺貝の音が鳴渡つたことである。

その音は、あたかも、蟻合戦の庭へ、蔞水の一糸が流れて行つて蟻どもの『食ふか食はれるか』を解散させるやうな効果をあらはした。

先づ、その音が聞えると、彼等は茫然りして了つた。それから、相手の髪の毛を掴んでゐた男は、掴んだまゝでポカンとし、又、相手の胸倉を取つてゐた男は、そのまゝの姿勢で棒立ちとなつた。口口に云つた。

『明覚様の法螺貝だぞよ』

『明覚様に叱られるぞよ』

この時明覚は左五衛門とお雪とを側に置いて法螺貝を吹いてゐた。

その心持ちは、兎も角も此處に集まつてゐる毛間と落合の、殺氣立つてゐる衆を解散させなければいけないといふことであつた。

さて彼は貝を吹いた。

彼は自分の吹く貝の音が、この富士山を中心にして住んでゐる人々の間に、神秘的の威力を持つてゐるといふことを自信してゐた。

はたして、貝を吹くと、人々はその活動をとめてボンヤリとして了つた。

(よろしい)

と彼は思つた。

(さて、者共よ、俺に従いて来い！)

そこで彼は貝を吹きながら歩みだした。

人々は左右に避けた。

それも、恰度、蟻合戦の庭へ打水の一流れが流れて行つたため、蟻たちが、鬭争を止めて、その流れから避けたやうな相に見えた。

明覚は自分のために開けられた道を裏門の方へ向かつて進んだ。

身長の高い彼が、襦袢の二つの塊のやうに見えてゐる群集の間を通つてゆく姿は巨大な御幣が擔がれて通つてゆくやうに見えた。

明覚が門から外へ出ようとした時、人々は叫びだした。

『行者様に裁判して貰はう』

『お雪坊を是非とも毛間へ興入れして下さるやうにお願ひしよう』
『ちきしょう！ お雪坊を毛間へなんかやれるものか！ やらないやうに、明覺様にあつかつてもら
はう』

群集は明覺の後を追つて走つた。

それは恰も明覺が磁石であつて、群集が砂鐵であつて、その砂鐵が磁石へ引きつけられるやうに見
えた。

かうしてほんの瞬間に左五衛門の家の裏庭から二つの部落の若い衆たちの姿は消え、捨てられた松
明が呆れたやうな焰を上げ、二つの雑舎の板壁を照らしてゐるといふ、ひっそりとした光景となつた。
でも、一人の旅よそほひをした武士が、土塀の裾に古綿のやうに仆れてゐた。

『まあ』

とお雪が叫んだ。

『人が死んでるわ！』

左五衛門も膽をつぶして、

『大變だ——ッ』

——そこで親子はその死骸の側へ駆けよつた。

庄三郎の死骸であつた。

いや、死骸のやうに仆れてゐながら苦笑ひをしてゐる庄三郎であつた。

庄三郎は親子の者が側へ駆けよると、ムズ／＼と起きあがつた。

どうやら左の手を挫いたらしい。他にも目茶苦茶な山男どもの揉合ひの犠牲となつて怪我をした所
があるらしい。

『ひどい目に遭つたぞ』

と呟きながら、びつくりして佇んでゐる左五衛門とお雪とを見たら、

それから再度苦笑ひをしながら、

『どうもこの邊の人達は秩序もなければ人の差別もない亂暴者ですな』
と云つた。

明るい話

それから數日経つた時庄三郎とお雪は川の邊の石へ腰をかけて話してゐた。

川は寶永山が噴火で噴きだされた時地割れがし、そのまゝ龜裂となり、そこを水が流れて出來たも
のらしく、河原は焼石や、その後、川底から露出した自然石などで、凸凹してゐ、それらの石を乗り

こえて飛沫を上げたり、それらの石の周囲を巡つて泡を立てたりして、綺麗な水が流れてゐた。
岩や石を遊び場にして、鶺鴒や山鳩が飛んでゐた。
二人は陽光を暑いとも思はず射に浴び、でも足を水に浸し、その足へ、鮎などがチヨイ／＼觸れるのを楽しみながら話してゐた。

それにしても何うして庄三郎はこんな所に山の娘などとノンビリと話などしてゐるのであらう？
あの夜、あの時、尙彼は、本庄小源太と、庭で睨みあつてゐた。

すると突然山の男どもが——すなはち毛間の部落の者と落合の部落の者とが暴風のやうに押寄せて来て、彼はその人間渦の中へ巻込まれ、押されたり突かれたり、側杖から打たれたりした。これが本式の戦争なら、彼は刀を抜いて戦つたのであるが、わけのわからない亂闘の中へ巻込まれたのであるからどうにも手がつけれなかつた。

さうして山男どもの立去つた後で自分の跡を見ると輕傷ではあつたが怪我をしてゐた。

そこへ驅付けて來たのが左五衛門とお雪で、庄三郎から此處へ入込んだ理由と怪我をした事情を聞くと同情し、

『明覺行者様をお探しになるにしても、お怪我をしてをられましたは、萬事に不自由でありませう。

……しばらく私の家に居られてご養生なさいまし。——惜しいことには、明覺様はほんの先刻まで私

の家に居られたのでございますが今の騒ぎでお立去りになりました。でも私の考へるところでは、行者様は、また此處へ歸つておいでになるやうに思はれますので、あのお方をおさがしになるのにもここに居られました方が好都合でせう』

と云つてくれた。

庄三郎は、そこで左五衛門の好意を謝し、その進めに従ふことにした。

彼が左五衛門の家へ逗留するやうになつたのを、誰にも増して喜んだのはお雪で、この初心の純情の山の娘は、都から來た若い美しいお侍さんを兄さんかのやうに懐しみ慕ひ、蹤いて廻つた。

それで二人は、時々このやうに川の邊などへも來て話しあふのであつた。

庄三郎にしても、このやうな素朴で美しい娘と話し合ふことは楽しみであつた。

『まあねえ、江川太郎左衛門といふ先生そんなにお偉いの……』

と、お雪よ、庄三郎が、先刻から、その江川太郎左衛門といふ人の偉さを話すのに、熱心に耳をかたむけてゐたが、この時、途中で言葉を挟んだ。

『偉いですとも。……江川先生のお偉さは、私など一月の間話しつゞけたところで話しきれぬものでありますよ』

と、庄三郎は云つた。

『それで、何んでしたわね、江川先生といふお方は、日本の陸軍の仕組を、西洋流に變へたのだとおつしやつたわね』

庄三郎は嬉しさに頷いた。

彼はお雪へ江川先生のことについて、その風采だの趣味だの、娘のよろこびさうなことを主として話したのに、さういふことより軍事に關することに興味を持ち、今のやうに質問されたことが嬉しいのであつた。

それでお雪を見直すやうに見た。

お雪は然う反問してから、山樺木やしもつけや海苔卯木などの樹々で蔽はれ、その間から木綿のやうな小瀧を落してゐる對岸の崖を眺め、無邪氣に幸福さうに微笑した。

『さうですね、さう云つてもいいのですが、それより江川先生は西洋の軍隊の優れてゐるところを日本へ取入れて、それを日本流にこなして、日本の軍の組織を改良したといつた方がいゝのですよ』

『それまでの日本の軍隊つてものだらしなかつたの？』

『だらしないなどといふことはありません。それまでの日本の軍隊の組織も、立派なものだつたのです……殊に精神方面がね。……でも夫れは、日本が日本だけに満足してゐる場合のことで、アメリカだのイギリスだのロシアだのスペインだのといふ國を相手にして、戦争をする場合には不満足のも

のだつたのです』

『然うオ』

『そこで先生は、苦心して、西洋の——オランダといふ國の書物を読んで、西洋の軍隊の組織を知りそれを日本へ取入れたのです』

『西洋の兵式つて何んなものなの？』

『先づ、集まれ——ツて將校が叫ぶのです。……それから集まつて來た兵士たちを横へ並ばせるのです。……それから、右へならへ！と號令をかけて、列を眞直ぐにし……それから、番號！と呼ぶんです。……すると兵士たちは、一、二、三、四、五ツて、一人々々、次々に叫ぶんです。……ですからみんなが然う云つて了つた時には、集まつて來た兵士たちの人數が自然とわかるのです』

『簡單ね』

『簡單で明瞭で整然としてゐるのが西洋兵式の特色なのです』

『まあま。……それから何うするの？』

『それから、兵士たちみんなを右へ向けようとする時には、右向け右ツて將校が叫ぶんです。すると兵士たちは一勢に右へ向きます』

『そんな號令の言葉誰がこしらへたの？』

『みんな江川先生なのです』

事實さうであつた。

太郎左衛門の洋術砲術の師匠であるところの高島秋帆は、教練の際、その號令を蘭語で行つたが太郎左衛門は、それでは大和魂を鍛へるに不便であるといひ、全部日本語に代へた。

すなはち『廻れ右』『付けえ劍』『肩へ銃』等である。

『それに先生はね』

と庄三郎は、お雪と話すことにいよく興味を覚えながら云ひついで。

『これからの日本は武士ばかりが軍人であつてはならない、農民も武術を習つて、いざ外國と戦争といふ場合には戦場に立つやうにしなければいけないとおつしやつて、農兵制度といふものを幕府のお役人へ建議したのですよ』

『農兵？ いゝわねえ。……そのうちには商人もお職人さんも、誰も彼も、日本人みんなが兵隊さんになるやうになるわね』

『先生は陸軍ばかりでなく海軍にも力をおつくしにならうとして、西洋型の軍艦の建造を心がけてゐるのですよ』

と庄三郎は云ひつゞけた。

『それに日本の國を外國の侮から防ぐためには國防を嚴重にしなければいけない。さうして國防を嚴重にするためには堅固の砲臺を海岸へ築いて、外國の艦が日本の海岸へ近寄つた時、これを打ち沈めなければいけないと仰つて、江戸の品川といふ所へお臺場といふものをお築きにならうしてをられるのです』

『お臺場？ 綺麗なもの？』

『さや〜』

と、庄三郎は笑ひながら、

『海の中へ石や土で大きな壇を築き、そこへ大砲を据付けたものなのです』

『外國つて怖い？ イギリスつて恐ろしい國？』

『こはくも恐ろしくもないのです。でも非常に狡猾で、さうして、自分の利益のためには、何處の國でも何んな人をでも犠牲にして恥ぢないといふ、卑しい、個人主義者ですから、いつも用心して、そいつに乗じられないやうにしなければいけないのです。……今から少し以前ですが、この國は、鴉片といふ毒藥を支那へ賣込み、支那人の精神や肉體を弱めるので、支那の政府がそれを禁止したところ亂暴にも戦争をしかけて支那を降参させ、その後は公然と鴉片を、輸入して大儲けをしてゐるといふ國です』

『アメリカつて國もわるい國なの？』

『さうです、イギリスと同じくらの悪い國なのです。……もとくアメリカといふ國を建てたのはイギリスから渡つて行つた破落戸どもなのです。……さうして久しいあひだイギリスの植民地だつたのです。ところが少し自分の國が強くなると、本國のイギリスへ税金を納めるのが厭だといつて、本國へ戦争をしかけ、獨立したといふ國なのです』

『みんな厭な國ばかりね。……そんな厭な國が日本へも手を出さうとしてゐるのね』

『さうです、もうイギリスなどは一昨々年無斷で伊豆の下田港へ軍艦を碇泊させ、日本を嚇しました』

『その時日本は何うしたの？』

『江川太郎左衛門先生が出かけて行き、食物や燃料が欲しいなら賣つてやるが、日本は鎖國といつて外國とは交通貿易をしてゐないのだから急いで出航して行くと命じ、追ひはらつてしまひました』

『江川先生、お偉いのねえ、……アメリカはまだ來ないの？』

『まだ來ません。しかし來年あたりは來るかもしれないと、先生はおつしやるのです』

『來たら又江川先生が追ひはらうといふわ』

『アメリカといふ國は、イギリスよりもつと生意氣で成上り者根性を持つてゐてわがまゝ者ですから無理のことを云ひ出してなかく歸りませう』

『どうしたらいいの』

『ですから、さういふ外國の赤髭どもに乗じられないやうに、國防をしつかりしなければいけないのです』

毛間の部落の境となつてゐる右手の遙彼方の緑の丘の邊で、白い色や茶色の物が動いてゐた。放し飼にしてある鳥らしかつた。鷹が一羽、二人の頭上を翔けて、富士の頂の方へ行つた。

この時數人の部落の男女が篋や鎌を持ち、二人の側を通りかゝつたが、

『お雪お嬢さん、いゝお天氣ですね』

『お雪お嬢さん、都からおいでになつた綺麗なお侍さんとあんまり仲よくすると、毛間の松太郎が嫉妬して、また騒動を起しますぜ』

『いや最う毛間の奴等は、都から來たお侍さんがお雪お嬢さんのお婿さんになるさうだと噂してゐますぜ』

『松太郎が嫉妬で眼がくらみあばれまはつてゐるといふ噂もきゝましたよ』

と、擲揄するのではなく、親切から、さうして氣安い心持から、云つた。

『阿呆らしい、何云ふのさ』

と、お雪は、赧い顔もしないで、

『お婿さんだの何んだのと、いやらしい。妾はね、鴨下兄さんから江川太郎左衛門といふ偉い先生のお話きいてゐるのよ。あんた達も聞くといふわ』

『わたしたちにはそんな暇はござんせん。……岩茸を採らなけりやア』

——それで、この連中は行過ぎた。

岩茸採りといつても、岩茸ばかりを採るのではなく、たら根とか山葵とか、いろ／＼の薬草とか、かんばの皮とかいふ物を採り、それを背負子にしよつて、里へ持つて出て、賣つて、その金で味噌や米を買ふのであつた。

『さう／＼お雪さんの結婚ばなし、私もあなたのお父さまから聞きましたが……』

と、庄三郎は微笑しながら、

『松太郎といふ人にあなたは不満なのですか？』

と訊いた。

『いゝえ、不満にも何んにも、わたし、お嫁入りのことなど考へても見なかつたのですもの』

『成程』

(この無邪氣な娘なら然うだらう)

と思つた。

さうして、

(こんな無邪氣な無垢の娘へ、日本の國體が、世界無比の優れたものであることから説いて教へ、日本婦人の貞操問題や、日本民族が他民族とくらべてどんなに優秀であるかといふことなどを知らせ、ゆつくり教育したなら、それこそ理想的の日本婦人が出来るのだが)

と思ひ、

(明覺行者をさがすといふ重大な使命を持つてゐるのでなかつたら、わたしはこの娘を教育するために幾月でもこゝにゐるのだが)

とさへ思つた。

花の香や緑葉の匂ひを孕んだ微風が、二人を撫でるやうに吹いて過ぎた。

その時、紺の腹掛、紺の股引、紺づくめの服装をし、腰に麻繩を付けた岩茸とりの一群が、又、とほりかゝつたが、

『行者様は毛間にお居でになるさうだね』

『明覺様にお説教されたら、いろきちがひの松太郎といふ男も、眼をさまして、お雪お嬢さんを思ひきるだらうよ』

と、大聲で話し合つてゐた。

庄三郎は石から腰を上げ、

『ちよつとお待ちください。……では明覺行者は毛間の部落にゐるのですか？』
と、その一群へ訊いた。

『はい、毛間のお頭の茂十郎さんの所にゐるさうです』

追 害 者

それを聞くと庄三郎は、

(有難い！)

と思つた。

(俺がこの地へ来たのは明覺行者をさがし出して葦山へ連れてゆくためなのだ。……そればかりが俺の使命なのだ。……その明覺行者が毛間にゐるといふ、有難い！ すぐに行つて！)
と、彼は、ほとんど夢中の態で毛間の部落の方へ走りだした。

『あッ、庄三郎様ア——ッ……兄さ——ン』

といふお雪の聲がすぐに背後から聞えて来た。

庄三郎は振り返つた。

お雪が、川岸の石の邊から數間此方へ走つて来たところで立止まり、絶望と悲哀との表情を顔にあらはして呼んでゐた。

『お、お雪さん、私は行者様と逢ふために、毛間へ行きます。……行者様を連れて、すぐに歸つて來ます！……待つてゐて下さい』

かう云ひすすると庄三郎は、もうお雪のことなど念頭になく、毛間をさして走つた。

川に沿つたり川から離れたり橋林をくゞつたり窪地を越えたりして走つた。

やがて毛間と落合との境をなしてゐる丘へ来た。頂きへ登つた時ふりかへつて見た。

モク／＼と緑の泡のやうに起伏してゐる樹海が足下から、丘の裾から、ずつと落合部落の方まで續き廣がつてゐる、落合部落の家々が黒い點かのやうに見えてゐた。彼が厄介になつてゐた左五衛門の家は部落のいちばん奥にあつて、一段高い所に立つてゐたので夫れと知れ、陽光で、家根が白つぽく浮き出してゐるのが見えた。

庄三郎は、さつきまでお雪と話してゐた川岸の方を見た。お雪がまだ其處にゐるにしても、かう距離がはなれてゐてはわかる筈はなかつた。でも庄三郎は、まだお雪がそこにゐて此方を見てゐるやうな氣がした。

(可愛い、妹！ 待つておいで、すぐ歸つて來るから……)

と、口の中で呟き、すぐに丘を毛間へ向つて駆下りた。

それから二町ほど走つた。

その時、行手の藪の蔭から三人の半裸體の男が飛び出し、行手を遮るやうにして立ちふさがると、一人の、手に柄の長い斧をひつさげた、顔に傷のある男が、

『お侍さん、私達ア、刑部の者ですが、何か恵んでやつておくんない』
と云つた。

すると、もう一人、片腕の無い——さうして満足の右手に山刀を持つてゐる男が、

『私達ア刑部の者ですが、小錢でもあつたら蒔いてやつておくんない』
と云つた。

もう一人の、鬢に大きな禿のある男は、眼をわざとらしく光らせ無言で腕を組んでゐた。

『うるさい！』

と庄三郎は叱つたが、

(うるさい奴へは手つとり早くカタをつけて)

と思ひかへし、懐中から小粒をつまみ出すと投出し、

『それ』

と云ひすて、走りだした。

しかし走りだした行手へは、もうその三人が先廻りをして立ちふさがつてゐて、

『わたし達は刑部の者ですが……』

三人の、追剥のやうな男が、刑部の者ですがといふ口吻には、威嚇的の響があつて、(刑部部落の者に反抗するとひどい目にははされるぜ！)と云つてゐるやうなところがあつた。

さうして庄三郎も、實は數日落合の部落に逗留してゐる間に、刑部の部落が不頼漢の集まりであるといふことは聞いて知つてゐた。

しかし、行状に何んの缺點もない庄三郎にとつては、刑部の部落が不頼漢の集りであらうと、その刑部の不頼漢が、因縁をつけようと問題でなかつた。

それに先を急いでゐた。

それで、

『うるさい！ 退け』

と一喝するや、三人を掻いやつて走つた。

すると、

『野郎！』

と叫んで、斧をひつさげてゐた男が、その斧で切りこんで来た。

『……………』

無言で、庄三郎は、一方へ身をかはした。綺麗な、流れるやうな姿勢であつた。切りこんで来た男は、すると、何うしたのか、庄三郎の顔を、庄三郎と擦れくくのやうに走つて、三間も先の方へ勝手に飛んで行つて、勝手にひつくり返つて了つた。

『巫山戯た真似を！』

と叫んで、すぐに、脇差を持つた男が、その脇差で、切りこんで来た。

庄三郎は片足を上げた。

すると、相手の不頼漢は、腹痛でもおこしたやうに、前を両手で抑へて、地面へちよこまつてしまつた。

『野郎、覚えてゐろ！ 刑部の者へ手向やがつて！』

と、三人目の男は、叫びく横つ飛びに飛んで逃げて行つた。

庄三郎は、もうその時には、毛間の方へ向かつて走つてゐた。

庄三郎は、ちよつと形容しにくい程の武術の達人なのである。

彼は幕末の三大剣士の筆頭といはれてゐる篤信齋事齋藤彌九郎の高弟なのである。

その齋藤彌九郎は、江川太郎左衛門の親友で、且、或る時代、太郎左衛門に懇望されて、葦山の代官所の手代（總支配人）となつたことがあつた。

さういふ關係で、庄三郎は齋藤彌九郎の塾、練兵館で剣道を學び、十八歳の時に免許を取り、二十歳の時に皆傳となり、現在は、ほとんど名人の域に達してゐる。

『庄三郎の剣技は、春風に戯まれてゐる柳の糸のやうで、上品で、美しく、柔かいが、あつかひにくい。けだし天才の技であらう』

と、篤信齋が賞揚したほどである。

庄三郎は、少し走つた時、うしろの方から竹法螺の鳴る音を聞いた。

（おや？）

と思つて振り返つてみた。

右手に川が流れてゐ、その川を越すと崖になつてゐ、崖には矮林が繁つてゐ、その林を通して刑部部落へ行く小徑があつたが、その小徑を刑部部落の方へ辿りながら、いまし方逃げて行つた不頼漢が竹法螺を吹いてゐる姿が見えた。

（なぜ竹法螺など吹くのだらう？）

と庄三郎は合點がいかなかつたが、もしその真相を知つたなら、いかな彼でも氣味悪く思ふことだ

らう。

と、いふのは、刑部の部落民には部落民としての掟があつて、自分たちの仲間が迫害された時には竹法螺を吹いて、それを仲間へ知らせる。竹法螺の音を聞いた刑部部落の者は、すぐにそれに應じて竹法螺を吹いて答へ、それから最初に竹法螺の聞いた方へ走つて行つて、竹法螺の主と逢つて、その主に加勢する。

又、二番目の竹法螺の音を聞いた部落民も、すぐに自分の竹法螺を吹いて答へ、それから竹法螺の聞えて来た方へ走つて行つて味方に加勢する。

かういふことを次から次とやるのであつた。

その結果は、竹法螺の音は、遂には、彼等の本據の刑部の部落へ迄またゝく間に届き、刑部の部落から幾十人でも人数が繰出され、迫害された仲間を助けることになるのであつた。

もうその證據があらはれた。

崖の裏側の、日蔭の林の中に、きたない天幕を張つて、その中で犬の肉やら猫の肉やら解らない物を、鍋で煮て、飯をたべてゐた親子三人づれの刑部者がゐたが、竹法螺の音を聞くと、父親らしい男が立上がり、天幕の柱につるしてあつた竹法螺を取ると、吹いた。

すると、その林のすうと奥の方から、それに答へて、竹法螺の音がきこえて来た。

『よし』

といふと、竹法螺を抛出し、竹法螺の聞えて来た方へ走りだした。

林のすつと奥の方で、今、竹法螺を吹いてゐる者があつた。

どこかの里から盗んで来たらしい、葱だの大根だの、束を抱へた女と、その亭主らしい男とで、亭主らしい男が竹法螺を吹いてゐた。

すると、その林の更に奥の、浅い谷の底と、谷を越した禿丘の中腹邊と、いや、その他のあちこちから、竹法螺の音が、聞えて来た。

『よし』

といふと、亭主らしい男は、竹法螺の聞えて来た方へ走つて行つた。

その男の姿が見えなくなつた頃谷の底や禿丘の裾や中腹から、五六人の刑部者たちが、此方へ走つて来る姿が、動く豆のやうに見え、それがだん／＼大きくなつて来た。

その中に、意外にも本庄小源太がゐた。

總髪の大髻、野袴、依然たる姿である。

彼はあの夜、左五衛門の屋敷の庭で、鴨下庄三郎と言葉戦ひをした後、尙、睨みあつてゐた。そこへ突然毛間部落の者と落合部落の者とが、揉みあひながらなだれ込んで来た。

亂闘の最中にあらはれたのが明覺行者で、二部落の者たちは、その明覺の後に従いて門外へ出た。

その群集に押され押されて小源太も門外へ出た。行者の足の速いこと、いつたら！門外へ出た途端に姿が見えなくなり、それに興ざめた二部落の者共も、いつかチリ／＼に散つてしまつた。

小源太は一人とりのこされ、門外でしばらく呆然としてゐた。

(鴨下庄三郎は何うしたらう？)

このことも氣にかゝつた。

群集にまじつて門外へ出たやうでもあれば、まだ門内にゐるやうでもあつた。

しかし庄三郎のことより自分のことの方が問題で、

(さて俺は是から何うしたものだ？)

小源太はちよつと行場に迷ひ、宛なしに歩きだした。部落には宿屋などのある筈はない。さりとして部落の家を叩き起して泊めてもらふのも氣の毒であり、それに胡散くさがつて泊めてもくれまい。

(野宿かな)

と思つた時、林の中から焚火の光が見えた。

近づいて見ると、穢ならしい、兇暴らしい人間が數人、天幕を張り、焚火へ鍋をかけて食事をして

ゐた。

聞けば刑部部落の者だといふ。

頼んでその夜その天幕の中へ泊めてもらつたのが縁となつて、ズル／＼に彼等と一緒に寝起するやうになり、彼等の本據の刑部の部落へも行き、今日まで日を送つて來たのであつた。

放浪性の持主である彼にとつては、刑部者の野の獸のやうな生活が面白かつた。

彼は、刑部者たちと住みながら明覺行者と庄三郎の身上について調べた。

行者の行衛はハツキリわからなかつたが、庄三郎は、あの夜怪我をして、左五衛門の家に厄介になつてゐるといふことを確めた。

(居場所さへわかつてをれば心配はない)

彼はかう思つた。

刑部者たちと一緒に住んでゐるうちに、彼の興味を一番そゝつたのは、頼朝公が富士の卷狩の際に富士山の何處かへ莫大な黄金を埋めた、さうして俺たちはその黄金をさがし出すために此處へ集まつて來たので、天幕を張つてあちこちに野宿をするのも、その黄金の在所を知る爲さ——といふ、彼等の話であつた。

(夢のやうな愚かな傳説さ)

と、最初は、小源太も、相手にしなかつたが、しかし彼等の、そのことに對する確信ぶりを見てゐるうちに、

(ひよつとするとそんなことがあつたかもしれない。……もし、それが眞實なら……俺もそいつを探しあて……)

と思ふやうになつた。

その小源太が、刑部者たちと一緒に、谿を駈上がつて來た。

ところが、最初の刑部者が、崖の小徑を辿りながら竹法螺を吹いたのを、大藪の蔭で見つゝ一群の男女があつた。

それは、先刻、落合の部落の川の岸で、庄三郎とお雪とが話してゐた時、通りかゝつて挨拶を交はした、最初の岩茸どりの群であつた。

『おい大變だ。刑部の奴等が竹法螺を吹出したぜ』

『あそこで、刑部者三人をやつゝけたお侍さんは鴨下さんのやうだつたが、やつけられた恨みで、あいつ等、鴨下さんを……』

『さうら』

『こいつはうつつちやつてはおかれぬ』

『左五衛門旦那やお雪さんへ……』

『知らせろ！』

『馬に乗つて行け！ 放牧馬に』

そこで數人の岩茸とり達は、附近に草を食んでゐた野馬にまたがり、自分たちの部落、落合の方へ走つて行つた。

自分のために、そのやうな騒動が起つてゐるとも知らない庄三郎は、この頃には、毛間の部落の方へ急いで歩いてゐた。

とう／＼彼は毛間の部落へ入つた。

毛間の部落は、落合の部落に比べると、濕つた窪地にあつた。

家数は落合よりもすこし多いやうであり、その家々も落合の家よりこざつぱりとしてゐ、家にも往來にも人影が多く、落合よりも賑かなのであるが、それでゐて一向陽氣に感じられなかつた。

妙に陰險に感じられるのである。

それは、落合の人たちは、大自然へ直接ぶつかつて行つて、岩茸とか山獨活とかたら根とかを採るのを生活としてゐるので、その心持も生活法も自づと自然で質朴で快活なのであるが、毛間の人たちは、白木を輻輳にかけて、盆とか玩具とか椀とか膳とか、さういふ日用品を製造し、それを都會へ

出して、金に換へるといふのがその商賣だったので、自然と性質も生活法も人間的であり都會的であり、小利口であり、駆引的であり、陰險にも感じられるのであった。

庄三郎の歩いてゆく道の左右の家々から、羽虫の唸りのやうな轆轤の廻る音が聞えて来た。

どの家でも、幾人かの男女が、薄暗い部屋に圓く集まつて、ノロノロと物變さうに手仕事をしていた。轆轤細工の器物を整理したり磨いたり包んだりしてゐるのであった。

露路には、白木が積んであつてそれが陽に照らされ、巨大な動物の骨かのやうに白く輝いてゐて、その周囲で小供たちが遊んでゐた。

その中に庄三郎は一つの變な現象にぶつかつた。

それは、自分の通るのを見るや、この部落の人たちが、怒つたやうな、怨んだやうな眼で睨んだりやがてはさういふ感情を動作や言葉に出してあらはすことであつた。

最初は彼は、

(こんな、この部落では見慣れない侍姿などで通るので、侵入者、乃至は異端者として、白眼視するのだらう。量見の狭い山里などにはよくあることさ)

と思つてゐたが、しかし間もなく、そんな單純な理由からではないことがわかつた。

彼は一軒の家の門口に立つてゐる男へ、

『このお頭の茂十郎といふ人の家は何處ですか？』

と訊いた。

するとその男は、無言で彼を見詰めてゐたが、無言で家の中へ驅込んで行き、集まつてゐた數人の男女へ何か囁いた。

するとその人たちは一勢に立上がり、縁側に立つたり、門口へ出たりして、庄三郎を見詰めた。

その表情にも態度にも露骨な敵意があつた。

急に一人の女が叫んだ。

『このお侍さんだわ、落合のお雪さんのお婿さんになる人は！』

『俺たち毛間の者へ恥をかゝせたのはこの侍だ！』

と、すぐに一人の老人が應じた。

それから皆口々に罵りだした。

『俺等のお頭の茂十郎旦那の一家へ泥をぬつたのはこの侍だ』

『松太郎若旦那を色情狂のやうにしたのはこの侍だ』

『何んと思つて俺たちの所へ來たんだらう』

『みせびらかしに來たのさ』

『毛間から追出せ！』

『せつかく来てくれたんだ、ご馳走しようぜ』

『水雑水をくらはせろ』

『簀巻にしてへ』

(は、あ、然うだつたのか……)

と、庄三郎は漸とわかつた。

(落合の川の邊でお雪さんと話してゐると、部落の人たちが通りかゝり、わしがお雪さんの婿になるといつて、毛間の人たちが怒つてゐるなどといつたが……その時は冗談とばかり思つて聞流したが、この様子では、冗談ではない。……それにしても、迷惑な疑ひをかけられたものだ)

辯解するのも馬鹿らしく、又、辯解したところで、この様子では聞入れさうもなかつたので、庄三郎は黙つて立去ることにし、歩きだした。

大變な事になつてゐた。

僅かな時間に、彼が——すなはちこの部落のお頭の若旦那様の戀敵が、この部落へ姿をあらはしたといふ噂が傳はつたものと見え、歩きだした時には、彼の左右、彼の前後には、數へきれないほどの部落の男女が集まつてゐて、憎惡に充ちた眼で彼を見詰め、ゾロ／＼と彼の後を従けて來た。

突然、石が、彼の頬を掠めて飛んだ。不意に丸太が彼の足許へころがつて來た。鳥銃の火繩の匂がした。犬が唸りながら、彼の踵へ食ひついて來た。

(これは大變な事になつたぞ)

と、庄三郎は部落民といふ者の、執念ぶかさ、慘酷性、野蠻性を連想して、肌寒さを感じて來た。

(うか／＼してゐると、俺はほんとうに、この連中に私刑にあはされるかもしれないぞ)

——といつて、何うしたら可いのだ?

——どうしたら遁れることが出来るだらう?

(刀を抜いて切抜け、落合の部落へ切返さうか?)

はたして是だけの人数を切散らして、落合まで逃げられるか何うか、それさへ不安に思はれて來た。そのうちに彼はもう一つ不思議な現象にぶつからざるを得なかつた。

それは、彼が何時の間にか、自分の意志で無く、群集の意志のまゝに、ある一方へ歩かされてゐるといふことであつた。

彼が表通りを避けて裏道へ行かうとすると、その方角に大勢の男女が人塀を作つてゐて、彼を通さなかつた。

後へ引返さうとすると、そこにも人塀が出來てゐて彼を遮つた。

彼は一方へ一方へと歩かされてゐた。
やがて彼は人家から離れた野へ出た。
野の向ふに大きな沼がひろがつてゐた。

いよく敷を増した部落民たちは、彼を包んで、彼をその沼の方へ歩ませた。

(水雑水)

——先刻、部落民の一人の云つた言葉を思出し、庄三郎は慄然とした。

(あの沼で！)

巫女の家

この頃一軒の家の一つの部屋に老婆がゐた。

静子嬢であつた。

窪んだ眼、高い険しい鼻、薄い大きい口、胡麻鹽の髪、この巫女の顔は、五十を過ぎた今でもなかなか美しいのであつた。

それが、漆でも塗つたやうに黒光つてゐる柱や、磁紙でも張つたのではないかと思はれるほど煤けてゐる襖やに囲まれて、ちんまりと坐り、白木の小机の上の古文書を読んでゐる様は、蘆雪の描いた

山姥のやうであつた。

その部屋の前方には縁側があり縁側の前には、生垣をめぐらした小廣い庭があり、その庭や縁側には陽があかるくあたつてゐて、庭で餌をあさつてゐる白い家鶏などは、雪の地かのやうに華やかに輝いてゐたが、低い庇に蔽はれてゐる静子嬢の部屋は、宵闇のやうに暗かつた。

古文書は、富士山に關するものらしく、

『富士山を中心にした地勢一帯を太古に於ては吾田といひ、吾田の國主を大山祇といひ、その娘を木花開耶姫と稱す。故に三島神社に於ては大山祇を祭神とし、淺間神社に於ては木花開耶姫を祭神として祀る。……富士といふ名は、吾田より以前、この地方に住居せし蝦夷人(今のアイヌ人)が富士山の雄大秀麗にして、且、四時雪をいたゞきながら、尙、頂きより火を噴くに感じ、火の山と呼びしより始まり、フジとは蝦夷人語にて「火」又は「火の女神」といふことなり』

といふやうな意味のことが書いてあつた。

静子嬢は、聲を立てないで、唇ばかりを動かして讀んで行つた。

その時、

『お母さん、沼の方へ大勢の部落の衆がゾロ／＼行くんですが、何か起つたんぢやアないかしら』
といひながら、裏で洗濯でもしてゐたらしく、絞つた浴衣を手に持ち、襖をかけ、白い肉付のよい

腕を惜気もなくあらはした、静子嬢の娘で、数日前、泥水商賣から足を洗ひ、下田から、こゝ毛間の部落の母の家へ歸つて来たお鳥が縁側へ腰をかけた。

しかし嬢は、古文書から顔も上げないで、

『あの大きな古沼は曲者なのだよ。いゝえ、化物なのだよ。わしが此處にゐて睨んでゐるから悪いことをしないばかりさ。……だつて然うちやアないか、どんなに雨が降りつゞいてもあの沼は水嵩を増さないし、どんなに旱天がつゞいても水減りがしないんだからね。——何んですつて、あの沼の方へ部落の衆が大勢行くんですつて？ それぢやア沼がその人たちを呼んでゐるんでせうよ。……あの沼が呼ぶからにはロクなことは起るまいよ。……まあそんなことより富士山のあらたかさについて研究なさいよ。……折角あんたも下界の厭な商賣から足を洗つて富士山の娘として、故郷へ歸つて来たのだから、富士山のことを真剣に研究なさいよ』

と云ひ、また古文書を黙讀して行つた。

『富士山のことなら妾今だつて随分知つてゐますわ』

と云ひながらお鳥は、生垣の遙か彼方に、陽を反射して、磨かれた鐵盤のやうに光り、展開がつてゐる四谷沼の方を不安さうに眺めた。

四谷沼は二方野に向かつて開けてゐ、他の二方は矮林や大岩や大藪などによつて蔽はれてゐた。つ

まり毛間の部落の方へ向いた所と静子嬢の家の方へ向いた箇所とが開けてゐて、それと向ひあつた對岸は大岩や大藪や矮林によつて蔽はれてゐるのであつた。

わけても、毛間の部落の反對側の岸には巨大な瘤のやうな岩山が聳えてゐて、鳥か獸でないことにはその岩山へ登ることは出来まいといはれてゐた。いや一人だけ、明覺行者様なら登ることが出来、従つてその岩山の背後にある刑部部落へも、ほんの短い時間で行くことが出来るだらうといはれてゐた。しかし一般の人は、刑部の部落へ行かうと思つたら、その岩山の裾を大巡りに巡つて、二里以上も歩かなければならぬのであつた。

四谷沼を目がけて、毛間部落の人達が、蟻の群のやうに押しかけてゐた。

それは勿論、鴨下庄三郎を水葬禮にしようとして、庄三郎を追立て、歩いて行く群集なのであつたが、縁に腰かけて眺めてゐるお鳥にはそんな理由はわかつてゐなかつたので、たゞ不思議なこと、何んとなく不吉のことと思ふばかりであつた。

『お母さん、まあこゝへちよつといらしつて、あれをごらんなさいよ。……随分變ですわ。……部落の衆、みんな亢奮してゐますわ。……喚いたり呷鳴つたり手をふりあげたりしてをりますわ』

お鳥は縁から立上り、手を眼の上へかざして云つた。

彼女の眼前に展開つてゐるのは、丈延びた緑の草と、熔岩と、藪と、とびくりに立つてゐる丈の低

い木々等で出来てゐる曠野であつたが、その上を、夏なので、白地の着物を着た者が多く、たま〜其處へ黒地の着物を着た人の雑つた一團が——だから黒白の市松模様のやうな群集が、沼の方へ押してゆくのであつた。

（おや可笑いわ、何んだかお侍さんのやうな人が一人雑つてゐるわ。……さうしてその人を取圍んで沼の方へ行くやうだわ）

と彼女は呟いた。

そのうちに、そのお侍さんが右の方へ走らうとする形を見せた。すると十數人の部落の衆が、その方へ先廻りをして立ちふさがつた。

途方にくれたやうにお侍さんは沼の方へ歩いて行つた。

でも又お侍さんは左手の方へ走りかけた。

すると群集は一勢にその後を追ひ、その行手に立ちふさがり、嘯鳴り喚き、手に持つてゐる棒の竹槍らしいもの山の山刀らしいものを振上げた。

お侍さんは澁々と沼の方へ歩いて行つた。

『お母さん、どうしても變よ。……部落の衆はね。他者らしいお侍さんを取圍んで、沼の方へ追ひたてゝ行くんですよ。……沼で何か慘酷なことをするんぢやアないでせうか』

とお鳥は二三歩生垣の方へ歩きながら云つた。

しかし老ひたる巫女は依然として古文書から眼を放さないで、

『お鳥や、そんなことより富士山が何故三國一といはれるか、その理由を研究するといふよ。……それはね、世界一といふことなのですよ。……三國といふのはね……三國といふのはね日本と支那と印度とのことでね、三國一といふ言葉の云ひ出された頃は、世界はこの三つの國で出来てゐるものと思つてゐたのですよ。今でこそ、ロシアだのメキシコだのエギリスだの 에스パニアだのオランダだのといふ國々のあることがわかつたけれどね。……ですから是からは富士山のことを三國一などといはずに、世界一といはなければいけないのですよ』

と静子嬢はいひつゞけた。

『この世界一の富士山の偉さは數へきれないほど澤山あるのですけれど、とりわけ偉く思はれることは、人間は勿論、獸でも鳥でも木でも草でも、土でも水でも——水といへばその裾には河口湖だの精進湖だのといつて五つの湖水さへあるのだからね。……それから雲でも霧でも、いゝえ、世の中の一切を勝手に住ませ勝手に振舞はせながら、自分一人だけはいつても同じ形、變らぬ姿、動かぬ相をして居ることだよ。……人間でいへば君子だし、國でいへば君子國なのだよ。……君子國といへば日本が君子國なのだよ。……ごらん。日本の國は、支那の學問でも印度の佛様でも、この頃では西洋の國々

の知識でも、一切合財を受入れて、それをこなして、もつと善いものにして、自分の滋養にして、だんだん肥えてゆきながら、本来の姿はそのため少しも變らないのですからね。日本は君子國なのですよ。……さうして富士山はその君子國日本を代表してゐる君子山なのですよ』
彼女は若い頃には淺間神社の美しい女として仕へた身であり、その淺間神社の官司が相當造詣の深い國學者で、彼女を可愛がつて教育をほどこしたので、彼女はこの時代の女としては珍しいほど學問があるのであつた。

さうして彼女は、自分が富士山の裾野に住み、富士講の口寄巫女を稼業としてゐるだけに、富士山のこともなると、狂信的なまでに夢中になつて、その善さ、そのあらたかさ、美しさを讃へるのであつた。

彼女の性質は善良で親切で世話好きであつて、曲がつたことが嫌ひであり、やゝ頑固であつた。それで折角自分が仲人となつて、この部落の長の茂十郎の倅の松太郎と、落合部落の長の左五衛門の娘のお雪とを結婚させようとし、それを左五衛門が一旦承知しておきながら後になつて違約したことに對しては、心から怒つてゐるのであつた。

彼女には一つの恐ろしい精神病的缺陷があつた。

それは、この部屋の隣の部屋に勸請してある、淺間様の前へ坐り、その神意を承まはる際、往々

にして神がかり状態となり、神がかり状態となるや、是非善惡を超越し、周圍の意志を顧慮しないで我意を押し通すことであつて、その時の彼女は平素の彼女の美しい性質が全く失はれ、妖婆といはうか女夜叉といはうか、凄いあさましい存在となるのであつたが、不思議なことには、さういふ時の彼女の口寄は——すなはち豫言は實によくあたり、そのため部落の人々は、彼女を恐れながらも尊敬してゐるのであつた。

『おやもう時刻だよ、ご神意を伺はなければ……』

静子嬢は、古文書を机の上へ置いたまゝで隣室へ立つた。

隣室の正面に神壇が設けてあつた。

それは白木と真鍮とでつくられた立派なもので、玩具のやうに小さく併し精巧につくられてゐるさまさまの建築物はいづれも古式に則つてあつた。燈しつらねてある蠟燭の光によつて、一番奥深く飾られてある正殿の家根が明るんで見え、その前に飾られてある拜殿の柱が浮出して見え、濟藏だの幣殿だの神樂殿だの祓殿だの、建物が陰影をつくり光を放し、紫の幕や階段や、瑞籬や玉垣などは蠟燭の火影の揺ぐのにつれて、床に曳いてゐる影法師をふるはせてゐた。

これらの建物は、これも白木の三段の大盤の上に、順を追つて建て、それが蠟燭の光で遠近法をなし、ほんとうに嚴かな神域が、その一所に造營されてゐるやうに見え、最下段の盤の、筒に

差してある一對の大樹は、神域を護つてゐる森の木のやうに見え、さういふ一切の物の前の、壘の上
に坐り、額を壘へすりつけお祈りをし、神意をうかゞつてゐる静子嬢の姿は、さも敬虔の婦人が、遙
か遠くの神社に向かつて、祈願を籠めてゐる人のやうに見えた。

静子嬢には、この日頃、是非とも神意をおうかゞひして確かめたい一事があつた。

それは大昔から云ひつたへられてゐる、頼朝公が富士の卷狩の際、將來の軍用金として富士山中の
何處かへ莫大な黄金を埋めたといふが、その埋めた場所——これであつた。

ところが神意をうかゞふ毎に、まことに意外な物の形が彼女の眼に浮かんで來るのであつた。

それは巨大な法螺貝なのである。

今も彼女の心眼にその物の形があらはれて來てゐた。

今の彼女は、もう神がかり状態になつてゐるのであつたが、その彼女の閉ざされてゐる眼の暗い内
側に、その法螺貝は横仆はつてゐた。

『お、木花開耶姫命様！ お、その法螺貝は、明覺行者の持つてゐる法螺貝とそつくりではございま
せんか！ いえ明覺行者の法螺貝そのものでございます……貝の表は蝦蟇の背中のやうな色であり、
その内側は、年月のために、白色が龜甲のやうな色に變はつてゐる！ 紫色の絹の太い打紐が胴
のまはりを二重に捲きその先のたつぷりとした總が、アカシアの花のやうにふさ／＼してゐる！ 吹

口に飲めてある黒柿の管は、支那渡りの性の良い墨のやうに艶めてゐる……悉皆明覺行者の持つ
てゐる法螺貝そつくりだ……わたしにとつては憎い、競争相手の明覺行者の持つてゐる法螺貝その
ものだ……お、夫れにいたしましたも、木花開耶姫命様、頼朝公の埋たといふ黄金の有場所をおた
づねいたしてをります妾のお願ひに答へて、そのやうな物の形をお現し下さいますとは？……何故で
ございます！ 何故でございます……？』

今は、壘から顔を上げ、まだ閉ぢたまゝの眼を、正殿の方へ向け静子嬢は叫びだした。

嬢の形相は變つてゐた。髪の毛は渦巻くやうに顫へ、眼は釣上がり、叫んでゐる口からは鐵漿をつ
けた齒がむき出されてゐる。

この時、庭の方からお鳥の叫聲が聞えて來た。

『お母さま大變！ お侍様がお侍様が！』

お鳥の聲は尙きこえて來た。

『あッ、お侍さんが沼へ突落されさうになつてゐる。……部落の衆が、お侍さんの方へ詰寄つて
ゐる。……お侍さんは途方にくれてゐる。……でも、お侍さんは刀の柄へ手をかけてゐらつしや
る！……あッ、抜くかもしれない！……お母さま！……』
然うお鳥の聲がきこえて來た。

しかし、この部屋の静子嬢は、其やうな、外界からの聲に——刺戟に、わづらはされようとはしないで、神がかり状態をつゞけてゐた。

彼女は喚いた。

『富士山の主、木花開耶姫命様が明覚行者の法螺貝を、わたくしに御示現下さいますのでしたら、わたくしは、そのお旨に従つて、その法螺貝を手に入れるでございませう！……でも、妾と明覚行者とは、敵同志なのでございませう！……それは、あの人も妾も、富士山を——ですから木花開耶姫命様を祭神として奉戴き、それを祖述してを身上だからでございませう。同じ世界の競争相手だからでございませう！……しかもあの行者は、體そのもので、富士山を、縦横に経験してをります。それに反して妾は、女の身でありますから、家庭にひつそりと籠つて、勉強し、祈り、思索へてをります。……あの人と妾とは、その行方が反對なのでございませう。……それで一層仲が悪いのだらうと思ひます……どつちみち……いや何うでもよい！……あなたさまが、あの行者の法螺貝を御示現下さいましたのですから、わたくしは、あの行者を追詰めて、彼の持物を奪ひ取つて、黄金の有場所を……』

——それにしても、彼女は、どうして、富士山の何處かに黄金が埋藏してあるなどといふ荒唐無稽の傳説を信じてゐるのであらう？

それは、第一には、さういふ傳説を、彼女が幼少時代から聞いて知つてゐたこと。第二には、その

ことを最近になつて、刑部の部落民が新規に云ひ出し、しかも、天幕を張つて富士山一帯を探検して、その黄金を探しはじめたのに刺戟されたこと。第三には、富士山を偏執狂的に尊敬してゐる彼女から見れば、成程、さうした意味の莫大な黄金ぐらゐ——何物をも抱擁する富士山として抱擁することなど不思議でも不自然でもないと思つたこと等が、彼女をこの境地に落入れたのである。

彼女は突然立ち上がり、神壇の傍らに立てかけてあつた、丈六尺の御幣を取ると、それを振立てた。この御幣は、神意を伺はうとして、静子嬢の口寄を頼みに來たお客さんに對して、振立てて、そのお客さんの、精神を統一させるために役立てる道具であつた。

さうして、この御幣を振立てる境地に達した時、静子嬢の神がかり状態は最も高潮に達するのであつた。

でも、

この時、

お鳥の、

齒を食ひしつたやうな聲がきこえて來た。

『お侍さんは、とう／＼刀を抜いたわ！』

さう叫んだお鳥は庭に立つて、四谷沼の方を見てゐた。

彼女の眼に見える沼のほとりでは、彼女の叫んだとほりのことが行はれてゐた。

沼へ落ちこみさうなほどにも追ひつめられたお侍さんが、拔身を正眼につけて、その前と左右とに逼つて來てゐる毛間部落の衆と向かひあつてゐた。拔身が陽を刎ねかへしてゐるのであらう、氷柱のやうに光つてゐた。いや、氷柱のやうに光つてゐるものが、お侍さんの腹の邊から斜に前方へ突出されてゐるので、それが拔身であるとお鳥の眼に見えたのであつた。

その光景も凄かつたが、しかしそのお侍さんの三方から逼つて、鉛を熔かして湛へたやうな沼の中へ、お侍さんを投込まうとしてゐる部落の衆の亢奮してゐる姿も凄かつた。

宙に『甘』の字を長く延ばしたやうな物の形が揺れてゐた。梯子らしい。その梯子で、お侍さんを叩付し、沼へ落としてやらうとしてゐるらしい。その梯子を中心にして、十数本棒が揺れてゐた。それは、竹槍だの鎗だのトビ口だの棒だの物干桿だのらしい。横に閃めいたり縦に閃めいたりして、白い光を放すものがあつた。刀だの山刀だの斧だの匕首だのらしい。さういふ物は、陽の光の漲つてゐる宙に、シルエツトのやうに浮かんで見えてゐた。しかし、さういふ物象を支へてゐる人間の塊は右往左往してゐた。

その境地から左の方に見えてゐるのは毛間の部落の人家の塊であつたが、その方へ向かつて、ころげ、黒豆のやうに走つてゐる部落の衆の一群があつたが、これは、援兵を求めるために行く連中ら

しい。ところが、その行手から、陸續と、人の群が沼を目差して寄せて來てゐた。これは沼の非常事を知つて、部落から馳せつけて來た人達らしい。

この時五六人の部落の者が此方へ——お鳥の家の方へ走つて來るのが見えた。

近づくまゝに、見ると、みんな知つてゐる顔であつた。

庭へ駆込んで來て口々に叫んだ。

『お鳥さん偉いことが出來た！』

『お鳥さん、お母さんは何うした！』『御姫は何處にゐる！』『早く俺等と一緒にお鳥さんも静子媼も沼まで來てくれ！』『あんな、お鳥さんも知つてゐる、松太郎若旦那と落合の左五衛門の娘のお雪との婚禮をぶち壊し、自分がお雪の婿になる筈の、鴨下庄三郎といふ侍！そいつが何んと思つたか、この部落へノメノメと入込んで來たのよ』『そいつを俺等あのとほり四谷沼までしよびいて來たのよ』『これから水葬禮してやるんだ！』『静子媼は、その婚禮ばなしの仲人だつた筈だ』『その媼の顔をつぶしたのが庄三郎といふ侍よ！』『憎い〜と、その侍のことをお姫はこの日頃云ひつづけてゐた筈だ』『そこで俺等、その侍を沼の餌食にするつてこと知らせに來たんだ！』

『お姫は何處にゐる！お姫に云つてくれ！……さあお鳥さんも一緒に來な！』
するとお鳥は仰天して叫んだ。

『知つてをります！ その話なら知つてをります！ 鴨下といふ……庄三郎といふ……お侍さんの話なら知つてをります！……まア、それではあそこに見えるお侍さんが、その……でも……』

『でもも蜂の頭もありやアしね！ 一緒に来て、水葬禮の手傳ひをしてくれりやアいゝのだ！ 手傳ひのが厭なら、見てゐりやアいゝ！』

『いゝえ、わたしにはそんな殺生なことは！』

お鳥は飛んでもないといふやうに手を振つた。

彼女は、世の中の酸いも甘いも噛みわけてゐる、人情なら、どんな機微にでも通じてゐる、世の中には、本當の悪人もなければ善人もない、世の中にあるものは義理と人情ばかりだ、その義理と人情の行違ひから、悪いことや、恐ろしいことや、悲しいことが起るのだ、だから悪いといはれてゐる人に對しても、ひどいと思はれてゐる事件に對しても、廣い心、温かい胸、慈愛の眼で接しなければ不可ない——と、思つてゐる女で、姐御肌の女なのであつた。

それは彼女が藝者稼業——それも、家が貧しくて賣られて行つてなつたのではなく、勝気で、享樂的で、自由を好んで、賑やか好きでといふ性質から、寂しい毛間の部落などに住み、平凡に、土臭く一生をすごすことを嫌ひ、自分から好んで家出をし、藝者に成つたのであるが——さて藝者となつていろくの異性に觸れたり、さまざまの世間の千差萬態の出來事に遇つたり、金に苦しみ、戀だの憎

しみだの嫉妬だの、情にぶつかつた結果、いつの間にか自得した人情哲學であり人生觀、社會觀なのであつた。

その彼女が、松太郎とお雪と鴨下庄三郎といふお侍さんとの、結婚のもつれ話を耳にした時、感じたことといへば、

（それは、一旦、左五衛門さんがその結婚を承知しておきながら後になつて破談にしたのは可くないけれど、でも、一部落のお頭のお左五衛門さんほどの人が、さういふ事をなされたのは、なさらなければならぬ餘儀ない理由があつたからであらうし、お雪さんが松太郎さんを嫌つて、鴨下とかいふお侍さんのお嫁さんにならうとするのは、矢つ張りそれだけの理由があるのに違ひない、さうして、その理由は、その人たちと逢つて、よく話しあつたら解ることなのに、部落の衆や、家のお母さんは松太郎さんの一家の者が、むやみと左五衛門さんやお雪さんや鴨下とかいふお侍さんを憎んだり怨んだりするのはあたらない）

といふことであつた。

今も然う思つてゐる彼女は、庭から家の内へ驅込んで、お母さんをさがし出し、沼の方へしよびいで行かう見暮に奔めいてゐる男たちの前へ立ちふさがり、

『……そんな殺生なことを！……殺生ですとも、人一人を、それも他者のお侍さんを、沼に沈めて

殺すなんて！……殺生でなくて何んでせう！……行きませう！……沼へ行きませう！……でも妾が沼へ行くのは、水葬とやらを見にゆくのではなくて、沈めかけられるお侍さんを助けに行くのだよ！……お母さんは居ります！……でも逢はせません！……お母さんは狂人です！ いゝえさ、今、狂人にならうとして、浅間様の前で、神がかりになつてゐるらしいといふのさ！……そんな狂人にそんなことを聞かせようものなら！……』

しかしその時、その母が——静子嬢が奥の部屋から姿をあらはし縁側まで走り出して来た。

部落の衆は、それと見ると、口々に喚いて、嬢の側へ駆寄らうとした。

しかし俄に足を止め、眼をみはり呼吸をのんだ。

静子嬢の形相があまりに變つてゐるからであつた。

眼は開いてゐたが何物をも見てゐないやうであり、口もあいてゐて今にも何か吠え出さうとしてゐるやうであつた。さういふ顔を支へてゐる長い細い頸は土瓶の口のやうに前へ延び、その頸を生やしてゐる肩は怒つて是も前へ突出されてゐる。さういふ彼女が巨大な御幣を槍か薙刀かのやうに小脇にかゝへてゐるのであつた。

彼女は果して喚出した。

『部落の衆もお鳥もわしと一緒においで！ さうして行者を捕へておくれ！……明覺行者をとらへて

持つてゐる法螺貝をさへ手に入れたら、富士山に埋藏されてある黄金の有場所がわかるのぢや！……行者は、昨日まで茂十郎様のお家にゐた筈ぢや！ 今もゐるであらう？ さあ行つて捕へよう！』喚き終へると、彼女は、縁を飛び下り、庭を駆抜け、生垣の外へ出た。

そこで又わめいた。

『これは神告なのぢや！ 木花聞耶姫命様の神告なのぢや！』

さうして野を部落の方へ走出した。

部落の衆たちは、その後を追ひながら口々に叫んだ。

『やあ、みんな来い！ 嬢が神告を下された！……黄金の有場所が解るさうな！』

『静子嬢の神告ならたしかなものだ！』

『明覺様を捕へろ！』

『法螺貝を手に入れろ！』

部落の衆は、嬢に追付き、嬢を取圍み、一團となつて、曠野を走りだした。

部落の衆たちは、この富士山の傳説に就いては、先祖から代々語りつがれて知つてゐた。しかし、それはお伽噺のやうなもの夢のやうな話として知つてゐたのであつた。さうして誰もが信じてはゐなかつた。しかるにこの頃になつて刑部の者たちが、それを新規に云ひだし、探がしはじめさへした。

そこで毛間の者達も『はてな?』と思ひだした。その中に、日頃から、その神がかり状態における豫言の的中に敬意を拂つてゐる静子嬢が、事實黄金は富士山の何處かに埋藏してあるらしいと云ひ出した。そこで部落の衆は、その傳説を信するやうになつた。

その嬢が、黄金の有場所がわかりさうだといつて走りだしたのである。嬢をかこんで部落の衆がはしり出したのは當然といへよう。

お鳥は、生垣の外に立ち、巨大な御幣が御輿の飾物のやうに宙になびき、それを圍んだ人間の塊が、青草が氈のやうに敷かれてゐる野を、次第に小さく部落の方へ渡つて行くのを眺めながら、『どうしよう! わたしは何うしよう!』

と呟いた。

眼を沼の方へ返した。

お侍さんの刀が閃き、部落の衆の一人が、地に倒れたのが見えた。

沼のほとり

こゝは四谷沼のほとりである。……

毛間部落の男一人を斬たふし、血にぬれた刀を正眼に構へ、鴨下庄三郎は、前後左右に眼を配つて

ゐた。

(もう是迄だ)

と決心してゐた。

(斬つて斬つて斬りぬけるより方法はな!)

さうだ、是迄は出来るだけ我慢してきた。

押され突かれ石や丸太を投げられ、罵聲を浴び嘲笑を受け、追はれるまゝに追はれて此處まで来た。

背後は沼である。もう行く所はない。来る道々、彼は幾度、暴民どもを斬り捨てようかと思つたか

れなかつた。しかし我慢した。

(明覺行者をさがし出して、葦山へ連れてゆくといふ使命がある)

と思つたからである。

さうしてこの使命を果たすことは、小にしては恩師江川太郎左衛門先生の期待に副ふことであるが、大にしては大日本國の國防に資することであると思つたからである。

(出来るだけ我慢をして、機會を見て遁れよう)

——それで刀を抜かなかつたのであつた。

大日本國の國防に資するとは?

精巧の大砲を鑄るといふことは國防上大切なことである。それを江川先生は心掛けて居られる。大砲を鑄るには反射爐を造らねばならず、反射爐をつくるには耐熱煉瓦を製せねばならず、その煉瓦を製するためには良土を手に入れなければならぬ。良土の有場所を知つてゐるのが明覚行者であるからには、それを探したすことは、國防に資することにならうではないか！

(俺の體は國防に關係ある大切の體だ！ うか／＼怪我をしてはならぬ)

そこで耐へ／＼て來たのであつたがもう不可ない！ 暴民どもは、沼へこの身を沈めようとして、露骨に敵性を現はして來た。

先刻、命知らずにも山刀で斬込んで來た一人を、肩を胸まで割りつけて斃し、その刀を、今引付けてゐる庄三郎であつた。

仲間の一人を斬付され、武士でない彼等だけに、恐怖し、一時ドツと逃げたものゝ、部落民たちは庄三郎を遠巻にして、喊聲を上げ威嚇してゐた。

庄三郎の眼に見えるその光景は！

狼のやうな憎惡に充ちた眼、牙でも持つてはゐないかと思はれるやうな開いた口、振廻はす腕、地團太をふむ足——惡意に充ちた老弱男女とその持つてゐる武器との塊で、遙か彼方の毛間部落の家々を背景とし、ギラ／＼夏の太陽の輝く空を天蓋として、ひしめいてゐた。

庄三郎は、かういふ境地に追詰められても、尙、遁れようと苦心してゐた。

(部落の方へ逃げるのは無駄である。また捕へられるだけだ。沼をめぐるつて、岩山の方へ逃げるとして)

かう思ひ、思つた時には、もう夫れを實行してゐた。走り出したのである。それと見てとつた部落民どもは、鬨の聲を上げて三方から追つた。庄三郎は踏止まつたが正面の敵に向かつて刀を振上げ、嚇し、振返りさま、すぐ背後に追逼つて來てゐた一人の部落民の眞向を胸まで斬下げ、瞬間、身をひるがへし、續いて追逼つて來たもう一人の部落民の胸を拂つた。

胸を拂はれた毛間部落の男が、悲鳴を上げて斃れるのを見捨て、庄三郎は、振返りさま、返す刀で反對から襲つて來た男の、肩を胸まで袈裟掛けにし、わざと自分も地に倒れたが、途端に、部落の男三人が、その庄三郎の、足許と枕元とを沼の方へ走つて行つた。

仲間二人を討たれたのに逆上したのと、二人を斬つたので、庄三郎に、隙が出来たものと感違ひし、その隙を狙つたつもりで斬込んで來たところ、庄三郎に寝られ、的を失い、沼の方へ走つて行つた迄に過ぎないのであつたが、餘勢で岸を駆下り、水の中へ飛込んだ。水音がし、飛沫が上がり、今まで平らにドロンと湛へてゐた沼の面に、ウネ／＼と渦が巻き、その渦の中に、水泳を知らない山國の男三人が、溺れる姿が見えたのも一瞬で、沈んでしまひ、後には竹槍が一本浮いてゐた。

と、もうこの時には、庄三郎は起上がつてゐて、次の瞬間には、部落民の群の中へ斬込んでゐた。悲鳴と混乱の同士討ちとが、部落民の間に起り、斧が飛び脇差が落ち、棒が刎ねあがり、斬りおとされた腕が草の上のところがり、女小供の泣聲が男たちの吠聲を縫つて、銅鑼と太鼓の合奏の中を笛の音が貫くやうに聞えたと思はれたが、ド——ツと、群が崩れた。部落の者たちが逃げだしたのである。忽然、空虚となつた野の中に、返り血を浴び鬢の切れた髪を亂し、拔身をさげて、一人庄三郎が立つてゐる。

さも凄く、悪鬼かのやうに見えるかと思つたところ、反對で、妙に寂しく、迷兒のやうに見えるのは、張詰めてゐた心と體とを、一時にゆるめたからであつた。本人に餘裕のある證據であつた。

部落の若い衆の死骸が五つ足下にとつてゐる。

(この隙に……)

庄三郎は、岩山の方を目掛け、沼に沿つて走りだした。

逃げはしたが、逃げ切つたのではなく、遠巻にして、屯してゐた部落の衆は、それと見ると、執念深く、鬨をあげ、追つかけ、もう十數人は、庄三郎の行手に立ちふさがり、背後からも追ひせまり、矢が二筋ほど肩を掠めて飛んで來た。

梯子が、部落民數人の手によつて投げられたのが、二度の亂闘のはじまりで、庄三郎はそれをかは

すと、血刀を眞向に振りかぶり、又もや、群の中へ驅入り、先頭の一人を斬り、狼狽と恐怖とで、持つてゐる槍を肩にかつき、突かうとはしないで、撲りかゝつて來た中年の男を、入身となつて體あたりを食はせ、仆れたところを串さしにし、そこを横から、こいつは竹槍で、突いて來たのを片手で拂いのけ、引かうとしたところを横に拂ふと、片足が股から斬りおとされ、その男は他の片足で、三間ばかり飛んだものゝ、仆れて這つた。

足音高く、又も部落民たちは逃げ散つた。

(この隙に……)

と、同じ方向へ、庄三郎は走りだしたが、部落者の執念ぶかさ！ またも追つかけ、又も十數人が行手をふさいだ。

(あゝ是では逃げおほせまい)

十人も斬つて、體もつかれ、腕もしこり、眼もすこしく眩みかけた庄三郎は、斬れば逃げ、走れば追つて來て、あくまでも執念ぶかく、この身を害めようとする部落民どもの態度に當惑し、立ちすくんだ。

すると、奇怪なことが起つた。

部落民どもの遙うしろの方から數人の者の呼ばはる聲が聞えたかと思ふと、部落民どもが一勢にそ

の方へ向き、しばらく聞きすましてゐたが、

『ナニ、嬬が！』

『お告げを……』

『ほんとか？』

『黄金の有場所が？』

『行け！』

と、喚きあひ叫びあひながら、庄三郎を見すて、その方へ走つて行つたことで、見れば、その部落民の群は、やがて空に高く、木蓮の花のやうに見える御幣らしい物の中に包み、人家の見える方へ押して行つた。

これは、いふまでもなく、静子嬬を取巻いて走つて来た四五人の部落の衆が、嬬のお告げ——すなはち、明覚行者をさがし出し、その持つてゐる法螺貝を手に入れたなら、傳説の、富士山に埋てあるといふ黄金の有場所を知ることが出来るであらう。……其の行者は、部落のお頭茂十郎様のお家にゐる筈だ。そこへ行かうと呼んだので、さてこそ庄三郎を見すて、部落民たちは引上げたのであつた。さういふ事情は庄三郎にはわからなかつたが、部落民たちの引上げて行つたことは、天祐のやうにも感じられて嬉しく、

(この際に！)

と一散に、岩山の方を目掛けて走つた。

しかしその時、岩山の裾の邊から、竹法螺の音がひびき、忽ち七八人の男が、矮林をくぐり、大岩小岩を廻り、崖をかけ上がり、此方へ走つて来たが、

『此奴だ！……やれ！……先刻の仕返しだ！』

と罵り、庄三郎を取巻いた。

刑部者たちであつた。

先頭に立つてゐた男は、竹法螺を吹いて、仲間を集めた、小鬚に禿のある男で、

『侍、さつきはよくも俺等を……刑部者は、搔かされた恥は屹度すゝぐ……この通りだ——ッ』

と脇差で斬込んで来た。

その脇差を、わけもなく叩きおとし、

(は、あ、この毛間へ来る途中、無心したのをこゝわり、亂暴に取付いて来たのをいなしてやつた、刑部部落の者共だな)

と、庄三郎は感づき、

(一難去つて又一難……しかしナーニ、たかゞ七八人……駈抜けて！)

と、もう一人の刑部者が、向ふ見すにも組付いて來たのを、足を上げて蹴仕し、岩山の方へ走りだした。

すると又も竹法螺の音と共に、十二三人の刑部者が、駈上がつて來たが、その中に一人の武士がゐる。庄三郎と顔を見合はせるや、

『やア、これは、鴨下氏ではござらぬか！』

と驚いたやうにいつた。

本庄小源太であつた。

『……………』

と庄三郎は驚いたが、

『本庄氏で……………』

『さやう』

『これは何うも……………』

『拙者も……………』

『一體どうして？』

『貴殿こそ何うして？』

『……………』

『いや、わたしから云ひませう。……………あの夜……………といふのは落合の左五衛門方の裏庭で、あなたと云ひあつてゐた時のことですが、あの夜、突然こゝの部落の者と落合の部落の者が寄せてまゐり、あなたも私も、その混乱の中へまき込まれましたね。……………私は幸ひのがれることが出来……………それから妙な縁で……………まアこまかいことは云はないとして……………妙な縁で、刑部部落の人々と一緒にくらすやうになり今日までくらしして來ました。……………ところが今日竹法螺が鳴つて……………いや、いやそのやうなこまかいこともお預けとしておいて、……………刑部の衆に聞いたところ、一人のお侍に輕蔑されたから仕返しに行くのだとのこと。……………私も數日間刑部の人たちとくらししてきた義理がありますので、では加勢しませうと、こゝまで参つたやうな次第です。……………來てみて驚きました。そのお侍といふのがあなたですからな』

『刑部の衆を輕蔑したなどは飛んだ云ひがかりで……………實は少しく事情がありました、私、落合からこの部落へ参りましたところ、その途中で刑部の衆に無心をされ、小錢をあげたところ、少いと云つて亂暴しましたので……………』

『成程、そんなことでありませう。あなたの人柄から推しましても、あなたの方から事を好まれる筈はない。……………それで、それは可いとして……………さうなると私の立場が困りましたな。……………本來あなたと

私とは敵同士です。……勿論私怨ではありませんが、しかし敵同士であることは間違ひありません。……ところが、刑部の人たちとは、私は仲よしです。……ですから、刑部の人たちが飽迄あなたに仕返しをするといふことになれば、私もその人たちと一緒にあなたを……』

『しかし、そんな……』

『さうですとも、そんな大人気ないことは武士としてやるべきことではありません。……とはいへ私の立場としては……』

『手をお引き下さい』

『さあ……それは……それをするには、手を引くだけの理由が新規に成立しないことには……』

おちつきはらつた、底つめたい聲で、かう小源太は云つて来て、その鋭い眼で、庄三郎の顔を見詰

め、口を結んだ。

刑部者どもは、二人の侍が知己だと知り、これは意外だつたといふやうに、遠くはなれ、二人を取巻き、立つたり、草へ坐つたりして、二人の會話に耳を澄ましてゐた。

『いや、よいことがあります』

と、やがて小源太は云つた。

『あなたと私との仲を——敵同士だといふ仲を拂拭してしまひませう。まつたくの他人になつてしま

ひませう』

『は、あ……』

『まつたくの他人になつてしまへば、あなたに敵對する必要はなくなります』

『他人になる。……よいでせう。……しかし他人になるには？』

『あなたが、あなたの目的を捨てるのです』

『それは……』

『明覺といふ行者をさがし出して葦山へつれて歸るといふ目的を捨てるのです』

『なりません！ それは斷じてなりません！』

『まあお聞きなさい。……再三いふとほり、あなたと私とは私怨はありません。たゞ貴郎が江川殿の命によつて明覺といふ行者をさがし出し、葦山へ連れて行かうとなさる。私は江川殿に怨があるによつて明覺を葦山へ行かせまいとする。あなたの使命を妨げようとする。それだけです。……ですから貴郎がその使命を捨て、明覺は發見出なかつたといつて葦山へお歸りになるなら、私はあなたに對して何等敵對行爲はしません。しかしもしあなたが飽迄もその使命を果たさうとなさるなら此處であなたを討果たすばかりか、こゝであなたを討ち洩しても何處までも何處までもつけ狙つて……』

『くだい！ 幾度云はれても拙者の返辭は一つぢや！ 明覺行者は、拙者かならずさがし出し葦山へ

つれて参る！ これは小にしては江川先生よりの使命を果たすためであり、大にしては、日本の國防に……』

『くだい！ しかれば我輩の言葉も一つぢや、貴殿をこゝで討つてとり、討ちもらしても……やア貴様たち！』

と、小源太は、刑部者たちの方へ振り返り、

『聞いてゐたであらうが、我輩はこの鴨下庄三郎殿と果たしあひをいたす！ 武士と武士との果合ひぢや、貴様たち手出しをしてはならぬぞ！……但、我輩が討取られた後は、鴨下氏の處分、貴様たちの自由ぢや！』

云ひすてると刀を抜き、正眼に構へた。

同時に庄三郎も、抜持つてゐた血刀を正眼に付け、相手の構へを睨んだが、

(あゝこれは立派な腕前だ！)

途端に心が澄返り、疲労が體から一時に抜けた。

名人の常道なのであつた。

弱敵——雑兵を相手に、剣法も作法も無く戦つて、クタククに疲労れても、名人なら、そこへ、新
手の名人があらはれるや、勇氣が頓に恢復して、心も澄み疲労も抜けるのであつた。

(敵にとつて不足のない男！ これなら討たれてもよい！……討たれたくはないが！)

それで、靜に、居待懸けた。

相手の變化を待ちかけたのである。

小源太も、

(見事の腕前だ！)

と、思つた。

(それに、何んといふ上品の構へだ！)

當然である！ 相手は、齋藤篤信齋が、

『春風に戯むれる柳の糸といはうか、しなやかで、上品で……』

と激賞した、劍道の天才、鴨下庄三郎であるのだから……

およそ二間のへだたりを置いて二本の刀が、八の字の形に宙に浮いてゐる。陽を反射して、白く、冷たく輝いてゐる。氷柱だ！

と、その間を岩燕が、パチ／＼と啼いて翔け過ぎた。

チリ／＼と小源太が詰めて出た。

しかし庄三郎は動かかなかつた。

庄三郎の動かないのは、居待懸けてゐるからであつた。
相手の仕かけて来るのを待つてゐるからであつた。
相手が仕掛けて来た。

その、ム——ツと通り、のつかいつて来るやうな力の凄さ！
深く地に根を下ろしてゐる岩の上に、ガツシリと生えてゐる幹太の松！
これが相手、小源太の姿勢であつた。

(然うか！)

勿論、一刹那の感覚で感じたことなのであるが、
然う感じたので、

(よ——し！)

——それで、尙、居待懸けの態度をつゞけ、他の變化へ移らなかつた。
それで……

一人はチリ／＼と詰めて出で、一人は動かなかつた。

間！

沼の、岸から少し離れた所へ、泡が一つ二つ浮かんだ。住んでゐる魚が息をしたからであらう。

寸を刻み、秒を盗んで、チリ／＼と詰めて出た小源太の足が、やがて止まつた。
間！

すると、今度は、庄三郎が、ソロ／＼と、前へ出た。

だん／＼二人の距離が縮まつて来た。

間！

『ワ——ツ』

『やつた——ツ』

『畜生オ——ツ』

『あッ、あッ、あッ』——刑部者達の叫聲だ！

……

……

しかし

その後は……

何んと静かなことであつたやらう！

シーンとしてゐる。

富士山の頂上の雪が——この眞夏にも、冬を忘れないで、雪をのせてゐる——その雪が、さわやかに、陽に輝いて、高い所から、二人の武士の決闘を見てゐる。

その二人の武士の體勢は？ 刀は？

X
エックス

これであつた。

鏢ぜりあひ！ これであつた。

二本の刀が、カツチリと合ひ、鏢と鏢とがせめぎ合つてゐるのである。これはよい！ このまゝで永久居られたらよからう！ 居られない！ 離れる！ 離れる瞬間が命のわかれ目だ！

——と、その、二本の刀の上に水にぬれた浴衣がバサリと掛かり、

『妾は、お二人さんのどつちにも怪我をさせたくないのですよ！』

といふ、女の聲が響いた。

お鳥の聲であつた。

救ひに行く人々

四谷沼のほとりで然ういふ事件の起つてゐる時、落合部落から毛間部落へ通つてゐる道でも一つの

事件が起つてゐた。

落合部落の長の左五衛門と、その娘のお雪とが馬に乗つて走つてゐる周囲を取巻いたり、前後を守つたりして、落合部落の住民たちが、刀、槍、竹槍、半弓、鳥銃、斧、鋏、熊手などの得物を持つて走つてゐるのである。

彼等は叫び、のゝしり、嘯鳴り喚いてゐた。

『おかれては大變だ！』

『鴨下さんにお怪我のない中に』

『毛間の奴等と刑部の奴等が揃つたでは何をしでかすかもしなれものではない！』

この一團の人は鴨下庄三郎の危難を救はうと走つてゐるのであつた。

庄三郎が、刑部者三人を懲らして行きすぎるや、その刑部者の一人が仲間の者を集めて仕返しをするため竹法螺を吹いた。——それを見てゐた落合部落の岩茸とりの者達が、放飼の馬に乗つて急を自分たちの長の左五衛門に知らせるため落合部落の方へ走つた。途中で、尙、庄三郎の行つた方を眺めて佇んでゐるお雪と逢つたので、お雪に事情を話し、更に左五衛門の屋敷へ駆け付けて事情を話した。

左五衛門は俠氣のある人間だつたので、

(わしの所のお客さんにもしものことがあらうものなら、わしの名折れ、わしの部落の不名譽だ)

と思ひ、

『お助けしろ！ みんな来い！』

と、召使から出入りの者たちを集め、得物を持たせ、馬に乗り、駈出した。

お雪も、兄さんとも思ふ好きな方の危難を見殺しにするやうな娘ではなかつた。

『妾も行きます！』

と云つてきかなかつた。

左五衛門は一旦は止めたが、止めて止まるやうな氣性の娘でないことを知つてゐたので、

『それではおいで。……護身用のため是を』

と脇差を渡した。

かうして乗出したのであるが、この事實を知つた部落民たちは、

『お頭の一大事だ、お雪お嬢さんの一大事だ、行つて加勢しろ！』

と、得物々々を持ち、馬や徒歩で、續々と、左五衛門親子の後を追ひ、かういふ一團となつたのである。

人の足や馬の蹄の蹴上げる砂煙は、青草や矮林で濃い緑の敷物をひろげてゐる丘陵地帯に漠々と立ち、人々の持つてゐる得物の刃が、砂煙を雲とすれば、雲を破つて閃めく電光のやうに見えた。

裸馬を日頃から好んで乗りまはしてゐた山の娘、野生の乙女のお雪が、山袴を穿いた腰へ脇差をさし、筒袖で、馬に乗り、父親と馬首を並べて走つてゆく姿は、凛々しかつた。

(庄三郎兄さんに、毛間の人達が危害を加へ、もしものことがあれば、妾に責任は半分はある)

彼女はかう思つてゐた。

それは、庄三郎と自分とが結婚するなどといふ噂が立ち、毛間の人たちが夫れで庄三郎を憎んでゐるといふことを聞き知つてゐたからである。

(だから何うしたつて妾の手でお助けしなければ……)

左五衛門は左五衛門で、

(毛間の奴等が鴨下さんに危害を加へたとすれば、その責任は全然わしにあるともいへる)と思つてゐた。

それは、毛間部落の長の茂十郎の倅松太郎と、自分の娘との結婚を、一旦、自分が承知しておきながら、破談にした。そのため、先祖代々から憎みあつてゐた二部落の者が、一層憎みあふやうになりそこへ庄三郎が不時の客となつて來、娘の婿になるなどといふ噂が立ち、そのため庄三郎が毛間部落の人々に怨みを買つたといふのであるから……

(どうともしてわしの手で鴨下さんをお助けしなければ……)

林を駆抜け丘を上り、丘を駆下り、草を踏みにじり、この一團は次第に毛間部落に近付いた。

ところがこの頃、毛間部落の一所でも一つの事件が起つてゐた。

それは、この部落の長の茂十郎の家敷の門前に大勢の部落民が集まつてゐて、叫び、わめき、罵り、怒り、笑ひ、嘲つてゐるのであつた。

その大勢の部落民は、鴨下庄三郎を四谷沼へ沈めにかけてやうとしたが、静子嬢が出現して、

「明覚行者の法螺貝を手に入れたなら、富士山に埋藏されてある黄金の有場所がわかるらしい。行者は茂十郎殿の家にゐるさうだ。行つて行者をとらへよう」

といふ意味のことを叫んだので、庄三郎をうち捨て、媼を圍んで、茂十郎の家まで寄せて来たその人々なのであつた。

媼の捧げてゐる大御幣が、群衆の頭上に高く立ち、左右に揺れてゐる。

それらの人々を前にして、門の前に一列に並んで、聲を唳らして制してゐる十數人の人々があつた。茂十郎の家の召使たちであつた。

「門がこはれる！」

「もつと静かにしてくれ！」

「お前たちは旦那の家を潰すつもりか！」

突然その中の一人が、

「旦那と若旦那とがおいになつた！」

と叫んだ。

それで一時にしんとなつた。

その時、五十がらみの、身長の高い、やせぎすの、神経質の面をした男が、同じやうな風采と容貌とを持つた二十歳ばかりの青年と一緒にあらはれた。

茂十郎と松太郎とであつた。

「皆の衆、静かに！」

と、茂十郎は、よく透る高い聲で、

「……事情は召使たちから聞いた。明覚様にお逢ひしたいのださうだな。……惜しいことをした。行者様は昨日まで確かにわしの所におゐるでなされたが、今朝、何處へ何くともおつしやらずにご出立なされた」

と云ひ、

「静子嬢よ、お前さんの云ふことは本當なのかね？」

行者様の法螺貝を手に入れよ……」

すると部落民たちは、茂十郎の言葉の終らない先に、口々に喚きだした。

『旦那様！ 嬬のお告げには狂ひはありません！』

『明覺様の法螺貝さへ手に入れることが出来たら、富士山に埋まつてゐる黄金の有場所がわかるのです！』

『黄金さへ掘り出せたら、わたし達の部落は金持になります』

『わたしたちみんな金持になります』

『落合の奴等の鼻をあかせることだつて出来るのです』

『六百年もの昔から、先祖代々様が、落合の部落と競争して、探がし出さうとした黄金です。それを目付け出すことが出来たら、ご先祖様に對しても鼻が高いのです』

『落合の奴等といへば、その落合の頭の左五衛門の娘の婿になるといふ鴨下庄三郎といふ侍を……』

『わたし達ア……』

『四谷沼で……』

『ワ——ツ』

『水葬禮に……』

『あいつ、あれから何うなつたらう？』

『水葬禮やめて此方へ来たんだが……』

『ワ——ツ』

『それだ！』と茂十郎が、この時までは、少し蒼白い顔をしてゐたが、今は充奮で充血し、赭い顔をしてゐるその顔を、左へ向け、右へ向けしながら、

『……その事も召使から聞いて、吃驚し、飛んでもない話、止めようと、いま、沼まで出かけようとしてゐたところなのだ！……そりやア、皆の衆の憤りや、皆の衆がわし達一家の爲めを思つて下さる心持はよくわかるし、感謝もしてゐるが……でも、そりやア不可ない！ そんなことをしては不可ない！……鴨下庄三郎さんといふお侍さんには罪はないのだから！……悪いのは落合部落の長の左五衛門さんだけだ。……男と男とが、息子の嫁にいたゞきたい、息子さんの嫁に差上げませうと約束したのに、それを後になつて破談にしたのだからな。……しかし、これとて、その怒りも怨も、わしと左五衛門さんとの二人の間のことなのだ。……その他には、誰にも責任はない！……まして、鴨下さんといふお侍さんが、その後になつて、左五衛門さんの所へおいでになり、お雪さんの婿にならうと、それは、わたしたちには關係のないことだ。……それなのにその鴨下さんを水葬禮にしようなどとは……』

一部落の束ねをするだけの人物だけあつて、茂十郎といふ男は、物がわかつてゐた。

たゞ茂十郎は、自分の支配してゐる部落が轆轤細工を以つて生活をしてゐる手工業部落であるがために、工人的であり、都會的であり、神經質であり、神經質であり、智的であり、陰性であつて、岩茸とりを商賣としてゐる原始的、自然的、天心爛漫的、開放的、陽性の落合部落の束ねをしてゐる左五衛門のやうに率直で直情徑行的には行けない節はあつた。

さういふ茂十郎の住んでゐる屋敷も、左五衛門の屋敷とはおよそ事變つてゐた。

茂十郎たちや部落民たちを遮つてゐるところの、茂十郎家の塀からして、もう左五衛門の家の嚴めしい、古風の土塀と異つてあつさりとした薄い板塀であつた。

その板塀の中に建つてゐる幾棟かの建物は、現代語でいへばバラック式の工場のやうなものであり、その建物の中には大小の轆轤が無數に据ゑつけられてあつて、少女や青年たちが轆轤細工に熱中してゐるのであつた。だから轆轤のまはる音や調子のゆる音や職人たちの鼻歌や談笑する聲が、どの建物の中からも聞えて來、大きく切つてある窓々から、明るい外光が射しこんでゐて、部屋の中の細工物の白い木肌を黄色く光らせ、空を舞つてゐる鋸屑を蛾のやうに照らしてゐるのであつた。

茂十郎の屋敷は、彼の住屋には相違なかつたが、部落の娘や息子たちを職人とした轆轤細工の工場でもあるのであつた。

それで、門前は、靜子嬢を先頭にして押寄せて來た部落民たちと親方の茂十郎との押問答で騒がし

かつたが、門内の工場は、そんなことに動搖させられず、人々は仕事に精出してゐた。

門外では茂十郎が又叫び出した。

『しかし今聞けば鴨下さんといふお侍さんを、水葬禮にもしなかつたとか！ よかつた！ それで安心した！ そんなことをされてみる、このわしはどなたにも顔をさらすことが出来なくなつてしまふ！……さあ皆の衆、引取つておくれ！……今も云つたやうに明覺行者様は今朝方ご出立なされて了つたのだから！……いや、その明覺様はな、實のところは、矢張り、わしの倅——こゝにゐる馬鹿者の松太郎と、左五衛門さんところのお雪さんとの婚禮のもつれをお心にかけて、その仲裁においで下されたのだ。……わしと左五衛門さんと和解するやうにとおつしやつてな……わしは、なま返辭をしておいたが……まアそんなことは何うでもいゝとして、行者様はおゐでにならないのだから……』

すると、この時まで、群衆の中央に立ち、御幣を捧げ、空を見上げ、まだ神がかり状態をつけてゐた靜子嬢が、亂れた髪を煙のやうに振立て、喚き出した。

『お告げがあつたぞ！ お告げが又あつたぞ！ 明覺行者はわしの手で直ぐにも、探がし出せると！——皆の衆、さあわしについておいで！ わしと一緒に富士山中さがしませう！ 明覺行者をさがしませう！……さがし出して、法螺貝をさへ手に入れたら……おいで〜！』

御幣を打振つた。

それに連れて群集は左右にわかれ、そこへ空けられた道から、神がかりの巫女は走りだした。喊聲が上がり砂煙が立ち人間の波が動き出した。部落民たちが黄金の夢を追つて、狂人媼を取巻いて、富士山の中腹をめざし登りだしたのである。

しかるに、その時、往來の彼方、落合部落の方角から、この部落の若者三四人が狂氣のやうに叫びながら走つて來た。

『大變だ！……落合の奴等が……左五衛門もお雪までも……槍や刀を持つて……大勢で……馬に乗つたりして……毛間部落を叩きこはすのだと云つて！』

『もう直ぐ入込んで來る！』

『焼討ちにするんだとよ！』

『みんな……オーイ！ みんな用意しろーッ』

この聲で、媼をかこんで行者さがしに出かけた群集は引返した。さうして、

『何んのためにやつて來るのだ』

『あいつらに焼討ちされてたまるものか』

『いゝ幸ひだ、來たら、一人のこらずやつつけてしまへ！』

と口々に叫んだ。

注進に駆付けた三四人は、

『鴨下といふ侍を助けるついでに毛間部落をたゞきつぶすのだと云つてゐるぞ』

と叫んだ。

そこへ又新注進がかけつけて來た。

『大變だ、落合の奴等、もう部落の入口までやつて來た。あれ見や、あの砂煙がさうだと喚いた。』

見れば、いかさま、この部落の入口にあたる空に、セピア色の砂煙があがつてゐた。

この騒ぎはすぐに部落中に傳はつたらしく、何の家からも人々が駆けだして來た。さうして、おちついて仕事をしてゐた茂十郎の家の工場からも、職人たちがかけ出して來た。

人の群が、茂十郎の屋敷の門前からかけて往來に一杯になつた。

茂十郎も興奮して叫びだした。

『落合の奴等が大舉して、この部落へ押寄せて來たつて！……左五衛門どんもお雪さん迄も！……もう仕方がねえ、そんな奴等に俺達の部落を荒らされて、指をくはへて引込んでおられねえ！……さあやれ！……みんな出掛けろ！……迎へ討て！……有りつたけの武器を持つて來い！……一人も遁さず始末して了へ！』

部落の長が戦闘意識をあらはしたので、部落民たちは一度に勇氣を倍加させ、『迎討て！』

と、往來を一團となつて、落合衆の寄せてくる方へ押出した。

群集の中には茂十郎の悴の松太郎もゐたが、この美貌で、神経質で、情熱家で、善良で、弱氣の青年は、寄せて来る落合衆の中に、戀しい、愛人のお雪がゐると聞いて、不安と、思慕の情とでカッとあがつて了つた。

彼は群集に雜り、召使から渡された脇差をひつさげながら、誰彼にとなく喚いたり懇願したりしてゐた。

『落合の奴等やつけて了へ！……俺もやつける！……でも、お雪さんだけへは手を出してくれるな！……あの人は怪我させてくれるな！……出来たら捕虜にしてくれ！……さうだ是非とも捕虜にしてくれ！頼む！……だが落合の奴等はやつけて了へ！』

しかし、長い傳統を持つて憎んでゐた落合部落の連中を、今日こそ公然と迎討つことが出来るといふので、敵愾心を火のやうに燃えたせてゐるこの部落の大衆は、松太郎の言葉など耳に止めようとはしなかつた。

彼等は無二無三に押し行つた。

二町ほど押出した時、行手に、落合の衆の姿が見えた。

双方で喊聲をあげた。

次の瞬間にはぶつかつてゐた。

殺戮！——喧號と、悲鳴と、得物の閃きと、砂煙とケシ飛ぶ人間の姿と！……

一頭の馬が、群衆の上へ兩脚を上げて立上がり、その上に、白い鉢巻をした娘が、刀を振上げて跨がつてゐた。

漂々しさ美しさ！ お雪であつた。

『お雪さ——ン』

と叫んで、松太郎は駆け寄りとした。

人情

毛間部落で、そのやうな亂闘が行はれてゐる時、こゝ四谷沼の岸では、變はつた光景が展開されてゐた。

拔身をひつさげた庄三郎と小源太とが、二間ほどの距離をへだて、佇み、その二人と、三角形の頂點をなす位置に、櫛をかけ、裾をからげた洗濯姿のお鳥が立ち、さういふ三人の間の地面に、洗濯物

の浴衣が落ちてゐ、それら一切の物を遠巻きにして刑部者どもが、呆氣にとられたやうな顔をして、立つたりつくくなつたりしてゐるのであつた。

庄三郎と小源太とが斬合つたあげく、

X

の形の鍔ざりあひとなつた。すると、その刀の交叉點へ、走つて來て仲裁に入つたお鳥が洗濯物の浴衣をかぶせた。

かうされては何うにもならない。

そこで庄三郎と小源太とは刀を引いて後へさがつた。

……その結果が、この光景になつたのである。

『お二人さん』

とお鳥はいつて、まづ小源太を見、それから庄三郎を見た。

『さうです、わたしとしましては本庄様にも鴨下様とやらにも、お怪我をさせたくないのでございます。……まあ夫れにしても、斬合つてゐるお侍さんのお一人が、下田で最眞にあづかつた本庄小源太様であらうとは！……いゝえ、それにも増して、この部落の人たちに、沼へ沈めにかけてさうになられた、鴨下庄三郎様といふお侍さんが、先日、富士山の横道で道に迷つておいでなされた、

清らかな綺麗なお武家様であらうとは？ 何んといふ不思議な縁でございますませう。……いゝえ、不思議でも何んでもありません、浮世のことは、恩も怨みも、みんな縁から起るものでございます。……義理の行違ひも、人情のもつれも、縁がその中になればこそです。……斬合ひとて同じこと、縁あればこそ逢ひ、逢つたればこそ憎みあひ、憎みあつたればこそ斬合ふのでございませう。何事も縁でございます。……では、その憎みあひとて、膝突きあはせてよく話しあふといふ新しい縁を作つて話さひましたら、斬合はずともよい素直な仲にかへらうではありませんか……さういふ縁をお作りしたものと駈けつけて來たのがわたし——わたしと思つてくだされて……この場を委し……わたしの家で。……はい、わたしの家は、あれ、あそこに見えるあの小家でございます。……いゝえ、わたしは、少し前から、鴨下様が、この部落の人たちに、むごたらしい目にお逢ひなされてをられるところやら、腹に据ゑかねた鴨下様が、お刀を抜かれての刃傷や……やがて、本庄様や刑部の衆やがおいでになつての果たし合ひを、ペラ／＼して見てゐたのでございます。……何うしよう？ 何うしたらよからうと思案しながら夢中の姿で、つい此處まで魅せられたやうに、引かれたやうに來て見たところ、まあ、果たし合ひのお二人のお武家様はどちらも知合！ これこそ本當に縁！ それで、女のくせに仲裁などに出……』

沼に陽がかゞよひ、水銀のやうに幾所か輝き、その光の餘波が、亢奮のために赤味注してゐるお鳥

の顔にあたり、この女の顔は、狹斜の巷に育つた種類の女の顔とは似つかない、尊い神性ある女人のやうな相を呈してゐた。

お鳥の態度と言葉とは、庄三郎と小源太との心を搏つた。

二人の武士が必死の勢ひで斬合つてゐる刀の上へ、敢然と洗濯物を投げかけて仲裁した態度は、決して見得や外聞で出来ることではなく、間違つたら自分も命をすてる覺悟の下になされた業であり、縁があつたればこそ斬合ひともなつたのであるから、よく話しあつた上、新しい縁を作つて、斬合はない状態へ歸ればよいといふ言葉も、平凡のやうで、その實、含蓄のある言葉に思はれた。

『鴨下さん』

と先づ小源太が云つた。

『お鳥の言葉を何んと思ひますかな？』

『されば……』

と庄三郎は、チラリと、感謝と敬服との眼をお鳥に走らせてから、

『尤もの言葉と……』

『お鳥の態度は？』

『親切で眞面目です』

『ではお鳥の仲裁に先づ委せ……』

『それがよろしうございませう』

——庄三郎としては、こんな所で、小源太などと果たしあひをして討たれることは、大切の使命を持つてゐる身として、元から不意だつたので、そこへお鳥といふ女があらはれた、仲裁してくれたことは、よろこびであり感謝なのであつた。

小源太の心持は、庄三郎とは少しく異つてゐた。庄三郎の使命は飽迄も阻止する。これは自分たち兄弟の者を認め庇護して下された鳥居甲斐守様への恩報じ、武士の義理、武士の意地だ！ しかし、それは夫れとして、下田港で眞直にしてやつたお鳥が一生懸命に仲裁の勞を執つてゐるのだ。ではこの女の顔を立て、この場は一應仲直りしようと、かう思つてゐるのであつた。

二本の刀が、ソロリと鞘に納まつた。

途端に、庄三郎の首が、お鳥に向かつて、傾いた。御禮の辭儀がなされたのである。

その素直な所作が、お鳥の胸を搏つた。

『まあ、勿體ない！』

——次の瞬間、顔を上げた庄三郎のその顔が、ヒタとお鳥の顔と合つた。

その眼で見られたとけで、つい微笑したくなるといはれてゐる庄三郎の眼が、感謝を罩めてお鳥を

見詰め、微笑すると、口の左右に盪が出来て、それが相手を惱殺すると稱されてゐる庄三郎のその口が、親しくお禮をいひたさうに、お鳥に向かつて動いた。

『は——ッ』

とお鳥は、息が詰まり、眩暈ひしさうになつた。

(わたしは酬いられた！)

——夢中で、感激して、何か大聲で叫ばなければ居られなくなつてお鳥は叫んだ。

『ア、有難うございます……わたしこそお禮を申します……こんな卑しい、わたしのやうな者の仲裁をお入れ下さいまして……立派なお武家がお二人とも、こゝろよくお刀をお納め下さいまして……面目とも名譽とも……さあ夫れでわたしの家へ……むさくるしいところではございますが……お立寄り下さいまして……』

しかるに此時、部落の方から鬨聲がおこり、人家と人家の切目から、數十人、いや數百人の人の群が、曠野へなだれ込んで来た。

毛間部落と落合部落の人々が格闘しながら、沼の方へ寄せて来たのである。

部落民たちの格闘はみる／＼うちに曠野一面に擴がり、やがて四谷沼の岸へまで達し、庄三郎も小源太もお鳥も刑部者たちも、その格闘の渦へまき込まれて了つた。

撲りあふ者、とつ組みあふ者、斬合ふ組、……こんな場合には火でもかけたら、どつちか勝敗を決定することが出来るとでも思つた者があつて、火をかけたらし、野の一所から、野火が燃えあがつたりした。

『庄三郎兄さ——ン』

あらゆる聲、音を貫いて然う叫ぶ聲が聞えて來、すぐに、その聲の聞えて來た所から、お雪が馬を煽り、沼の岸の方へ走らせて來た。

しかし、それを追ふやうにして涙と汗とで顔を濡らした松太郎が、

『お、お雪さん——！』

と喚きながら、走つて來た。

その青年の表情にあるものといへば、愛する少女に怪我がないやうに！ 愛する少女にもしものことがあるくらゐなら、自分が殺される方がよいといふ、純な犠牲的の愛情ばかりであつた。

松太郎は、お雪の乗つてゐる馬に追ひついた。

『お雪さん！ 私です、松太郎です！……私の家へ——！』

馬へ飛びかゝり、お雪を抱き下ろさうとした。

ところが、然ういふ姿勢は、松太郎の本心とは反對に松太郎が、お雪を襲撃してゐるやうに見えた。

『野郎！』

『小童！』

といふ聲と共に、お雪を守つて、その馬の左右に付いて走つてゐた落合部落の連中が、松太郎を遮つた。

さうして、その次の瞬間には、松太郎は地へ叩きたふされてゐた。

お雪は、沼のほとりで、十数人の毛間部落の者共に取圍まれてゐる庄三郎の姿を見かけ、その方へ馬をはしらせてゐたのであつたが、松太郎の叫び聲を聞き、その聲の來た方へ眼をやつた。

見覚えのある松太郎が、自分の部落の者たちに、地へ叩きたふされながら、抵抗しようとしないうで、負傷したらしく、顔を血に染めながら、思慕と、悲哀と、必死の——何んとも形容しようのない心持とをあらはした眼で、自分の顔を仰いでゐる姿が眼に入つた。

『松太郎さ——ン！』

お雪も夢中で叫んだ。

當然であつた。お雪は、何も松太郎を憎んでも嫌つてもゐるのではなかつた。

結婚を承知しなかつたといふのも、松太郎との結婚を特に承知しなかつたのではなくて、結婚といふやうなことを考へてもゐなかつたところへ、さういふ話が始つたので、たゞ、單純にことわつただ

けに過ぎないのであつた。

その松太郎が、そんなひどい目にあつてゐる！

物に動かされやすい、純の心の少女は、カーツとあがつて了つた。

『いけない——！ 松太郎さんをそんな目にあはせては……！ 助けて！ 助けてあげて……！ 松太郎

さんを助けてあげて……！ 松太郎さん！』

お雪は、自分から馬から降りて松太郎を助けようとした。

しかし、もう、その時には、兩方の部落の人たちが、二人をへだて、撲りあひ斬りあひして、拾收しようも無かつた。

ところで、お雪に、『庄三郎兄さ——ン』と呼ばれた鴨下庄三郎は、この頃、沼の岸邊で、襲ひかかつて來る毛間部落の者共を、あしらひ、何うしたものかと途方にくれてゐた。

彼は最初、この大群が、曠野へなだれ込んだ時、

(さては又も俺を沼へ沈めにかけてやうものやつて來たのか?)

と思つた。

しかし、その大群が、この岸邊まで押寄せて來て、自分たちをも捲込み、亂闘となつた時、その群の中に、見覚えのある落合部落の人々の顔があつたり、

『鴨下さんは何處にゐる』

『鴨下さんを助けろ』

といふ聲々が聞えたりしたので、

(さては、俺を助けようとして、落合部落の人たちがやつて来て、その人たちと、毛間部落の人たちが衝突したのか)

と思つた。

そこへ、

『庄三郎兄さ——ん』

といふ聞覚えのあるお雪の聲がきこえて來たのであつた。

そこで庄三郎はその聲の來た方を見た。

波のうねりのやうに見える群衆を抽んで、馬に跨つてゐるお雪の姿が、昔の古い綿繪の女武者かのやうに見えた。

審美性にも富んでゐる庄三郎はこんな自分の身の危険の際にも、そのお雪の勇ましい美しさが身にこたへ、

(これは繪だ！)

と呟き、その、無垢な、無邪氣な、純情な、自然兒そのものゝやうな繪の主人公に怪我でもさせてはと、その方へ走りだした。

しかも、もう、その行手へは、二つの部落の者どもが、二重にも三重にもかさなりあひ、撲りあひ斬りあひ組みあつて、庄三郎目がけても、十數人の毛間部落の者どもがかよつて來た。

(何うしよう?)

——すると、この時、

『こちらへ!……鴨下様!……わたしの家へ!……兎も角も一時のがれて!』

といふ聲がし、背後から、彼の腕を執つて引く者があつた。

振返つて見るとお鳥であつた。

(何うしよう?)

——お鳥の情熱的の憧憬と、懇願と、思慕と——さういふ感情をこき雜ぜた、燃えるやうな眼が、すぐに庄三郎の眼へ食ひこんで來た。

その眼が庄三郎を決心させた。

(さうだ、一時なりと、この女の家へ身を隠くさう!……大切な使命を帯てゐる身、犬死は禁物だ) 『お鳥殿、それでは、あなたの家へ!』

『此方へく！』

二人は、人波、人渦を掻分け拂ひのけて、向ふに見えるお鳥の家の方へ走つた。

この間にも、刑部者どもは、その本性をあらはして、落ちてゐる二部落の人々の、懐中物だの、武器だのを拾つたり奪つたりしてゐた。

毛間と落名の人々が死闘をつゞけてゐるのを見捨て、さうして、短い日時ではあつたが、一緒に起居した刑部部落の者共の、あさましい掠奪行爲をも見捨て、一人、鬭争の場をのがれ、沼のあなた、浅い谷の向ふに、そゝり立つてゐる、巨大な瘤のやうな岩山の方へ悠々と歩いて行く武士があつた。

本庄小源太であつた。

そゝけた鬚の毛を風になぶらせ、一時赤味さしてゐた顔色を冷靜な蒼白さに取返し、少し煤色を帯びてゐる唇へ、皮肉の嘲笑を浮べ、野袴の裾で、野の花を散らしながら、懐手をして小源太は歩いて行く。

詩でも吟じるやうに、くちずさんでゐる言葉を聞けば……

『わが志、南洋にあり……』

然う、彼は然うくちずさみながら歩いてゆくのであつた。

『馬鹿な奴等だ！』

と、彼は、突然、口に出して呟いた。

『小さな日本の、小さな富士山腹の、小さな部落の者どもが、小さなことで争つてゐる』

——南洋に向かつて發展でもしよう、この時代の日本人としては、破天荒の大きな志を抱いてゐて、そのため、譯のわからない浪人衆として、お鳥などに見られてゐるこの武士は、この二部落のあさましい死闘を目撃して、さういふ自分も、いつの間にか、彼等とひとしなみの、小さな、ケチくさい人間となつて、彼等の戦ひのそば杖を食つてゐたことに感付き、それが恥かしくなつたらしい。

(歸りなん、いざ、心のふる里へ！南洋へ！)

『しかし待てよ』

と、又、聲に出していつた。

『鴨下庄三郎の目的を邪魔して、明覺とかいふ行者を韭山の江川の手へ渡すまいとする、俺の目論見はどうなつたのだ？』

この戦ひの場をぬけて立去つたならば、庄三郎の行衛を見失ひ、自分の目論見を遂行することが出来なくなるではないか。……

(では、どうしたものだ？)

すこしく懷疑の心持になりながら、尙、小源太は同じ姿勢で、先の方へ歩いて行つた。

うしろからは、戦ひの聲や響きが、山つなみのやうに追つて来る。

(さあ、何うしたものだ?)

彼の歩みはだん／＼ノロクなり、彼の顔へは當惑の色があらはれた。

——日本人同士が斬合ひ殺し合ふといふことから、何一つ積極的の善い事が産まれて来ないのでないか。人的資源の消耗、物資の消耗、怨みや憎みや怒りの感情の増加——さういふ悪い結果ばかりが持来たされるではないか!——下らない!

かう思つて戦ひの場を脱けだした彼ではあつたが、自分の目論見を、それと關係させて考へた時、ヘタと行詰まらざるを得なかつたのである。

(矢張り引返して、庄三郎を探がしだして一思ひにたゞつ斬り!)

彼は足をとめた。

(それにお鳥ともゆつくり逢つて——お鳥と、こんな所で、こんな事情の下に逢はうとは——お鳥ともゆつくり逢つて話すのもわるくはない)

彼はグルリと振返つた。

彼の眼の先にひらけてゐる曠野では、依然として二部落の者が、斬合ひ撲りあひし、寄りつ離れつしてゐた。

と、俄に十數人づゝの人の群が、二組、左右から驅寄つて来たかと思ふと、急に立止まり、何やら言葉たゞかひをしてゐるやうであつた。

その様子は、どうやら、毛間と落合の長を守護して駆けまはつてゐた二組が、この時と／＼顔を合はせたといふやうに見えた。

(さうすると左五衛門と茂十郎とが顔を合はせたのだな)

と小源太は、俄に興味を覚え、片手を額へかざして眺めやつた。

その通りであつた。

部下に周圍を守らせ曠野を縦横にかけ廻つてゐた左五衛門と茂十郎とが、この時顔を合はせたのであつた。

『茂十郎さん!』

『左五衛門どん!』

部落の長同志であつた。言葉はさすがに丁寧であつたが、眼には憎惡の光をあらはし、口には復讐の齒をむき出し、得物を構へ、睨みあつた。

部下たちも必死を顔にあらはし、併し、大事を執つて、理不盡には斬合ひもせず、固唾を呑み、お頭の態度をうかゞつてゐた。

この二組の間へだけ、一瞬間、静けさがみなぎつた。

『え——い！ もうく云ふ事アねえ！』

と、突然、茂十郎が吠えるやうに云つた。

『先祖からの憎み合ひ！ お互ひ同志の嫁取り婿取りの怨み！……え——何んにも云ふ事アねえ！……行くぜ——ツ、左五衛門！』

『来いとも茂十！』

が——ツと二人ぶつかり合はうとした。

すると……

その時……

聞覚えのある明覚行者の吹く法螺貝の音が、何處からとも知れず、鯨の吠えるやうに聞えて来た。

茂十郎も左五衛門も、杭のやうに突立つたまゝ動かさず、いや、戦場の人ごとくくが、一時にその刹那、動作を止めて了つた。

たゞ一人だけ、歩いてゆく人物がある。

小源太で、

(あれは明覚の法螺貝らしい。……偉い力を持つてゐる。……矢張り彼奴を、江川の手へ渡しては不

可なりらし)

懐手をして悠々と歩き、やがて浅い谷の下り口まで来た。

そこで又彼は振り返つて見た。

曠野の面貌が變つてゐた。

もう戦つてはいなかつた。

人々は、向ふに一塊り、こつちに一塊りと塊まつてゐて、敵も味方もなく、ヒソ／＼と、額をつき

あはせ、話しあつてゐるやうであつた。馬は穩かに草を食つてゐるし、刑部者たちは、急いで身を隠

くさうとでもするやうに、幾組かに別れ、林の方へ走つてゐた。

雲の影が野の草の上を、ゆる／＼平和に渡つてゐる。

(わが志、南洋にあり！……しかし夫れは急がぬ將來のことだ。……今は、男の意地を貫いて、あ

くまでも、明覚めを……場合によつては叩つ斬り！……偉い力を持つてゐる奴だから……)

小源太は谷を降りた。

行者と媼

四谷沼の背後、瘴のやうな岩山の右側の裾に、松の木が繁つてゐて、涼しい蔭を作つてゐたが、そ

の根元に、吹き終へた大法螺貝を枕にして、明覺行者が寝てゐた。

山鳩が翔けて来て、彼の胸へとまり、啼いて、糞をして、機嫌よく飛去つた。栗鼠が、ブナの木の下から、彼の方を覗いてゐたが、體の二倍もありさうな尾を重さうに背負ひ、幹をつたはつて降りて来て、彼の足許へ先づ行き、足から腹、胸から咽喉と渡り、彼の唇を嘗め、安心し、地へ下り、法螺貝の中へ入り、その巨大な貝の口を自分の家と見立てたものか、坐りこみ、足の掃除をしはじめたが、何かに驚いたかのやうに、家を飛びだした。

この時、沼のある方とは反対側の、浅い谷の方から、矮林を分けて、白蓮の咲いてゐる木のやうなもの、が、ノロノロと動いて、此方へのぼつて来た。

静子媼の持つてゐる、あの巨大な御幣以外には、そんな怪物が、この人生にある筈はない。

しかし、その化物のやうな御幣が、谷の斜面をのぼつて此處まで来るには、まだ、なか／＼の時間を費さなければならぬやうであつた。

貝の口から飛びだした栗鼠は、明覺行者の足許から二間ほどはなれた所まで行つて立止まつた。そこに泉が流れてゐたので、それで咽喉をうるほさうとしたものらしい。

しかし、それは泉ではなくて、四谷沼から流れ出て来る水であるといふことは、その水が、可成り濁つてゐることを知ることが出来る。

さう、もし、誰かゞ、その泉のやうに見える水の流れに添つて、その流れを蔽うてゐる、野茨、榊、箱根卯木、石楠花などの灌木や藪を分け、さうして、その流れの左右にそ／＼立つてゐる燐岩の裂目を辿つて行つたなら、やがて、四谷沼の横つ腹へ行きつくことが出来る、その横つ腹のひと所から、沼の水が洩れて出てゐるのを見ることが出来るであらう。

栗鼠は水を飲まうとして小さい鼻づらを流れの中へ浸しかけたが、又も何かに驚いたやうに一刹那はねて、元の木の葉蔭へ駆けあがつた。

流れの中に、二升樽ほどの蝦蟇が居て、パツと、その鰓口のやうな口をあけたからである。

蝦蟇はやがて水から出て、大名のやうに威厳はあるが又大名のやうに滑稽でもある歩きかたをし、寝てゐる行者の方へ寄つてゆき、足の邊まで行つたが、そこで鈴のやうな眼を据ゑ、行者を見、それが、我々のお友達であるところの明覺行者だと確かめると、納得したやうに引返し、ふた／＼び水の中へ安住した。

時が経つて行つた。

こゝにあるものは平和と静けさと小動物たちの自然さながらの生活とであり、さうして明覺行者の在る所には、いつも自然と静けさと平和とが伴つて存在してゐるやうに思はれた。

このとき、静子媼が、果して、例のご大相もない大御幣を杖つきながら、谷のふちから、上がつて

来た。

行者の寝姿を發見するや、

『ま、明覺さんが……』

と叫ぶやうに云つた。

眼は大法螺貝に注がれてゐる。

明覺行者をさがし出し、法螺貝を奪ひとり、おやまに埋藏されてゐる傳説の黄金の在場所を知らうと、茂十郎の屋敷の門前から、部落の衆と別れ、一人、山腹や谷をさがし廻つてゐた静子媼にとつて、こゝでその行者をさがしあてたことは、ひとゝほりならない喜びなのであつた。

(法螺貝の音がきこえてきたから、たいがい行者はこの邊にゐるだらうと見當つけて來たところ、矢つ張りゐた。ヤレ、有難いごときだ。……ところでどうして法螺貝を手に入れたものか?)

媼はソロ／＼と行者の枕元の方へ寄つて行つた。

黒柿の吹口をつけ、總のついた紫の打紐で胴を結んだ、巨大な法螺貝は、穩かに眼をとち、平和に口を結んだ明覺行者の顔を載せて、半分地面の草の中にうづもれてゐる。

(眠つてゐるらしい)

そこで媼は、大御幣を地へ置き、自分も近々と行者の枕元へ坐り、ソロ／＼と手をのばした。

でも、その手が法螺貝へ觸れた途端、

『わしは今、夢を見てゐてのう』

と云ひながら行者が起上がった。

ギョツとして、テレて、媼は手をひつこめ、

『氣持よさうに眠つてゐると思つたが……夢をね』

『折角、役ノ小角様と夢の中でお話をしていると、小角様が、その邪惡と、慾深とお怒らしのため大木の股へ挟んで、呪縛した葛城山の惡神の一言主めがあらはれて來て、わしの持つてゐる法螺貝を盗まうとする夢を見てゐたのだよ』

『法螺貝をね?……盗まうと……あれマア……』

『いやな一言主ぢやのう』

『いやな一言主ともよ』

こゝで二人はちよつと黙つて、互ひに顔を見合つた。

何物をも憎まず、何物をも平等に愛すといつたやうな、やさしい行者の眼の瞼の上に、松葉ごしの陽がこぼれてゐて、チロ／＼と耀つてゐる。

『媼よ』

と、微笑してゐるやうな口からいつくしむやうな聲が出た。

『久しく逢はなんだがたつしやさうな』

『有難う。……お前様も……』

『はい、たつしやです』

また二人は黙つて、見詰めあつた。

静子嬢の、聰明ではあるが、狂信的でもある、窪み加減の、光の鋭い眼は、兎もすると、淡々と水のやうな光しか湛へてゐない行者の眼に、睨み負かされさうであつた。

『明覚さん』

と、やゝあつて嬢が云つた。

『法螺貝、お前さまにとつて、大切な？』

『嬢よ』

と行者が答へた。

『その御幣、お前様にとつて大切な？』

『それは最う……』

『では、わしも、それは最う……』

(負けた)

と嬢は思つた。

二人は又沈黙し、二人の間の地面に咲いてゐる雪の下の花へ蜂が来て、蜜をあさり出した。

『嬢よ』

と、しばらく経つた時明覚行者が云つた。

『わしと役ノ小角様との夢の中での問答をきかしてあげようかの』

『さあ』

静子嬢にとつては、そんな夢物語を聞かせてもらふより大法螺貝を手に入れたのであつたが、その法螺貝は、明覚の手によつて、明覚の膝のうへに抱へられてゐるので手が出せず、隙を見て取らうとするには、相手を油断させなければいけないし、油断させるには相手の話でも機嫌よく聞いてやつてと……

『聞かして下され』

『わしは役ノ小角様へ、かう云つておたづねしたものだ「あなた様は、鐵鉢の中へお母様を盛り、空を翔けて唐へお渡りになつたと、もつばら後世の人が申してをりますが、そのやうな奇蹟を事實おやりになつたのでございますか？」とね。……すると小角様は仰せになつた。「明覚よ、お前は奇蹟と

いふものをどのやうに解釋してゐるのかね？」つてね。……そこで私は「だいたい、普通の人には出來ない、不思議な、あらたかな行ひと、このやうに解釋してをります」とお答へすると「それは違ふ。奇蹟とは、萬人が、斯うありたい、かうして貰ひたいと願望してゐることを、してやることなのだよ。——たとへば、誰も彼もが、鳥のやうに空を翔けることが出來たら、どんなにか便利で、どんなに愉快だらう。是非鳥のやうに空を翔けたいものだと思ふよ。……さうしておそらく誰も彼もが、お母さんへは孝行したい。お母さんを氣輕に連れて、珍しい外國——唐土へでも行つて見物させてあげたらどんなにかよからうと願望してゐることと思ふよ」「それはもうその通りでございます」「そこで私はその萬人の願望を代理となつて遂げてあげたのさ。……即ち、鳥のやうに空を翔けて、お母さんを氣輕に鐵鉢の中へ盛つて唐土へお連れし、見物させてあげたのだよ」「でもそのやうなことが出来るものでございませうか？」「萬人が萬人願望してゐることは、いつかは、誰かゞ、きつと爲遂げてくれるものさ」「それでは、人間が空を翔けるやうになりませうか？」「なるとも。……空を鳥のやうに翔けるやうにもなるし、海の中を魚のやうに駛ることも出来るやうになるよ」「それを最初になし遂げたお方は、お偉いお方なのでございませうね」「さういふ人のことを先驅者といふのだよ」「先驅者となるにはいろ／＼苦勞をしなければいけませんよ」「強い信念と不斷の努力をしなければいけない」「その人の生きてゆく道は苦しいでせうね」「苦しいとも。その

道は、決して花や香水で飾られた平らな道ではなく、茨だの、岩だのに蔽はれた険しい道だから。それに、その道を行かせまいと邪魔をするものも出てくるしな」「敵ですな」「さうだよ。……だから命などいくつ有つても足りないやうな、危険な目にも逢ふのだよ」と、わしと小角様とは問答したよ」

明覺はかう云ひく、膝の上の法螺貝を、うつかりと、膝の前の草の上へ置いた。

すると、すぐその前に坐つてゐる靜子媼の手が動き、ソロ／＼と貝の方へ延びて行つた。

『わしと小角様との問答は、それからも續いたのだよ、……話さうかな』
と、ノンビリと明覺は云つて、靜子媼の手の動きには不注意であつた。

『さうだ、それから、わしと小角様との問答はつゞいたのだよ「小角様、鎌倉時代に、元の國が十萬の大軍を數百隻の軍艦に乗せて、日本へせめて参りました時、神風が吹いて、一夜に元の軍艦を沈め、十萬の兵を殲滅いたしたさうですが、これなどは奇蹟でございませうね？」と、私はおたづねしたのだよ』

と明覺は夢物語語りをつゞけた。

『すると小角様は「さうだよ、明覺やあれは奇蹟なのだよ。ところでどうしてあゝいふ奇蹟がおこつたかといふに、あの時、上は 龜山天皇様をはじめ、奉り、執權の北條時宗公や、いや日本人といふ

日本人全部が、即ち萬人が、どうしても元軍を殲滅したいと願望し、さうして、きつと殲滅してみせると信念し、さうして、その信念に比敵するだけの努力——小貳、大友、菊池などといふ鎮西の諸將は、小船に乗つて元軍の大船へせめかゝるし、日本中の兵といふ兵は、九州さして馳せくだるし、天皇様には、神々へ御祈願あそばされるし、人民といふ人民は、こぞつて獻金をし、租税をごまかすやうな者は一人も無く、努力に努力をし、願望と信念と努力とが、三位一體的に一致したので、神が感應ましく、あゝいふ神風といふ自然物の形を以つて奇蹟を行はせられ、日本をお救ひになつたのだよ」「それでは、願望と信念と努力と一致すれば必ず奇蹟はあらはれるものでありませんか？」「必ずあらはれるよ……しかし、奇蹟があらはれてもらひたいと希望してはいけない」「なぜでございますか？」「奇蹟を希望する心は、ゆるみのある心だからだよ」「はゝあ」「さういふ心の持主の所へは奇蹟はあらはれない。それとは反對に、奇蹟など待ち望まないで、自力で事を斷行する人のところへ奇蹟はあらはれる」……かう小角様は仰せられるのだよ」

明覺がこゝまで語つて來た時、靜子媼の手が、明覺の膝の前の法螺貝へかゝつた。

すると、その途端に、いや、それより速く、明覺の手が法螺貝をとりあげ、自分の膝の横へ置き、

『小角様とわしとの問答はまだくつゝいたのだよ。……もつと話さうかな』

『もう澤山』

と、靜子媼は、法螺貝を奪ひそこなつたので、怒り、テレ、恥かしくなり、

『夢物語りなどよりわたしにとつては、その法螺貝の方が……いゝえさ、そこでわたしはお前さまにおたづねするが、莫大な黄金を手に入れたいといふこの願望は、萬人の願望でありませうね』

『それはもうく……』

かうは云つたが、明覺は、もう靜子媼が、自分の夢物語を聞いてくれないといふので、ガツカリして、言葉に元氣がなかつた。

『まして、地の中に隠し埋めてある莫大な黄金を手に入れるといふ願望などは、萬人が萬人望んでゐる願望でせうね』

『それはもうく……さうですとも』

しかし、矢張り、靜子媼が、自分の夢物語を聞いてくれないといふので、明覺の聲には元氣がなかつた。

『ではその願望を遂げようきつと遂げて見せると信念し、それに努力したら奇蹟が現はれて……』

『それはもうく……』

でも、矢張り、行者の返辭には元氣がなくて、うはの空であつた。

『そこでわたしは明覺さんへおたづねするが』

と、媼は、行者の膝の横に置いてある法螺貝の方へ、見えないほど少しづつ、自分の膝をすゝめながら、

『このお山の何處かに、昔、源頼朝公が、莫大もない黄金を隠し埋め……』

『あゝその話なら……』

と、明覺は、例の氣のない聲で遮つた。

『わしは耳にタコの出来るほど聞いてをります。……落合へ行つても毛間へ來ても、刑部へ行つても……』

『そのお山の埋藏金のこと、わたしに奇蹟があらはれてね』

『ほう』
と、すこし、興味を覺えたらしく、明覺が首を前へのばした時、静子媼はズルリと膝を法螺貝の方へ進め、

『お告げがあつたのさ』

『ナ——んだ』

と行者は首を引込めた。

そこを狙つて又媼は法螺貝の方へ膝を進め、

『それといふのもわたしが、萬人の願望を叶へさせ、その埋藏金の在場所を發見し、掘出してやらう、いや屹度掘出してみせると信念し、努力したのが神に通じ、奇蹟をお現はし下されたのだと思ふよ』

『ナ——んだ』

『お告げによれば……』

『おいよ』

『明覺行者の……』

『わしのことかな』

『法螺貝さへ……』

『こいつをね……』

『手に入れさへすれば……』

と、今は遠慮會釋なく、がむしやらに媼は法螺貝へ飛びかゝつた。

『ドッコイ』

と、その途端に、明覺は法螺貝を抱いて立ちあがり、

『渡されぬて』

『渡せ！取る！』

と、媼もつゞいて立ちあがり、例の巨大な御幣を取上げた。

「媼よ、おさらばと行かうかの」

「何んだと」

「わしは江戸へ行くのぢやよ」

「ナニ、江戸へ？」

「静かであつてこそお山もあらたかで有難いが、この頃のお山さわがしくてのう。……部落同志の戦ひさへあつて。……そこでわしは考へたのぢや、いつそ騒がしいのなら、思ひきつてさわがしい江戸へ行つて、その騒がしさに慣れる修行をしようとな」

「法螺貝をよこせ！」

「媼よ、秘密をひらくには鍵が入用の筈ぢや」

「何んだと？」

「媼よ、お山に埋めてあるとかいふ黄金の話、その秘密の在場所を知るには、秘密を開ける鍵がある筈ぢや」

「その鍵が法螺貝なのぢや」

「果して然うだらうか？」

「お告げに嘘は無い！……法螺貝をよこせ！」

と躍りかゝつた。

それをかはして、明覺は、右手が山腹、左手が谷になつてゐる細い道を、麓の方へ歩き出した。

「遁してならうか！」

と媼は追ひすがり、とう／＼法螺貝へ手をかけた。

その静子媼の手にかゝり、法螺貝の胸をゆはへてゐた、總のついた紫の打紐のむすび目がとけて、紐ばかりが媼の手に残り、貝をかゝへた行者は、もう十數間の向ふをあるいてゐた。

舌打ちと共に媼は、紐をうしろさまに投げ捨て、

「待て、明覺！」

と叫んで、追はうとしたが、山で鍛へた稀代の速歩の明覺行者へ、女の手で追ひつく術はないと感じたらしい、例の巨大な御幣を頭上にふりかざすや、念力こめて、明覺を目掛けて投げつけた。

銚だ！

さう、御幣は、そのしらゆふを白髪かのやうに靡かせ、宙を、銚のやうに飛んで、明覺をうしろさまに、腰から腹まで貫き、明覺は御幣に刺されたまゝ、崖から谷へ舞ふやうに落ちて行つた。

——と、そんなふうに見えたが、事實は、投げられた御幣の柄へ、明覺はフワリと跨がり、白馬で

も禦するやうに御幣を禦して、谷を越し、空を渡り、麓の樹海めがけ、飛行して行くのであつた。

『……』
あまりの意外と、あまりに見事な放れ業を見せられて、静子媼は聲も立てられず、呆然と立つて、行者の姿を見送つてゐたが、やがて、

『あれこそ奇蹟だ！……では、あの明覺は役ノ小角のやうに偉い行者なのであらうか？……わたしはあの男の法螺貝を取ることが出来なかつたばかりか、わたしの大事な御幣を取られてしまつた！わたしはどうしよう！』
と喚いた。

その時、緑の泡のやうな矮林に蔽はれた谷を入江とすれば、その入江を縦に渡る大鳥のやうな行者が、御幣の上から此方を振り返り、陽の加減で、朱盆のやうに赭く見える顔の、口のあたりへ法螺貝をあて、貝を通して、聲を響かせた。

『媼よ、わしは、お前へ、秘密を解く鍵を呉れてやつたよ！』

『何をいひをる！』
と媼は、嗚鳴りかへした。

『貝を渡してもしないで！』

『媼よ、鍵を見失ふまいぜ！』

行者の顔は向ふを向き、形が次第に小さくなつて行き、谷の縁は騒立ち、小鳥は驚いてつぶてのやうに飛立ち、谷底の川は、矮林の間から、これも吃驚した小供の眼のやうな光に輝き、谷全體が、明覺行者の超自然的の行動を嘆美してゐるやうな中に、いよ／＼小さくなつてゆき、やがて消えた。

『あの鹽梅なら……』

と、見送つてゐた静子媼は溜息をした。

『唐土へまでは行かずとも、江戸へまでは行くかもしれない。……では、わたしも江戸まで追つかけて行つて。……それにしても、あの行者、わしに、秘密を解く鍵をくれたと云つたが……』

兩手を見た。

『からつぽぢや！』

あたりを見まはした。

『見慣れた景氣ばかりぢや』

地面を見た。

『蟻が這つてをるばかりぢや』

明覺と小源太

静子嬢が谷の上で明覺行者を罵つてゐる時、その明覺は、谷底の矮林の中へ、巨大な御幣もろとも降り立つた。

『やれ〜』

と彼は呟いた。

『あぶなかつたよ』

それから、御幣を右手に法螺貝を先手に持つて歩きだした。

色濃い木々の緑へ、いつか夕暮になつてゐる陽がからんで、表葉は明るく裏葉は暗く、さうして、根元などに咲いてゐる白い草の花をばや、薄黄に、紫の花をばや、紺色に變へてゐた。

『よくまああんな輕業が出来たものだ』
かうも呟いて明覺は歩いて行つた。

『あれは時のハズミと、日頃からお山で體を鍛へて、身が軽くなつてゐたのと、死んぢやアつまらな
しと思つて一生懸命神様を念じたのと、静子嬢が念力こめて投げた御幣に、まだ勢ひが残つてゐて、
それらのものが旨く合致して、あんな役ノ小角様のやられたやうな奇蹟じみたことが出来たものらし

し。……とにかく一度でもあんなことが出来たのだ。勉強すると幾度でも出来るかもしれない』
こんなことを呟いてゐる明覺であつた。

『免よ』

と突然氣の毒さうに云つた。

『悪かつたのう』

熊笹の下に野鼠がゐたのを知らずに、うつかり踏んだと見えて鳴聲が聞えた。

(殺したかしら?)

いや、鳴聲が齒朶の葉の方へ移つて行つた。

『やれ安心』

ほがらかの顔になつてノツシ〜と歩いて行く。

その時、うしろから、

『明覺殿!』

と呼ぶ聲がした。

『は』

と振り返つた。

『やはり明覺だつたか！ くたばれ！』
疾風迅雷！ 物體と嵐と白刃とが一つになつて、行者を襲つた。

『……………』

しかし次の瞬間には、巨大な御幣が一本地面に突立ち、頂の白木綿が木蓮の花のやうに揺れ、その向ふに、拔身を構へた本庄小源太が立つてゐるばかりで、明覺の姿は見えなかつた。

（行者めは？）

小源太は、その驚のやうな眼であたりを見廻した。

（消えた！）

眞向を望んで抜打ちに斬付けたのに、手答へもなく、明覺は消えてしまつたのである。

野袴の裾にはいら草の葉がからみ、背割羽織の袖は切れ、戦ひの場をぬけ出し、谷を下りて来た人間らしく、小源太の姿はよごれてゐたが、顔には精悍の氣が漲つてゐた。

（偉大な力を持つてゐるらしい明覺といふ行者、場合によつては叩つ斬つて……………）

と、かう思つて、谷へ下りてからも、その行衛をさがしてゐたところ、それらしい行者を目付けたので、まづ『明覺殿』と呼びかけ、返辭があつて、たしかに明覺とわかつたので、斬りつけたところ消えられてしまつたのである。

（消えたとは？）

呆然として佇んでゐると、行者の聲が、意外の方角からきこえて來た。

小源太のうしろ十數間の所に、高い岩山が聳えてゐ、そこから瀧が落ちてゐるその瀧の中央の邊に、巖が瘤のやうに突出てゐたが、その上に明覺が、居心地よささうに腰かけてゐた。

『亂暴なお人ぢや』

と明覺は云つた。

『何んにも悪いことをしないわしを殺さうとするのだからな。……………見れば都會の人らしいが、都會には、江戸には、お前さんのやうな亂暴者が澤山ゐるのかね。……………もし然うだとすれば、これはよく注意しなければいけないな。……………わしは江戸へ行くのだから』

『ナニ、江戸へ行く』

と云ひながら、小源太は、瀧の方へ進んで行き、

『それにしても、いつ、どうしてそんな所へ？』

『ナニネ、わしはお山で體を鍛へてゐるので身が軽く、飛びあがつたり飛びおりることなどは樂なものさ』

明覺は、膝の上の法螺貝を両手で撫でながら、

『怨まれてゐれば人にも殺される。ところがわしは誰にも怨まれてゐない。金でも持つてゐれば、殺されるかもしれない。ところがわしは、ごらんのとほり貧乏な行者で金など持つてゐない。どう考へても人に殺されるやうな理由はない、それなのに……亂暴な人ぢや』

明覺はひどく不平さうであつた。

小源太は、明覺を仰いで見ながら、どうしてくれようかと思案した。

（逢つてみれば、この明覺といふ行者、いよ／＼容易ならぬ人物らしい。……これでは良士の在場所など勿論知つてゐるだらう。江川太郎左衛門の、大砲鑄造の片腕——よき助言者ぐらゐにはなるかもしれない。此奴を葦山へやつてはいけない。……いや此奴を生かしておいてはいけない。……しかし、どうして殺さう？）

登つてなど行けさうもない斷崖の上に、その明覺はゐるのであつた。

（どうして殺さう？）

（ナ——ニ、これがある！）

右手が稻妻のやうに腰の刀の鞘へ行つたかと思ふと、飛魚が閃めくかのやうに、宙を、小柄が閃めき通り、それが行者の咽喉を……

『また亂暴か！』

聲ばかりが聞えて、又も行者の姿は消え、大巾の銀の板か、水晶の廉かのやうに懸つてゐる瀧の横、黒茶色の岩瘤の上に、大法螺貝がその亂暴者を嘲笑ふかのやうに、巨大な、間の抜けた口を、こつちへ向けて置いてあるばかりであつた。

（また消えたか）

と、小源太は、その法螺貝を見上げながら呟いた。

すると、法螺貝が、ひとりでに動いて、ソロリと位置を變へた。

『おや』

小源太は眼をみはつた。

その眼の前で、又も貝は、ソロリと歩き、位置を變へた。

『あれ』

と小源太はいよ／＼驚き、ます／＼眼をみはつた。

（行者は一體どこにゐるのだらう？）

途端に、

『見えないのか？ 眼の前には……』

といふ明覺の聲がきこえて來た。

成程、つく／＼見ると、明覺は小源太の眼の前、矢張り瀧の懸かつてゐる斷崖の、岩窟の下に、その斷崖へピッタリと體をはりつけてゐた。
斷崖の色や、苔の色や斷崖に生えてゐる矮樹や、雑草の色や、それに夕陽にきらめいてゐる瀧の水の光や——さういふものに保護されて、明覺の姿が、見えなくなつてゐるのであつた。
かういふ現象を、

擬態といふ。

その擬態の本質は、周囲の色や光を利用して、自分の體を隠すことである。

だから、それは、妖術でもなければ奇蹟的現象でも無く、完全に科學的現象なのである。

では、明覺が、さういふ科學的現象の擬態を使つて、自分の身を隠したのであらうか？ 科學を知つてゐて、それを活用したのであらうか？ いや、さうではなくて、自分が富士山その他の峻しい山で、肉體と精神との鍛錬をした結果が、おのづと、それに一致した迄であつた。

『ホー』

と小源太は驚嘆して叫んだ。

『まるで奇術だ！』

奇術だと叫ぶ小源太の眼の前で、大法螺貝は、ソロ／＼と、又も歩き出した。

それとて何んの不思議も無かつた。明覺が手を伸ばして、大事な法螺貝を、ソロ／＼と自分の方へ引寄せてゐるに過ぎないのであつた。

でも、その行爲も、矢張り擬態作用で、明覺の手そのものは見えないで、法螺貝ばかりが、動くやうに見えるのであつた。

さて、ソロ／＼と歩きだした貝と、その貝を引寄せてゐる明覺行者とは、やがて、瀧の中へ入つてしまつた。

『ホー』

と、又も、小源太は云つて、瀧を覗んだ。

それといふのも、明覺が、法螺貝を持つて、やがては瀧の中から出て來るものと思へたからである。でも、いつまで経つても、瀧の中から明覺は出て來なかつた。

瀧は、只、ひたすら、瀧として大量の水を、無雜作に、高い所から下へ落下させてゐ、夕映の色を強めた夕陽が、その瀧の面を、虹のやうに赤—黄、紫—その他の色に、彩色し、その瀧の水を飲まうとして、野猫や、貂や、兎やが瀧壺の上へあらはれて、小源太の方を盗み見しながら、しかも、小馬鹿にしたやうに、悠々と、水を飲んで、去つた。

小源太は、いつ迄も瀧を覗んでゐた。

しかし、いつ迄経つても明覺行者が出て来ないので不安を感じ、あたりを見廻し、背後をふりかへつて見た。

『ヤ——ッ』

と、彼は、悲鳴のやうな聲をあげた。

先刻まで地面に突立つてゐた巨大な御幣が無くなつてゐて、その立つてゐた地面の穴から野鼠が顔を覗かせてゐたからである。

『さては、行者め！』

さやう、さては明覺行者め、いつの間にか瀧から出て、御幣を持つて、江戸に向かつて發足したらしい。

さかり場

さういふ事件が起つてから幾月か経つて、秋となつた。

こゝは江戸の、西兩國の盛場である。

その盛場の目抜の廣小路には、見世物、猿芝居、女相撲、手品の小屋などがピツシリ掛かつてゐ、武士、町人、おのぼりさん、折助、丁稚、醫者、野太鼓、さういつた種々雑多の人間が通つてゐた。

だから、その掛小屋だの、定見世の小屋の表には、幟だの旗だのがハタメキ、木戸番の爺は、聲をからして客をまねいてゐた。

さうかと思ふと、隅田川に向いた岸には、休茶屋や小料理屋が暖簾を川風にはためかせ、赤前垂の女が、出たり入つたりしてゐた。

こゝは謂はゞ江戸の——さうして人生の掃溜のやうな所で、イカモノも集まつて来れば平几帳面のものも寄つて来る、拘摸が仕事をしてゐるかと思ふと、私娼がお店者の袖を引いてゐる。大名のお留守居役が、料理屋の奥座敷で出入商人の饗應を受けてゐるかと思ふと、狭いきたない露路では生活難の夫婦が心中の悲しい相談をしてゐる。

興行物なども、筋の通つた立派な藝人が、資力のある太夫元の手で、その藝を賣つてゐるかと思ふと、丹波で捕れた山男だとか、熊野沖で手に入れた人魚などといふひどい食はせものが、結構商賣物となつて登場してゐる。

けばくしい色、さわがしい聲や音！

江戸中で——だから日本中で、こゝほど雑駁の所は他にないのであつた。

さて、今は夕暮で、隅田の川面から、こゝ廣小路へかけて、お精靈蜻蛉が飛びみだれ、その透明の羽根を、夕陽が銀のやうに光らせてゐた。

その時、一人の武士が、往來の人にまじつて、兩國橋の方から廣小路の方へ歩いてきたが、大きな
葎張りの掛小屋の前まで来ると、立止まり、繪看板を見上げた。

鴨下庄三郎であつた。

『富士行者の品玉とは？』

と呟いた。

丸太と葎と半けづりの板と杉根縄とで、伽藍ばかり大きく、少し烈しい風でも吹いたら仆れさうな
ほどにもあぶなつかしく作られてゐる掛小屋の表に、二間に一間の繪看板がかゝつてゐ、泥繪具で、
一人の行者が、自分の身長よりも高い御幣と大法螺貝とを持ち、黒茶色の岩壁の前に立つてゐる姿が
描いてあつた。

それを見上げて、さう庄三郎は呟いたのであつた。

(富士行者といふのが氣にかゝるな)

と彼は思つた。

主人江川太郎左衛門の命で、富士行者明覺を、富士へさがしに行つた彼であつた。

意外のことから毛間部落の四谷沼のほとりで大難に遭ひ、お鳥といふ女に助けられたところ、その
日の夕方、その女の母親だといふ静子媼といふ巫女が狂亂のやうな姿で歸宅して、

『明覺行者に御幣を取られた。その明覺は江戸へ行つた。だからわしも行くのだ』
とわめいた。

それを聞くと、引止めるお鳥を振り切り、その日のうちに下山し、江戸へ出、今も明覺の行衛をさが
してゐる彼であつた。

(富士行者は明覺一人とはかぎらないが……併し……)と庄三郎はなほ繪看板を見つづけた。

(外でとやかく思案してゐたところで仕方がない。内へ入つてみよう)

と庄三郎は、木戸錢をはらひ、小屋の内へ入つた。

榎も切つてない土間にアンペラを敷き、その上へちかかに坐つてゐるものや、座布団を買つて敷き、
煙草盆を買つて、煙草のみく見物してゐるものや、——ひまをもてあつかひかねた隠居とか、何
んでも物珍しがる勤番侍とか、骨をしみをするお店者とか、その種の見物が、六分どほり詰まつて
ゐた。

庄三郎は、それでも棧敷のつもりか、小屋の左右に柵をつくり、一段高くしてある座敷があつたの
で、そこへあがり、座布団を買つて坐つた。

正面の舞臺に張りまはしてある布へ、泥繪具で、岩壁が描いてあり、その前に一人の山伏が、六尺
もあるらしい大御幣を突き、大法螺貝をかゝへて立つてゐ、その横に、たつ、けを穿き、筒袖を着た